

琴曲歌の葉

255  
206

074455-000-5

特23-229

琴曲歌の葉

河野 源太郎/編

M41

CEI-1724









いもがしら	二十七丁	花紅葉	三十五丁	ほとぎす	四十二丁
妹春山	二十七丁	花盗人	三十五丁	ほたる火	四十三丁
妹春川	二十八丁	春の雁	三十五丁	ほうづき	四十三丁
稻むしろ	二十八丁	花ごころ	三十六丁	蓬菜	四十四丁
糸の縁	二十九丁	春の假名	三十六丁	●へ之部	
いざゝめ	二十九丁	初鳥	三十六丁	●と之部	
井筒	二十九丁	花の旅	三十七丁	紅の文	四十五丁
●ろ之部		はで浴衣	三十七丁	●と之部	
六段戀慕	三十丁	春の色	三十八丁	鳥邊山	四十五丁
六歌仙	三十丁	花の君	三十八丁	常盤木	四十六丁
ろうさい	三十一丁	花かさね	三十八丁	泊り船	四十七丁
●は之部		羽織つま	三十九丁	屠蘇酒	四十七丁
春の曙	三十二丁	放下僧	三十九丁	鳥追	四十七丁
ばんせい獅子	三十二丁	春の鳥	四十丁	とけす	四十八丁
春日かげ	三十三丁	肌知らず	四十丁	●ち之部	
萩の露	三十三丁	春草	四十二丁	長想思	四十九丁
春の契り	三十三丁	春胸	四十二丁	茶おんど	五十丁
春がさね	三十四丁	梅月	四十二丁	竹生島	五十丁
初音	三十四丁	花の香	四十二丁		

目

次

二

千歳草	五十二丁	おちま乳人	五十九丁	片し貝	七十二丁
千代の友	五十二丁	老の友	六十丁	神樂初	七十二丁
散紅葉	五十二丁	老松	六十丁	神谷河	七十三丁
千鳥	五十二丁	おけとり	六十一丁	通ふ神	七十三丁
塵づか	五十三丁	おはつ	六十二丁	かくれんぼ	七十四丁
●ぬ之部		を	六十三丁	川千鳥	七十四丁
濡つばめ	五十四丁	お七	六十三丁	門松	七十五丁
濡扇	五十四丁	落葉	六十三丁	楫枕	七十五丁
●る之部		●わ之部		龜遊	七十五丁
留主の思ひ	五十五丁	別のかね	六十四丁	邯鄲	七十六丁
●を之部		和歌の縁	六十四丁	かはづ	七十七丁
女手まへ	五十六丁	若菜	六十五丁	かたいた	七十七丁
女狸々	五十六丁	●か之部		神樂	七十八丁
沖の船	五十七丁	かねが卿	六十五丁	鐵輪	七十八丁
沖の石	五十八丁	鎌倉八景	六十八丁	龜のつがひ	七十九丁
女郎花	五十八丁	鹿子づくし	六十九丁	●よ之部	
おぼこ菊	五十八丁	桂男	七十丁	夜々の星	八十丁
老松	五十九丁	春日野	七十丁	四つの色	八十二丁
落し文	五十九丁	かづき面	七十一丁	横づら	八十二丁

目

次

三



目

次

四のそで 八十二丁  
 吉野川 八十二丁  
 宵の夢 八十二丁  
 呼子鳥 八十二丁  
 四ツのくさ 八十三丁  
 四ツの民 八十三丁  
 淀川 八十四丁  
 よるべ 八十四丁  
 吉野 八十五丁  
 ●た之部

道中双六 八十五丁  
 丹頂の鶴 八十六丁  
 龍田川邊 八十七丁  
 玉の椿 八十七丁  
 高瀬舟 八十七丁  
 竹の縁 八十八丁  
 玉かづら 八十八丁  
 玉つばき 八十九丁  
 瀧盡し 八十九丁

寶の船 九十丁  
 高尾山 九十丁  
 玉の臺 九十一丁  
 大佛 九十一丁  
 高砂 九十二丁  
 たはぶれ 九十二丁  
 玉川 九十二丁  
 たぬき 九十三丁  
 ●れ之部

連理 九十四丁  
 ●そ之部

月の枕 九十七丁  
 鶴の嘴 九十七丁  
 葛の葉 九十七丁  
 露の蝶 九十八丁  
 筑波山 九十八丁  
 つきの巖 九十九丁  
 椿盡し 九十九丁  
 つま紅る 九十九丁  
 鶴の龜 九十九丁  
 つれづれ 百丁  
 鶴の聲 百丁  
 釣瓶 百丁  
 鶴のすこもり 百二丁  
 ●ね之部

根引の松 百三丁  
 閨の扇 百三丁  
 閨の文 百四丁  
 寝耳 百四丁

ねはん 百四丁  
 ねざめ 百四丁  
 子の日 百五丁  
 ●あ之部

難波獅子 百五丁  
 名取川 百六丁  
 夏景色 百七丁  
 夏衣 百八丁  
 七むかし 百八丁  
 七小町 百八丁  
 名護屋帯 百九丁  
 菜種里 百十丁  
 夏の妻 百十丁  
 夏の空 百十丁  
 七草 百十丁  
 あでしこ 百十一丁  
 菜の葉 百十一丁  
 ●む之部

室の梅 百十三丁  
 ●の之部

浮船話 百十五丁  
 裏表 百十六丁  
 歌れんぼ 百十六丁  
 宇治めぐり 百十七丁  
 浮寝 百十八丁  
 梅の宿 百十八丁  
 善知鳥 百十九丁  
 浮れ蝶 百二十丁  
 梅の月 百二十丁  
 鞆の猿 百二十一丁  
 うち盤 百二十一丁  
 梅が枝 百二十二丁  
 鶴飼 百二十三丁  
 浮舟 百二十四丁

野遊び 百二十四丁  
 ●く之部

雲にかけ橋 百廿五丁  
 愚痴男 百廿五丁  
 黒髪 百廿五丁  
 口きり 百廿五丁  
 葛の葉 百廿六丁  
 花月 百廿六丁

目

次

●や之部

八千代獅子 百廿七丁  
 宿の春雨 百廿七丁  
 八重霞 百廿七丁  
 やばらしい 百廿七丁  
 八重鳥 百廿八丁  
 八重梅 百廿八丁  
 山路の菊 百廿八丁  
 大和文 百廿九丁  
 八重衣 百三十丁

●の之部

百廿四丁



山姥  
八島

百三十一丁  
百卅二丁

●ふ之部  
富士太鼓  
福壽草

百四十丁  
百四十一丁

こゝろいき  
戀ばあし  
こばんかう

百五十二丁  
百五十三丁

●ま之部  
萬歳獅子

百卅三丁

福壽草

百四十二丁

此きみ

百五十三丁

松の毒

百卅四丁

ふた心

百四十三丁

腰づけ

百五十四丁

松の二葉

百卅四丁

冬の月

百四十三丁

こすのと

百五十四丁

松す鏡

百卅五丁

筆の輪

百四十三丁

●て之部  
こすのと

百五十五丁

松づくし

百卅五丁

ふところ

百四十三丁

●あ之部  
出口の柳

百五十六丁

松の月

百卅六丁

船のゆめ

百四十四丁

蝶の名残

百五十七丁

●ま之部  
松風

百卅六丁

古道成寺

百四十五丁

葵の上

百五十八丁

●ま之部  
正月

百卅七丁

狐會

百四十七丁

●あ之部  
秋の七卿

百五十九丁

●ま之部  
萬歳

百卅八丁

小袖物狂

百四十八丁

あづまの旅

百五十九丁

●ま之部  
まこと

百卅九丁

戀の旅路

百四十九丁

●あ之部  
秋の扇

百六十九丁

●ま之部  
けしの花

百卅九丁

言葉じち

百五十一丁

●あ之部  
秋の夕

百六十丁

●ま之部  
けしくり

百四十丁

こゝろばせ

百五十二丁

●あ之部  
有馬富士

百六十一丁

●ま之部  
秋の旅

百六十二丁

西行櫻

百七十二丁

●あ之部  
秋の夕

百六十二丁

●ま之部  
吾妻獅子

百六十二丁

三段きぬた

百七十二丁

●あ之部  
京名所

百八十三丁

●ま之部  
あれの鼠

百六十三丁

里の曉

百七十二丁

●あ之部  
され燕し

百八十四丁

●ま之部  
あいの山

百六十四丁

草紙洗

百七十二丁

●あ之部  
菊の露

百八十五丁

●ま之部  
明の鐘

百六十四丁

さゝやき竹

百七十二丁

●あ之部  
金五郎

百八十五丁

●ま之部  
仇まくら

百六十四丁

櫻畫し

百七十三丁

●あ之部  
きりくす

百八十六丁

●ま之部  
姉妹

百六十五丁

櫻川

百七十四丁

●あ之部  
君がはた

百八十七丁

●ま之部  
有馬じし

百六十五丁

里の風

百七十四丁

●あ之部  
狐火

百八十七丁

●ま之部  
あやさぬ

百六十六丁

小夜千鳥

百七十五丁

●あ之部  
きぬ

百八十七丁

●ま之部  
あさどて

百六十六丁

さゝのつゆ

百七十六丁

●あ之部  
きぶね

百八十八丁

●ま之部  
あやづる

百六十七丁

蛙蛾の巻

百七十七丁

●あ之部  
きいす

百八十九丁

●ま之部  
あら玉

百六十七丁

さつま獅子

百七十八丁

●あ之部  
夕霧文章

百九十丁

●ま之部  
あづさ

百六十七丁

櫻川

百七十九丁

●あ之部  
夕霧文章

百九十丁

●ま之部  
萬歳獅子

百卅三丁

福壽草

百四十二丁

腰づけ

百五十四丁

●ま之部  
松の毒

百卅四丁

ふた心

百四十三丁

こすのと

百五十四丁

●ま之部  
松の二葉

百卅四丁

冬の月

百四十三丁

●あ之部  
こすのと

百五十五丁

●ま之部  
松す鏡

百卅五丁

筆の輪

百四十三丁

●あ之部  
こすのと

百五十五丁

●ま之部  
松づくし

百卅五丁

ふところ

百四十三丁

●あ之部  
こすのと

百五十五丁

●ま之部  
松の月

百卅六丁

船のゆめ

百四十四丁

●あ之部  
こすのと

百五十六丁

●ま之部  
松風

百卅六丁

古道成寺

百四十五丁

●あ之部  
こすのと

百五十七丁

●ま之部  
正月

百卅七丁

狐會

百四十七丁

●あ之部  
こすのと

百五十八丁

●ま之部  
萬歳

百卅八丁

小袖物狂

百四十八丁

●あ之部  
こすのと

百五十九丁

●ま之部  
まこと

百卅九丁

戀の旅路

百四十九丁

●あ之部  
こすのと

百六十九丁

●ま之部  
けしの花

百卅九丁

言葉じち

百五十一丁

●あ之部  
こすのと

百六十丁

●ま之部  
けしくり

百四十丁

こゝろばせ

百五十二丁

●あ之部  
こすのと

百六十一丁

●ま之部  
秋の旅

百六十二丁

西行櫻

百七十二丁

●あ之部  
こすのと

百六十二丁

●ま之部  
吾妻獅子

百六十二丁

三段きぬた

百七十二丁

●あ之部  
こすのと

百八十三丁

●ま之部  
あれの鼠

百六十三丁

里の曉

百七十二丁

●あ之部  
こすのと

百八十四丁

●ま之部  
あいの山

百六十四丁

草紙洗

百七十二丁

●あ之部  
こすのと

百八十五丁

●ま之部  
明の鐘

百六十四丁

さゝやき竹

百七十二丁

●あ之部  
こすのと

百八十五丁

●ま之部  
仇まくら

百六十四丁

櫻畫し

百七十三丁

●あ之部  
こすのと

百八十六丁

●ま之部  
姉妹

百六十五丁

櫻川

百七十四丁

●あ之部  
こすのと

百八十七丁

●ま之部  
有馬じし

百六十五丁

里の風

百七十四丁

●あ之部  
こすのと

百八十七丁

●ま之部  
あやさぬ

百六十六丁

さゝのつゆ

百七十六丁

●あ之部  
こすのと

百八十八丁

●ま之部  
あやづる

百六十七丁

さつま獅子

百七十八丁

●あ之部  
こすのと

百九十丁

●ま之部  
萬歳獅子

百卅三丁

福壽草

百四十二丁

腰づけ

百五十四丁

●ま之部  
松の毒

百卅四丁

ふた心

百四十三丁

こすのと

百五十四丁

●ま之部  
松の二葉

百卅四丁

冬の月

百四十三丁

●あ之部  
こすのと

百五十五丁

●ま之部  
松す鏡

百卅五



目

次

八

ゆかりの色	百九十二丁	三ツの星	二百三丁	新七草	二百十二丁
雪だるま	百九十二丁	道づれ	二百三丁	新 壽	二百十二丁
雪景色	百九十三丁	みつのを	二百四丁	時雨がさ	二百十三丁
夕空	百九十四丁	●し之部		しぐれ月	二百十三丁
夕顔	百九十四丁	新道成寺	二百四丁	四季の雪	二百十三丁
ゆめ	百九十五丁	新松竹梅	二百五丁	新子の日	二百十三丁
●め之部		松竹梅	二百五丁	舌づゝみ	二百十四丁
名所土産	百九十五丁	新され盡し	二百六丁	信夫山	二百十五丁
●み之部		新秋の色	二百七丁	石橋	二百十五丁
都土産	百九十六丁	新緑の綱	二百七丁	忍び駒	二百十五丁
御山獅子	百九十七丁	松蔭の月	二百八丁	四季の花	二百十七丁
御代の春	百九十七丁	四季の壽き	二百八丁	島 盛	二百十七丁
みつれんば	百九十七丁	新都獅子	二百八丁	●る之部	
都十二月	百九十八丁	新玉かつら	二百九丁	越後獅子	二百十八丁
峰の雪	二百丁	新浮舟	二百九丁	繪そらごと	二百十九丁
翠簾の内	二百丁	新青柳	二百十丁	縁のつゝ	二百十九丁
水馴棹	二百丁	深夜の月	二百十丁	ゑ び	二百十九丁
水鏡	二百一丁	四季の眺	二百十一丁	●ひ之部	
三津山	二百一丁	新声菊	二百十二丁	ひとりばうし	二百二十丁

●す之部

雙のほつれ	二百二十丁	墨繪の月	二百廿九丁
一ツくさや	二百二十丁	すりばち	二百廿九丁
一ツ夜着	二百二十丁	すわのよるへ	二百廿九丁
一人寝	二百廿一丁	拾 扇	二百三十丁
鄙の袖	二百廿一丁	墨繪の芦	二百三十丁
東山	二百廿二丁	末の契	二百卅一丁
東まど	二百廿二丁	硯の海	二百卅一丁
ひを鶴	二百廿二丁	すがいさ六段	二百卅二丁
一ツ橋	二百廿三丁		
ひあぶり	二百廿三丁		
ささご	二百廿四丁		
晝寝	二百廿四丁		
火桶	二百廿四丁		

●も之部

紅葉づくし	二百廿五丁
紅葉狩	二百廿六丁
●せ之部	
關寺小町	二百廿七丁
關づくし	二百廿八丁

目

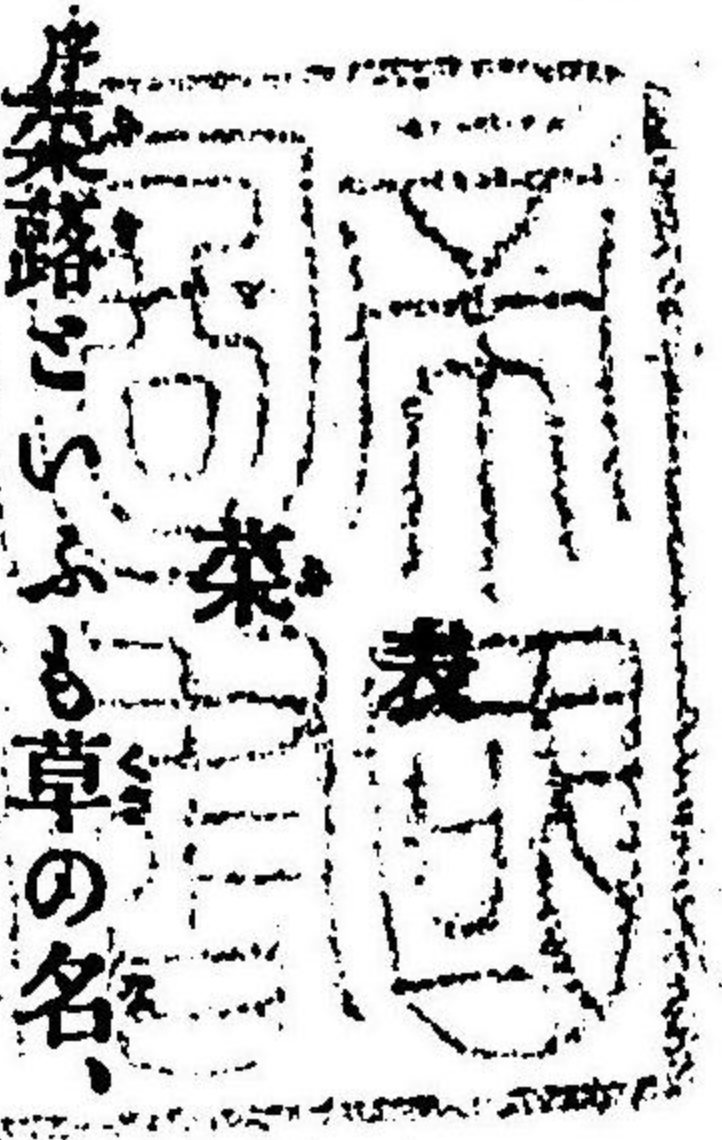
次

九



琴曲歌の葉

河野源太郎編



組

落 茗荷といふも草の名、富貴自在徳ありて、冥加あらせ給

へ 春の花の金玉、花風らくに柳花園、柳花園の鶯は、同じ曲を囀る 二月の前の調

へは、夜寒を告ぐる秋風、雲井の鷹が音、琴柱に落つる聲々 三長生殿の中には、

春秋をこめり、不老門の前には、月の影晚し 四弘徽殿の細殿に、千むは誰々、臘

月夜の内侍の頭、光る源氏の大將 五誰うや此の夜中に、さいたる門を叩くは、扣

くこもよもあけじ、宵の約束なければ 六七尺の屏風も、躍らばなごか越えさらん

羅綾の袂も、引かばなごか切れさらん、



梅が枝

一梅が枝にこそ、鶯は巢をくへ、風吹かばいかにせん、花に宿る鶯ニ花散る里の徒然、ただだれの琴の音、花橋の袖の香に、山郭訪づる、三思ひ寝の夢の間、枕に契る明け方、覺めては元の辛さにて、涙のほかはあらじな、四小夜更けて鳴く千鳥、何を思ひあかしね、浮世を須摩のうらみにて、我れさ等しき涙かや五しらま弓のまゆみの、そるべきはそらいで、八十の翁の、こひに腰をそらいた六三保の松風、吹きたぐて、奥津なみもあらじな、水にうつろふ月とも、眺につく富士山

心盡

一心盡のあき風に、須摩のうらはの洞枕ころもかたしきひこりねに夢も結ばぬよななよ二ふる里を遙々と、隔て、此處にすみたがは、都どりにこそ、はん、君はありやなしやと三夏の夜の曙、夢を覺ます郭、白妙に見ゆるは、月にさらす卯の花、四霧にた、ずむ小車、やつしてたつる小車、人目忍ぶの契りこそ、更けて閨の

通ひ路、五飛鳥川の水上を、硯の水にせき入れて書く言の葉は盡きまじや、今日も暮さん命かな、六契りし宵のたそかれ、知る邊深きそらだき、止め居る方の萩の戸を、開くや袖のうつり香

天下太平

一天下太平長久に、治る御代の松風、雛鶴は千歳ふる、谷の流れに龜遊ぶ、二人知れぬ契りは、浅からぬもの思ひ、包むとすれど紫の、色に出づるを果敢なき三果敢なくも隅なき、月をいかで恨みし、兎に角に我が袖に、たのぬ涙の夕暮、四花のあんの夕暮、朧月夜にひく袖、定かならぬ契りこそ、心深く見ゆけれ、五住吉のみやごころ、かき鳴らす琴の音神の恵みに逢ひ初めて、過ぎし昔を語らん、六秋の山の錦は、龍田姫や織りけん、時雨降る度毎に、色の増すう怪しき

薄雪

一うらめしや我が縁、薄雪の契りか、消々にし人のかたみとて、涙ばかりや残らん、七此裏連理のかたらひも、變れば變る世の慣ひ、さりとては恨むまじや、昔



は情ありしを三若紫を手に摘み、深き心の色増す、長き契りと結びしも、草の縁  
と知るべし四東雲の眞垣に、露を含む朝顔、玉のかづらたをやかに、かゝるや花  
の面影五世々の人の眺めし、月は眞のかたみぞこ、思へば思へば、涙玉を貫く  
吉野川の花筏、竿さすひまもあらじな岩浪高き山風、四方に散らす花の香

雪の晨

一雪の晨の嵐は、梢の花の散る風情、名こり惜しきは兎に角に、待ち得し君の歸  
るさ二淡まじや我が身は、雲井の雁に夕霧のおこしめられし思ひをば、いつの世  
にかは忘れん三まごころめば面影の、しげしげと短夜に郭れこつれて、初音に夢  
醒めける四眺むればいこゝたに、戀しき人の戀しきに、疊らば疊れ秋の夜の、月  
の恨はあらじな五峯の嵐の通ふか、谷の水の流れか、寢覺めに聞きし松風は、琴  
の音に遣はじ六葵の上のこさめき、加茂のもの見の折柄、車争ひつきなきは、深  
き恨みなるべし

六段の朝 手事 歌なし

裏の上組

一雲の上のながめは、ありし昔にかはらねど、見したまたれのうちぢたゞ、なつ  
かしやゆかしき二面白やさみだれ、花たちはなのにはへり、郭公れこつれて、短  
夜なれど寝られぬ三中々に始めより、なれずは物思はじ、忘れは草の名にあれど  
忍ぶは人の面影四思ひ餘りせき兼ねて、恨みぬる夜の涙は、床すさまじや獨りた  
ゞ、枕に戀う知らるゝ五武蔵野に行きくれて、月をながめて草まくら、こひしき  
人を夢に見て、うたゝねの袖しほる六軒をめぐるてんてぎ、琴の音に響へてしち  
ねんの夜のあめ、かつて知らぬ夢の世

薄衣

一敷ならぬ身にはたゞ、思ひもなくてあれかし、人なみなみの薄衣、袖の涙ぞか  
なしき二あこがれて思ひ寝の、枕にかはす面影それかさて語らんこ、思へば夢は  
醒めにけり三白雪のみゆきの積る年は経ることも、あくまじや諸共に、亂れがみの



顔はせ四引く人はそれぞれ、數多あれどもつま琴の、元の心かはらずば、琴路に  
落ちる秋風五かしは木のゑもんの鞠をこんと蹴たれば、まりは枝に止りければ、  
梅ははらりほろりこ六さりこてはつれなや、ひかふる君がたもこの、あや憎にな  
ひかぬは、手飼ひの虎の引き綱

桐壺

一桐壺の更衣の、比翼連理のちぎりも、定めなき世のならひこて、夢の間うかなし  
き二短夜の夢さめて、面影は夏虫の、身よりあまた思ひをば、いかで人に語らん  
三秋の夜は更けゆき、月は西にかたむく、松風や浪の音、鹿の聲を淋しき  
るべせし小君の、なかだちに引かれて、行衛迷ふか空蟬の、夜のかをりうゆかし  
き五誰ぞや今宵さよ更けて、柴のとぼそをたくは、尾の上下ろしのおこづれか  
くらのな告ぐる聲々が、青柳のかたいこに、よりに鳴けや鶯、鶯のぬふてふか  
は梅が枝の花がさ

裏許新組

四季の友

一春たち来れば我宿に、先づ咲き初むる梅の花、君が千年のかざしうご、見るも  
長閑けき色なれや二瀧の白玉千代のかず、岩根に落つるさみたれの、雲間すぎ行  
く郭公、たゞ一聲の音づれ三月をのみながめても、かくばかり惜しまる、秋の夜  
ごを徒に、過ぐる人こそつらけれ四神無月しぐれても、色かへぬ松が枝の、緑  
うづめる白雪は、こかへりの花ならん

友千鳥

一満干たへせぬ盤の山、さし出の磯の友千鳥、君が御代をば幾千代と、聲もゆた  
かに鳴き交はす二日陰のさけき春日野に、若菜つみつ、萬代を、祝ふ心の道すぐ  
に、神の恵を祈らん三誰れかはあかん常磐なる、松の緑も春はなほ、今一入の色  
見ゆて、眺めも深き此の頃四うつし植ゑてし庭もせに、老いそふ竹の枝しげみ、  
茂けくも見ゆる千代の陰になる、齡やいつまで五向ふも廣きわたつみの、濱の眞  
砂を數へつ、世の有りかずに取りなして、久しき程を知らばや六壽なれし鶴龜



も、千年の後は知らなくに、あかね心にまかせつゝ、限りもあらじ行末

花の宴

一 幾春もこゝになほ、御はしの櫻色まさり雲井の花はひさかたの、空ふく風も、  
れよばトニ雲の上人かさして、色をあらそふ紫の、袖のかをりはうちはゆる、  
大内山のゆふづくひミタぐれの薄がすみ、誰がならす糸竹、思ひある身にはたゞ  
よそのこしらべもなつかし四梅つほの邊りより、こすの際にもれくる、風のかをり  
は脊のひまの、暗はいごやあやなし五弘微殿の細殿に、千むは誰れたれ、臘月夜  
の内侍の頭、光る源氏の大將、いとどなほ深き夜の、あはれを知らすいる月の、  
朧けならぬ契こそ、今身に思ひ知らるれ

二 長の曲

一 足引さのいははなでしこや、なほ真鶴の羽衣を、千代に一度うちつけて、なづ  
こも更につまますまじ二ながめの浦や春の日の、葦の若葉の柔に、ひなをも連れて  
遊ぶなる、鶴の景色はほらちしき三鶴にのりし山人の、心に任せ行き迷ふ、蓬が

鳥ささこえしは、いつも若いせぬ所さや、此の内知らぬ思出は、物敷ならぬいに  
しへ、高き位を許され、車に乗りし試しあり、五御手洗川に住む鶴は、神代をかけ  
て知りぬらん、蓮の上葉に遊ぶ子と、千年の後身は軽ろし六かぞのうらもじた  
い出でし、後にならひて今もなほ、ゆふけを訪へはなにことも、吉におさまる目  
出たさよ

雪月花の曲

一 櫻卯の花白菊に、まがふはゆきの色ながら、まがはぬ雪の白重ね、さむるは袖  
のむめが香ニ小野のみむろのつれくを、ゆめかと思ふ雪の夜の、ふかき心にふ  
みわけて、さひし君こそ忘れね三久方の中に生ふる桂の、にはふ花ならばひこ  
枝たれもをりかさし、世々につたへん月の名、四葉月なかばの月すみて、空さぶ雁  
の聲、おつる白妙ごろもうつなり、ゆめのちぎりのあはれさよ、五花は三吉野小  
初瀬や、嵐の山もおしなべて、くもこながめし人丸の、むかしの名こそうれしけ  
れ六世の中はものかはり星移れども春の花やなぎのいこのたぐやらで、くることし



世のたのもじさ

浮舟の曲

「思ふこころはでやつひに山城の、うぢのわたりのうちきせにもしづみははてぬゆ  
くもこそ、なか／＼なりと恨みなれ」うき世をわたるはふねの、みなれ／＼て  
さすしほのしづくを見ればいつこなくものおもふ袖のかくはかり三身をわくるこ  
ごはかたしやたましくけふたみちかくるわりなさに、思ひみたれてうちかへすこ  
「ろひごつくるさよ四をのゝすまゐのおのづから、まこへやありごつ／＼まじ  
く、翠の嵐やさをしかの聲にもたてをなりにけり五にしへのふたうたならぞな  
れとなくこゝろゆかしの、手ならひは、つれ／＼なる日ぐらし、忍び／＼のなみ  
だなり六田の面の秋になりぬこや、稲葉にまじる小女子が聲はおかしう打そへて  
うたへばとらに雁をなく。

中組

須磨の曲

「須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、さらしなの月共に、眺めていざや  
歸らん」二春によせし心も、いつしか秋にうつろふ、黒木赤木のませのうち、よ  
しある花の色々三きりぎりす夜すがら、何を恨みすだくろ、我れも思ひに堪ゆか  
ねて、いさ／＼心の亂るゝに四中々に人をば、恨むまじや恨みじ、兎に角に數なら  
ぬ憂身の程う悲しき五三五夜中の新月、隅なきぞ面白や、千里の外の人までも、  
嗚や眺め明さん六深更に月さえて、車の音の聞こゆるは、五條あたりの破屋の、  
夕顔を知邊に

明石の曲

「所柄名にしれふ、明石の浦の秋の頃、月さゆ渡りよる浪に、うつろう影の面白  
や」二此頃はいと／＼しく、都の方の戀しきに、かゝる所の人心、憂を慰む今宵かな  
三何時となく長き夜を、語り明石の浦なくも、いかで岩根の松の葉の、契りは未  
も變らじ四幾夜明石の浦の浪、よせてはかへり浮沈、憐れを思ふ折からに、憐れを  
添へて鳴く千鳥五庭の落葉か村雨か、かきならす琴の音か、他所に知られぬ我が



袖に、餘りてもる、涙かな、六四智圓妙の明石がた、迷の雲も打ち晴れて、八重咲き出づる九重の、都に歸る嬉しさよ

末の松の曲

一末の松山浪越すとも、變らぬ色は松が枝に、君が千歳の限りなき、み際の池に龜遊ぶ二身に浸み渡る秋の頃、月も隅なき閨の戸に、歸るさ告るくたかけの、また木に鳴くぞ恨めしき三中々に今はたゞ、思ひたげなんこばかりを、人傳ならで言ふよしも、あらで焦る、身が辛らき四しのぶ山このお山、あはれ忍ぶの道もがな、人の心の真までも、見せや止みなん我が思五さよ千鳥夜もすがら、鳴くは我れを訪ふやらん、須磨の住居のもの憑きに、涙を添ふる聲々六契りきなかたみに袖をしぼりつゝ、末の松山、浪越さじこはいかに言ひけん、あたにありし恨みかや

空蟬の曲

一空蟬のあるかご見れど、面影の影もあやな、香をこめし小夜衣、もぬけし人ぞ戀しき二尋ねても中々に、逢はそのもりの逢はでのみ、つきなきものは命にて、

一人胸をや焦すらん三よるよるにも我が袂、ぬれつ増さる戀心、人こそ知らね忘れぬ、身の程いかでわびまじ四戀し床しこつれなくも、甲斐なき世にも住吉の松は我が身の思ひにて、逢はでや年を経るらん五思ひ重ねて年月を、経れば昔の懐しく思ひ出でたる今宵にも、涙に雨や誘ふらん六兎に角に兎に角に、眞のあらば荒磯の浪のあなたに隔つとも、よるべのなごかなからん

雲井弄齋の曲

一月ごや色やれのふ山の端に合離れ離れのうき雲見れば合明日の別れもあの如く合二思ひ染めたよ濃き紫の袖は血汐の我が涙合さゆい我が涙合三忘れ草かなのふ一本欲しや合植へて育て、見て忘りよ合さゆい見て忘りよ

九段の調 唱歌なし

七段の調 唱歌なし

新曲

橋姫の曲



一水の上のうたかた、露に宿る電、在るか無きかの世の中を、宇治川の橋姫ニ身の憂き時は立ち寄りらん、陰に頼みし椎が本、空しき里となりける、契りの程う悲しき三峯に生ふる早蕨、昔の花の面影、忘れがたみに積み置きて、主なき宿に送らん 四前の世の契りか、此世の中の情か、空しき後宇治の里、絶えず此處に宿り木 五一方ならぬ物思ひ、依る邊定めぬ浮舟、仇なる名のみ橋の、小島がさきに焦るゝ六をのゝ花の秋の頃、閨のつまの紅梅、それかとまがふ花園、昔の人を戀しき

十四

#### 新雲井弄齋の曲

一月諸共に郭、鳴きて入るさの山の端見れば、はや短夜も明け渡る 二又の逢ふ瀬もいざ白露の、餘りて置ける袖の上、實も袖の上三あはれ、果敢なき浮世の中に共に絶えせぬ契をう待つげにも契りをう待つ

#### 雲井九段の調 唱歌なし

#### 四季富士の曲

田子の浦浪うら出ぞ、見れば雲井に高き名の、山の姿に四つの時、分くるうわきて云ひ知らぬ

一春は霞の朝もよい、さのふの雪をそれながら、上なき花の色ぞこて、見るや山は富士の根ニ雪に譬へてみへかさね、扇を取れる手のうら、夏は消えて夕暮れの、眺めをうつす富士の根 三秋は更なり月雪、見ぬ人にも語りなば、なかなかなれやなかなかに、いはでや見なむ富士の根 四御冬になれば都人まつらん雪を、鳥がなく東に住めは朝なぎに、見てこそあらめ富士の根 五時知らぬ、時知らぬ山は富士の根、いつこてか、鹿の子まだらに雪の降るらむ、鹿の子まだらに雪の降るらむ

#### 六玉川の曲

一いはで思ふ心の色を八重にしも、移しそむてふつれなさに、春のつきげの駒とめていざ水かはん山吹 二己が秋とやさをしかの、しがらむ花のすり衣、うつろふなみも紫に、みだれそめにし白露 三かはごにつこふ松風の、音たにあきはさびし

十五



きだ、衣もうつぎのかきもあれてきぬたもいそぐなる四きのふの袖もほし  
やらで、まだきぬれそふあさつゆに、なみも光りをうちよせてさらすや賤が手つ  
くり五しほかぜとして夜もすがら、月もみがけるかはなみに、くだけてものを思  
ひねの、夢をさそひてなくちごり六かへるたかの山深み、しかはあらしのこが  
らしに、ながるゝ水のなのみして氷もむすぶばかりなり

玉鬘の曲

一いかなるすじご夕貞の、つゆのゆかりの玉かつら、むかしをかけて戀わたる、  
ゆにしもいかであさからぬ二初音ゆかしき鶯の、すたちし松のねをこへば、谷の  
ふるすのめづらしく、春の日かけそのごけき三さくら山吹さりとくに、はなのま  
がきにとびちがふ、胡蝶の舞ははかなくも、あかすくれゆくけしきかな四聲はせ  
で身をのみこがす螢こそ、うすきひごへのなさげにて、それかこばかり忘れぬ  
れもかけぢゆかしき五ささみだれたるませのうちにとこなつかしきまでじこの、  
もとのかきねを人しれず、こころにかけてしのべり六かぐり火にたちそふ戀のけ

ぶりのよごとともに、たゆぬ燈となりぬるは、ゆくらもしらぬ思かな

四季の戀の曲

春ものゝあはれはこれよりす、しらざらまじやしらざらめ、こきにつけつゝろの  
るこゝろ、いつれか思のたねならむ  
一いこよりかけしみごりこそ、ねみだれがみのれもかけ、ながめせしまにいろも  
かも、うつろひやすき人心三うすき情をおりはへて、いこはかなくもなきくらじ  
つゝむにあまるむねの火に夜すがら身をやこがすらん三年ごに逢ごてもぬる夜  
すくなきちぎりかな、なげゝこてやはてりそふる、かげにぢちゝのかなしき四を  
さゝが上にたばしるは、わかれの袖の白玉、れもひふるやの軒につもる、うらみ  
はこけてしのびね。

奥組

四季の曲

春花の春立つ朝には、日影曇らで匂やかに、人の心も自延びらかなる五四方山



一春は梅に鶯、つゝじに藤に山吹、櫻かざす雅人は、花に心移せり二夏は卯の花  
橋、菖蒲蓮撫子、風吹けば涼しくて水に心うつせり三秋は紅葉鹿の音、千草の花  
に松虫、かりなきて夕暮の月に心移せり四冬は時雨はつしも、霞美楓、さゆし夜  
の曙、雪に心移せり

扇の曲

一扇は櫻の三重重、霞める月を詠に書きて、水にうつろふ心ばへ、ゆへ懐しき有  
様二黄昏時の粉れに、ほのぼの見へて咲けるは、こいゑ勝なる軒のつまに、餘り  
てかゝる夕顔三武蔵野もさらしなも、須磨や明石の面影も寫して此處に見る月の  
眺めはいつもひろさは四夢にばかりよなよな、思ふ人をみちのくの、勿來の關を  
誰れかすへて、現に事も通はず五戀ひ戀ひて戀ひ戀ひて、戀しき人を待つち山、  
待つらんものを行きて見ん、行きていざや逢ひ見ん六明かしかねたる霜夜の、床  
も淋しき、嵐の音はそよそよさらさらさ、降るは霞の玉笹

雲井の曲

一人目忍ぶの中なれば、思ひは胸に満ちのくの、千賀の壺釜名のみにて、隔て、  
身をぞ焦るゝ二忘るゝや忘らるゝ、我が身の上は思はれて、仇名たつ憂き人の、  
末の世いがゝあるべき三たまさかに逢ふこても、尙ぬれまさる袂かな、明日の別  
れもかねてより、思ふ涙の先立ちて四雨の中の徒然、昔を思ふ折から、憐れを添  
へて草の戸を、たゝくや松の小夜風五身は浮舟の揖をたぐ、依る邊も更に荒磯の  
岩打つ浪の音につれて、千々に碎くる心かな六雲井に響く鳴る神も、落つれば落  
る世のならひ、さりさては我が戀の、なごかは叶はざるべき

五段の調歌なし

新曲

羽衣の曲

一君の恵みはひさかたの、天の羽衣稀に着て、撫で、巖は其儘に動かぬ御代のた  
めしかな二星をとなふるすべらぎの、雲の上まで長閑なる、朝の景色新玉の、春  
日曇らぬ天が下三奈良の小川の夕風に白ゆふかくる浪の音、神の心をすゝしめの



みそぎり夏の印なる 四齡久しき山人の、れる袖匂ふ菊の露、打ち拂ひ打ち拂ひ千  
年の秋や送らん 五にほの海面見渡せば、比ひ浪間に有明の、月影牙けて白妙の雪  
をかけたる勢田の橋 六萬世かけて相生の、松と竹との深緑、變らぬ色は諸共に  
ひせぬ契りなるべし

若葉の曲

一縁よしある初草の、若葉の上をみつるより、いと、乾かぬ袖の露、尙髪増さる  
旅寝かな 二現なや一人寝、夜半の枕に吹さまよふ、深山嵐に夢醒めて、涙催ほす  
瀧の音 三いささらは都人に、行きて語らん 櫻花、木の間の景色異なるを、風より  
前に見せばや 四隠れ家深き奥山の、松のこほそを稀に明けて、まだ見ぬ花の顔を  
見るよりぬる、衣手 五黄昏過ぐる折から、ほのかに見ゆし花の色に、迷ふ心は朝  
霞、たち病ろうるもの憂き 六いつしかに汲み初めて、口惜しと聞きし山の井の、  
淺きながらもさりさては、絶ぬ契りを頼まん

思川の曲

一逢ふ脊仇なる思川、岩間によごむ水莖の、書き流すにも袖ぬれて、干す日もい  
つこ白浪 二面影のつくづくこ、忘れもやらぬ思ひ寝の、夢だに見えて明けぬれば  
逢はでも鳥の音を辛き 三いつの間にかはかき絶ゆて、隔つる中となりけん、見  
し玉章の門司が關と、名を聞くだにも恨めし 四つれなくも行く人を、ごめがた  
みのからころも、たつよりいと我が袖は、露にぞしほれしほる、五戀ひ詫びて  
只一人、伏屋の床に夜すがら、落つる涙は音なしの瀧とや流れ出づらん 六中々に  
辛からば、只一條に辛からで情の交る儂りこ、思へば深き恨みかな

後の新曲

宮の鶯の曲

片くわせいの春の朝霞、柳櫻の色深く、錦の袂香り来て、御幸を待つる美はしき  
一宮の鶯花になき、軒の燕は雨を呼ぶ、羨まらきは己が身の、心のまゝに任すら  
ん 二揚家を出てし其の色に、君も心を惑はされ、一人の外は目につかぞ、遠ざく  
るこそ恨みなれ 三擇れ出でし二八の春、移され来ては六十の秋、空しき床に老は



てし、ねをのみ鳴くぞ憐れなる 四芙蓉花哀ろへて、露の玉光なし、今は見えじな  
見ゆもせば、うごき人には笑はれん 五壁にそむける燈火の、まだ焚き残す夜はす  
から、窓打つ雨の音聞けば、いごさへ寝られぬ 六たごへて言はゞ花鳥、文に作  
り詩に歌ふ、今様姿こりごりの、中にわびしき只一人

春の宮の曲

一春の夜の間の風に吹き、開らく露井の桃の花、半ばならざる宮の前、月の桂の  
影高し 二雲井の空に君愛づる、姿優しき舞姫の夜や寒きとて惠そふ、花の錦の袂  
かな 三静けき宮の窓の中、綾なく花の香り来て、根みの長き春の夜に、巻きも得  
やらぬ玉すだれ 四斜に琴を抱きつゝ、月に向へば曙なる影さへやがて、木隠れて  
一人情ふき夜半の床 五池の芙蓉も及びなき、人の袂に吹き渡る、風の香は中々に  
花よりも尚香ばしき 六君が情の忘れられて、捨てぬ扇の秋もふけ、斜ぶく月の夜も  
すから、御幸を待つぞ果敢なき

飛燕の曲

一ひさ方の雲の袖、古りし昔忍ばし、花に残る露よりも、消ゆぬ身が果敢なき、  
二を照らす白玉の、數の光ならずば、天津乙女のかざしして、月に遊ぶなるら  
ん 三紅の花の上、露の色も常ならぬ、夢は残る横雲、降るは袖の涙かな 四懐しや  
古を、忍ぶに匂ふ我が袖、ぬれて干すことには、あはれ慣れしつばくらめ 五類  
なき花の色に、心うつす此の君、現なき思ひこそ、いごさなほも深み草、散りや  
すき慣とは他所にのみ聞きし身も、うつろふは我がこが、恨むまじや春風



巖根の松

三味 本調子

君が代は、天の羽衣稀にきて、なづこも盡ぬ岩根松、常盤の色も春來れば、今一  
しほの増かゞみ、曇らぬ御代に住馴しつちの車の我ら迄、豊にすめる武蔵野に、  
月のいるさの山も無し、草より出て艸にこそ、入間の郡みよしの、田面の稻は  
數つみて、民の籠も賑はひて、朝な夕なに煙り立つ、霞ヶ關をもらさねば、名  
は假初にしらまゆみ、弓は袋に有明の、月のごかなる玉川に、さらす調布さらさ  
らに絶せぬ御代こそ久しけれ

石童丸

三味 二上り

いたはしや石童丸、かゝる難所をたぎと、こころも空にふきくさの、ねさし  
の父の顔しらず、波のしるべに尋ねゆく、袖のなみたを哀れなる、思ひ高野のた  
にがはや、弓手はいは問めては天野の山おろし、峯にけぶりの一むすび、見上て  
通るふごう阪ふみもかよはぬ丸木ばし、なごり情もよこぶきの、嵐に木の葉ちり

はて、心ほそみち突つらの、下りつ上りつ行きさを、問へといは根の松かけに、  
暫しやすらひ給ひけり

糸の時雨

三味 三下り

人知れぬ思ひは専涙より、外に實はなきものと、樂む中をふく風が心の程を知り  
もせて、ほんに辛氣な亂れ髪、いはぬ愁さを見る夢の、何が戀やら情やら移り氣  
のなき床のうち

磯千鳥

三味 二上り

うたゝ寝の、枕に響く明の鐘、實に儘ならぬ世の中を、何にたごへん飛鳥川、合  
のふの淵は今日の瀬、合、かはりやすきう變るなご、契りし事も何鹿に、合、身は浮舟  
の楫も絶、今はよるへも白波の、合、手事、棹の栗か涙のあめか濡にぞぬれし濡衣、合  
身にしむ今朝の浦風に、わびつゝや鳴く磯千鳥

いその春

三味 本調子

琴の音になゝこそすぎし夜のあめ、合、のきよりたつるれもしろさ、しらでくやし



もろこしの 合 人のいひけんこのはを 合 思ひいづればうべなれや、月雪花のうつ  
 り香に 合 あさくしまめやわが袖にゆかしく 合 のこる 合 磯の春 合 手事 そのこしかたの  
 したはるく 合 ねなじ心にならひつゝ 合 世におもしろき糸竹の 合 しらべを友となし  
 てあそばん

今 小 町

三味 二上り

松のくらのに柳のすがた 合 御くらの花に梅が香を、こめてこほる、あいきようは  
 月のしづくが萩の 合 つゆのなさけにあこがれて、われもまよふやてふくの、戀  
 じなんみのいくも、夜、かよふ心は深草の 合 少將よりもあさからぬ、浅香のぬまの  
 そこまでも、ひく手あまたの花あやめ、たとへむかしのから人の山をぬくてふ 合  
 ちからもて 合 ひくごもひかぬふり袖は 合 すいな世界のいま小町 合 三上り 手事 本調子 合  
 かき位の花なれば、おもふにかひもあらし山、されど岩木にあらぬ身の 合 いきな  
 男の手くだには 合 いなにもあらぬいな舟の、しづみもやせんこひのふち 合 あはぬ  
 つらさはあしびきの、やまどりの尾のながき日をうらみかこちて人しれず 合 こよ

ひあふ瀬の新枕 合 つもるおもひのかたいごも、さけてうれしきはるのゆめ

いもがしら

三味 本調子

世の中にあやかりものは、いもがしら、子に子が出来て孫だいて、成人すれば末  
 ひろく、朝夕黄金の、露は浮くらん、

妹 脊 山

三味 本調子

千代迄 合 たのむ妹脊の山になら 合 隔ての關や三芳野の、花の川よご瀧津浪 合  
 ひくごに打も寝す岩もる水の涌かへる 合 いとし殿御ご招げご呼べご 合 みなぎ  
 る音につい紛らされ、辛氣辛苦の心のたけを書て流せご片便り 合 思ひは同じ此方  
 の座敷 合 またの思ひは 合 しら糸の 合 吉野をかりの御稜川 合 神に手向の柏の若葉 合  
 つみて岩間のそば傳ひ 合 見やるあなたに雛鳥が 合 逢ふて嬉さ飛立ごゝろ 合 空にし  
 られぬ雪のうち 合 しどけ難所もいごはず下りて 合 戀し懷敷久我さんご、云ふに嬉  
 さ思はずも 合 逢ひたかつたの言葉さへ 合 山ご山ごに隔たれば 合 見かはす計り聲は  
 かり心ばかりか鴛鴦の 合 陸に迷へる風情にて雛鳥久我さん離ごりご、いふが此世

い 之 部

廿七



の名残うご、知らぬ 合心う哀れなる

妹 脊 川

三味 二上り

口説は宵の夢なれや、二ツ枕の妹脊川、袖から袖へ手を入れて、じつこめたる下  
紐の 合憎や男のあて言を、聞いているさの障子より、もれ出る月はさゆれど胸の闇  
合髪のとくれのばらくばらこ、共に亂るゝ親ごゝろ、鴛鴦の片羽のこぼろこ  
子に迷ひ行く小夜千鳥ないて口説くこそ哀れなれ、子を捨る簀に下りたつ群がら  
す、父よ母よと鳴からず、もり、の子鳥よるの鶴 合うつゝの闇に散る雪の、思ひ  
なき身に競べにし、さつと淺黄に染やふより、元のしら地がましじやもの 合去に  
ても憂しやつまの、似せむらさきの色悪く、やつれ顔見る悲しやこ 合絞る袂の露  
なみた、野邊のいくへを通すらん、遺手の高が聲さして 合又燈を見るこ眠るかこ  
聲はしたなく罵りて繼子づめりに跡つけし、子はやすかたの安からぬ、親は空に  
て血のなみた 合誰がふしつけて世をかたる扱こそうらみやすかた

稻 むしろ

三味本調子、十二曲の内

稻蓮、川うひ柳 合水ゆけば 合みづ行けば、起臥すれど其ねはたぬ 合手事二段 合ア、水  
行けば 合おきふしすれど其ねは絶す

糸 の 縁

本調子

つれなくも、返らぬ西の月なれや、細き縁のそれくくに 合鳥が鳴こいらへ無き、  
明の寝姿さくさへ愁くはかなき夢の東雲に廻りきて 合二上り 合あれ自安寺の鐘さゆる  
合此川竹の流れに添ふて 合焼野の薙子なく音は何處 合問へど答へぬ幻しの、さる  
の泪を乳房にそゝぐ、都の空をちらくくこ、峯の嵐か松風雲ふきはらせ琴の  
音に

い さ い め

本調子

つくは根の 合嶺より落るみな合の川 合戀ぞつもりて 合淵合こなりぬる 合つもりて戀ぞ  
戀ぞつもりて 合ふちこ成ぬる

井 筒

二上り

筒井づゝ 合井筒の水は濁らねど、かはせし人は朧月、入る方もなき我思ひ、只變  
之 部



らじご一すじに合寝ても覺てもいごしさの、餘りて洩て憎ふ成る、墨すゐと硯いんはこひ  
 中なれど、人が水さじや薄く成る、其一念の付そひて、蔭にたゝずみあ、合ひな  
 たに覆ひ、くるくくるくくと、苦敷胸のほむらの火の、わき來る水に消も  
 せで合放ち遣らじと取つけば、霞にへたつ淺ましや、合少くは夫ぞ思ひくらさ  
 や思ひ知れ、足元はよろくよろくよ、よりはり果たる釣瓶のしづく、落て  
 かたちは無かりけり

ろ之部

六段戀慕

本調子

松の枝には合ひなづる巢だつ、たにのながれにかめあそぶ、合ながれはながれに  
 谷の合谷の流に龜遊ぶ、沖の石とはな、おろかのさたよ、合かはくまもなきそでの  
 うみ、合手事六段戀くらし戀あかし、松にしぐれは眞葛が原にうらみしに、今はう  
 れしや、なびきあふ夜のあかぬちぎりは千代もかはらじ

六段歌仙

本調子

其昔、立田の川のもみぢ葉を、錦にしきと観覽くわんらんましませば吉野の山の櫻をば雲かど覺え  
 久堅の、天地わかぬ國つみみ、中に六種の言の葉や、先遍昭せんべんしょうのさま見れば、實に  
 繪にがける女を見て、合心うごかす淺みどり、糸よりかけて白露の、玉にもぬける  
 青柳の、なびきなびくや業平は、心あまりて言葉は、ほんにはんに言葉は萎める  
 花に、匂のこりて大かたは、月をも愛しこれぞ此、積れば老の康秀の、言葉は身  
 にもれはぞこて、心を云は、商人の、よき衣すゞし吹からに、秋の草木のしほる  
 れば、むへ山風に散る木の葉、合かきしく庭の苔衣、喜撰は言葉かすかにて、月を  
 見るにも曉は其の雲井より我庵は、辰己にしかを住馴し、よを宇治山の花よりも  
 優る色香のいつぎぬ、合二上りそれは小町よ袖ふりし、衣通姫の流れこて、合つよか  
 らぬ女ご、ろか佗ぬれば、身を浮草のねを絶て、誘ふ水あらば汲てどしるき黒主は  
 合薪をおへる山人の花のかけにも鏡山、合いさ立寄りて見て行ん、曇らぬ儘に敷島  
 の、道に妙なるまれ人



山の合はに合いりなよも合夜も合人こそ知らば合ねやはやなみ合たの合淵と合なる合よしやなけ合かじの、かな合はぬごても合さだめやない合こそ合浮世合なれすががき手事我ふりすて、一暨ばかり、何國へゆくぞ山ほごゝぎす

●は之部

春の曙

本調子

あけそむるひかりをかはず瑞垣や、久しき神の代々かけて、ときはの松も色そへぬ合こずゆにあそぶ友鶴の聲ものどかにきこゆめり、春がすみ霞みそめぬる軒端より、ほのくにはほふ梅が枝の花にやどりてうぐひすの合いろかにめづる世の中をゆめのちぎりをひきむすぶ合手事散し初音のけふの玉は、き心を見がくやり水の、影もみごりに青柳の糸によるてふ玉かつら合ちさせをかけて四方のそら、ながめはつきじつせじと、こさぶき祝ふ春のあけぼの

ばんぜい獅子(八千代獅子と合)

二上り

君が代の、久しかるべきためしには、かねてぞうるゑ住吉の、手事松のふたは

は、あやかりものよ、青葉はまして落葉さへ、いもせかはらぬちぎりこは、合うれしかろふであるまいか、合手事松のよはひかさねかさぬるかさぬる

春日かけ

三味 三下り

ときはなる松の梢にひな鶴が、みぎはのかめと諸ごもに、ちよをたのしむはる日かけ

萩の露

三味 本調子

いつしかも、まねく尾花に袖ふれそめて、われからぬれしつゆの萩合いまさら人はうらみねと合くづの葉風のそよとだに合おとづれたらてまつむしの合ひごり音になくわびしさを、夜半にきぬたのうちそへて合三下りいこゝ思ひをかさねよこ、月にやこゑはさらぬらん合手事本調子いざさらば空ゆくかりにことゝはん合戀しきかたにたまづさをおくるよすがのありやなしやご

春の契り

三味 本調子

前彈花を見は山邊にしかじ三芳野や、かめのおやまはいはでしま合たよりてきの

は之部



けふもまた 合二上り しをりをかへてさし歳に 合 老をたすくる杖竹の、悉せぬ代々  
のかぎりなき 合前 彈手事中散し手事散し、  
なほいく山の花をたづねん 合 なほ幾春の花  
を詠めん

春がさね

三味 二上り

富士の根の雪もさすがに春の色を見せてかすめる朝ぼらけ 合 さくらさくかたは、  
いつくかしら浪の 合 よする岸邊の水匂ひつゝ 合 さのふけふいつしか夏にならのは  
の 合 風にれちくるひさ聲は、またはづかしの森かけに、このおもうれしあしびさ  
の 合 山ほごゝぎすなきすてゝ、いつちのそらもみじか夜の 手事 限なくてらす月影  
に、君がしらぶる瓜琴の音にかよひくる松虫の聲もあはれに秋ふけて 合 まださし  
ぐれの雲こくも、行き合ふそらの年浪に盡ぬ流れの立田川 合 めてし紅葉に世のう  
きをしらでこそしもれくりきて、かさぬる千代の春ぞむかへつ

初音

三味 本調子

世のちりをつゝむみゆきのふる歳も、ひと夜明れば 合二上り 春景色 合 まだ里なれぬ

鶯の 合 初音やさしくさゝなきて 合 さゝより松の枝づたひ 合 につと軒端に笑ひ顔 前

彈手事 梅と添寝のかり枕 合 こもに嬉しき夢さへも 合 さめてめでたきみつの朝風

花紅葉

二上り

花も紅葉も散しほが有ること、迎もちるなら風にまかせて散れがしな、雨にしほ  
れて、枝に朽なば色もなや、鳥のふみして猶愁や、露も匂ひもさつくりさしたか  
よいわいな 合

花盗人

二上り

手まくらに、夢をむすぶや居すまひの、隙をうかがふ花のかけ、そよ吹く風も身  
のけ立、こゝろの鬼が只ひとつ、御はし間近く忍びよる、聞じこすれど鈴の聲 合  
今もむかしの色かへぬ、其一枝をうばひ得て、木々のさかりを知る風情

春の雁

二上り

昔たれ、粹といふ字を書初て、流れの里に夜さなく、晝ともわかぬ酔こゝろ 合 雪  
の朝も月見る夜半も 合 三味、三筋の上調子、人のそしりも空ふく風の、何の儘よ  
は之部



の手枕に、結ぶ榮花のあだ夢を合け節合す夜明の鐘の聲、つくづく見ればみそらにも、花を見捨て故郷へ、後を濁さず歸る雁

花 二上り

二上り

たのまれぬ物は云へど我ころ合實に浮雲のありし世に、誘はれなれし花鳥を合餘處にもせまト身にもせじ、只きそはぬを加茂川の、水くさい氣さつめられて合由縁の色は見ゆながら、肌合に耻かし老の浪

春の假名

二上り

花のまぎれに假初の合いろは匂へどちりぬるを、浮名もらすな夕がすみ、わがよたれぞつねならん、心合のしをり露ふかきうるのおく山けふこゆて合迷ふ習ひの思ひ寝にあさき夢みしゑひもせず合京九重にこへ百重、千代も萬代もつきせト

初鳥

二上り

氣晴ては風あらた成るやなぎ髪櫛けづり、こやかつやまなんど合其詩は昔く合鬼も二八の緑りのかみに解るひざがしら合こけてふこても縁とそでそでさゆんこ

のますか、髭も洗ひ落いてすいごなん合黒きものは黒きぢよけれ初合がらす

花の旅

三下り

春風に、なびく姿や浅みどり、好た仕うちに誘はれて、思ひ立名の出口のやなぎ合都をすぎて此所かしこ、八町三所かきちらす、一風かはる大津繪の、七ツ道具のむさし坊、かたい石場の間より、ぬるりぬるり勢田うなぎ、長い旅路をふみ分けて、草津の里の姥が餅合つくづく杖の下くぐる目川の水の忍ぶ戀、なんほ石部のれ前でも、心たがはす其手くた座敷さはぎをかこつけて、踊子汁は水口に、味ひ首尾じやこ登りあふ、阪はてるく鈴鹿合合本關子あひの土山、雨にしつぼりこ、大竹小竹さかの下心のたけは盡されぬ、筆捨やまの其中を合關にせかる、椋本の、娘ころの一筋に、津の町とほる阿彌陀がさ、人目かまはぬ旅の空、雲出の川を高からけまたの泊りを松坂合黄楊の櫛田もこほり過ぎ、かみの油の口上手、煙草入うる小林やれちもをばたも買ふて行く、數は積るにかぎりなき、神の惠みの山田へ



は で 浴 衣

三下り

通ふかみ浮名のたゝぬ文月に 百夜の松のひかりさへ、さす盃のかけ寫る笛の、  
音色のはなばなし、十郎さんや待かねん、虎が戀路のまくらより、放れまいご  
戯れに、頼む佛の顔よりも、思ふ男のはで浴衣

春 の 色

二上り

梅ひらき、私は菜種の身なれども、いつそ斯ふして根引になれば 人の異見を聞  
すぎて、花むらさきの里放れ

花 の 君

二上り

いでやこの夏の景色はれかしけれ、月も流れに其身をまかせ、曲輪通ひや蝙蝠の  
逢はですごく影にはたずみ 濡にうぬれし丸木橋、ふみは讀ねど是もまた同じ  
流れの花の君 あやしの男諸ともに うたひくてなみへ戻ろ、月も南をめぐる  
夏の少夜ふみ渡る、道のつゆ

花 が さ ね

二上り

花は吉野に初瀬が奈良の 花の都は嵯峨の、あらし、御室地主なら司の花よ、花  
の春なる花なら餘所に、そんな花なら浮世の花よ 花の中でも花なるはなは、此  
處にさく花時知らぬ、いつも咲はな花の山 よそに咲花はなじやまで

羽 織 つ ま

三本調子之部

袖ひちて、結びし中も薄氷、とくご合點は仕ながらも まだ春さむき雲行きは誰  
にあたつて武庫山たろし いたくな吹きそ、身は捨小舟 あしごよことは由  
ある中よ夫さへふしのまにく、口説が絶ぬしよんがへ 離と星とはな、稀なる  
契り、それさへきつご守つた誓紙のをもて、あだし心はないわいな

放 下 僧

二上り

れもしろの、花の都や、筆に書とも盡せじ、東には祇園きよ水、落くる瀧の、音  
羽のあらしに地主の櫻は散ちり、西は法輪さがの御寺、まわらば廻れ 水ぐるま  
の輪のじせんせきの川浪、川やなぎは水にもまる、垂れ柳は風にもまる、ふく  
ら雀は、竹にもまる、みやこの牛は車にもまる、茶臼は挽木にもまる、實にま

は 之 部



こと忘れたりよよこきりこは、放下にもまるよこきりこの合二ツの竹の合世々を  
重ねて打納りたる御代を目出たき

春の鳥

三下り

夢の世に、夢こやいはん宇津のやま 鶯のもみぢの錦は昔々、雪のはだへを故郷  
にのこす、ほど時知らぬ富士のそら、あたら月日を只一年まくらに、語る里げし  
き 業平風のはでな、男の二人づれかけて思へば、武蔵野の鏡、其名につれて武  
蔵野に鳴そな鳴る春のこり

肌知らず

三下り

餘所で解く帯こは知らで締て居る、心盡しと白糸の、結し縁も名計りに未だ解初  
ぬ 雪の梅、匂ひを包む袖香爐わが振そでも未留て 咲てみたれて散ころ迄も、  
契り盡せぬ中なれど 思ふ計りに娘氣の他男のあだなる氣こも、戀に妬みの情氣  
の角も合をりにふれてはつれとや伊勢物がたり、宇治姫のれこのみ、誘ふ春風  
に合つて芽出しの心さへ知らん菜種に群る蝶の 羽根もいろく色糸ぬひの

伊達をかさねし二ツ紋合やがて二人が對ひ鶴、つるのまる寝のよすがら迎も、鐘  
をうらみつ物かはさ鶏も 憎まぬ長枕ほんに男の肌知らず

春草

三味 三下り

雪消て、しなぐ出る春草の、あをくこして露も合しづくも一入に合猶うき立  
や袖のいろ、わきて床しき鶯の、聲も豊にさへづりて、青柳の若葉にそよぐ風の  
音合二上りいと静やかに納りなびく人こゝろ 只われとなく打こけよ 戯おれ遊ぶ  
うちこそは 實にまことかな 合誰もみな 合知るも知らぬも詔こもに、其名を慕ふ  
山ざくら八重も一重も咲みだれ霞につゝ山々の、景色はいこゝ幽艶く 合あかぬ  
眺めは千代までも 合本調子 變らぬ色を松が枝の、みごりは猶も面かけを、残して久  
しき一ふしに、限りなきこそ面白や

春駒

三味 本調子

日出度やく春の始めの春駒なんご夢に見てさへよいこや申す、よいこや申す花  
のや、盛りのや伊達くらべ、品よきふりを太鼓の拍子にな、打つれ引つれ 合春の小

は 之 部



町の粧ひなんごも、夢に見てさへよいと申すく、それよくさ合筆にばかりを文とは讀まぬ、言葉の返事がよいと申すチ、それよくさ合九十九夜くよ口説ばれちよ、情ないうやあた朧よくな、ごうを暫しはなびかんせ、直實せいもんでなふ、御座んするまあ嬉し、せんご欺されたからは一ぶん立ぬるへ、ア、辛氣それを寝もせて、迷ひまよふ人の心と川の瀬は、定めなや、春の山路はれもしろや

梅 月

三味 二上り

梅が香をいつしか風にさそはれて散にし跡や我ひこり只ほうぜんこ、眺めやる合空にさへぎる浮雲の月をいただきし憎らしい

花 の 香

三味 二上り

ながかれこ、何れもひけん世の中の憂きを見するは命なり、思へば夢の世を、知らでかひなくすむ月の合うつゝの闇に見る花の朧おぼろこ見も分ぬ合明て散なん盛り、惜や暫しの花のゑん合餘波を雲に吹こちよ合こめて甲斐なき花の香を、袖につゝめご小笹のあられ合こほれやすさよ我なみた、俱になきつれ歸る雁合よそに見なして思ひこそやれなごか心のなかるらん

●ほ之部

ほごゝぎす

三味 三下り

宵の口説の、しらけた跡をないて通はるやほごゝぎすへ合松のあらしに夢うち覺て明日の別れが思はるゝへ

ほたる火

三味 三下り

月は今出てもうごき谷がくれ、人は知らずや鳴かて憧るゝ野邊のはたるび合水底に、よふは蛙か面にくや、木蔭に忍び鳴く蟬の、よそにな立る里の松、かはらぬ申を隔てゝ住めば、あしたに残る、袖のさみたれ

ほづき

三味 二上り

秋風に吹かるゝ身こもなりやせん、消もらやらでなま中に、燈籠草の名にしをふ

ほ之部



合タへく疑がはれ、言わけの間も空蟬の、一重の衣を脱捨て、破れかぶれの床のうち、せりふの種をくり出しに、いつそ言葉も夏紅葉、あからむ顔の薄かはや水も洩さぬ實の中を、世の口のはにかゝるも愁や、粹な手に揉れ／＼て、末はねびきの里ばなれ

蓬 菜

三味 本調子

明けましてよい初春や松柏樹、彼の浦島があこたれて、八千代を祝ふ蓬菜の松の位を移してん 合竹の園生も遠からぬ、雲井を此所に土器の 合土も木も我大君のお流れを 二上り 戴きますすこ手示波よふ、廻りかけたる酒機嫌、嘘じやないかや 合ほんだわら、かうじて浮名たちはなの色香に名づけかしますと 合熨斗の附たい何所やらをさころから迎よろこんぶ、彼餅花の柳さへ、それ春風が吹くわいな 合だいど重ね伊勢海老や齡ひの腰の屈む迄、かはり給ふな變らトと、永き縁をから栗や、古言ながら縁もよし、よし睦言の何時までか、盡せぬ眞砂限りなく、夜はほのくこ、日の却も、はや山草に出にけり

●へ之部

紅の文

三味 二上り

宵の間は、後に逢ふせをしは籠の、煙りつい立きりが谷 合さすさかつぎの八重ひとへ、知らせののべの紅の文、心こひ立ひざくらも、ア、儘ならぬ憂きつこめ

●こ之部

鳥邊山

三味 二上り

一人来て二人つれ立つ極樂の清水寺の鐘の聲はや初夜もすぎ四ツも告げ九ツ心の闇路をば照らすや否や稻妻の光じあこの暗きこそ 合我ら二人の身の上よ 合今はなま中ながらへて、だてをしたたら憂き身に愛想もこそぞも 合盡た浮世やいざ鳥邊野の露と消んと最期の用意、女はだには白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋さやに、黒縹子の帯、年は十七はつ花の 合雨にしほる、立すがた、男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色あさぎ裏、二十一期の色さかりをば、戀といふ字に身を捨小舟 合何處へ取つく島とても無し 合鳥邊の山は其方ぞこ、死に行く身のうしろがみ 合弾く三

へ之部



味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ騒ぎあり 合あの面白さを見る  
 時は、染ごの其方こそれがしが、去年の初秋たなばたの、座敷踊りをかこ付て、  
 忍び逢ふた事思ひ出す 合羽織かづいて茶屋をめぐき、ふたせの玉に見付られ、迷惑  
 するを見るこきは、其方に私が無理いふて、口説した事思ひ出す 合祇園林の群が  
 らす、かあい 合かあいの聲きけば、父母の事思ひ出す、涙に道のはかさへ行かぬ  
 思ふまいこは思ひはすれご、此所を浮世の別れの辻よ、早ふごされご手に手をと  
 りて 合行けを歩めご目に見ることに、今を始の終りより 合追人の者や來らんにか  
 あく 合最期急がんと 合鳥邊野の露さきへて行く、見るに二人がせき來るなみだ、  
 トつと押へて是れ染ごの、思ひきらしやれもう泣しやんな、私は泣ねごそれこな  
 さんの、いゝや其方の、いや此方のご、顔と面を見あはせて一同にわつご歎く  
 にう一足づゝに消て行くついに、此野のはなふる雪や、折からにはや寺々の鐘も  
 撞やみ、夜はしらくと、鳥邊山にぞ着にける

常盤木

三味 三下り

松は常盤木、いろそひまさる、若緑り、千代をあらそふ友鶴の、雌雄の翼にやし  
 なはれ梢に巢だつ雛の聲、雲井のごけき春なれや、四方うら、か庭の面、ちす  
 いに、東風の吹さそふ、漣よする汀には、幾萬代をふる龜の、ここぶき盡ぬ君が  
 代は正にみかさの時津かせ、枝を鳴らさぬ證にや、恵になづく民くさの、數もし  
 げみて限りあらじご、あふぐ扇の末廣み

泊り船

三味 二上り

苦の隙間にもる日影、便りなき身の便りに成れば 合人の詞の力草 合結ぶひたちの  
 紐とけて、愚痴なせりふは戀の花、さかりも今日か明日のよに、情あづける心の  
 憎さ、云ふて恨みを泣あかす千鳥の聲も我そでも波を枕に泊りふね

屠蘇酒

三味 二上り

いく春の、豊なる代や注連かざり、君まつ顔も若やぎて、屠蘇のさへに幾千代  
 を 合汲かはしたる相生のなにかは竹のうきふしをこぐの春こそ樂けれ

鳥

追(かぐらの手に合ふ)

三味 二上り



君が住あたりの草にやごしても 合 見せばや袖に餘る白露 合 晚稻の田をも刈り穂に  
 色づく秋の群鳥をおふの浦船こぎつれて、あれく見よや、よその船にも 手事打  
 鼓うつ、鼓じごろに聲立て、日を暮し夜を明し、思ひ亂る、我ころ 合 そらに鳴  
 子のむら雀稻葉の雲と立去りて、行衛も知らぬ身の程を 合 哀れさへも云ふ人の  
 涙の敷そへて、賤き業を忍び寝に、笙さつゝみの聲諸共に、れひつ追はれつ幾度  
 か鳥追ひ舟の浮しづみ

こけす

三味 三下り

身を捨る里あればこそ浮む瀬の、有るを頼に憂きつこめ 合 渡りくらべて名を流す  
 夜毎にかはるはたはたの、實と嘘とを問ひかけられて 合 顔に紅葉する 合 誠なれ  
 合 とも逢はねば嘘よ、辛氣をころの暮せなや 合 恨みられしも恨み人も、ごもにや  
 合 きへ行く春の雪 合 定ないずや櫻の花は、一入首尾のいろに明さん

融

三味 本調子

前彈 あの籬が島の松蔭に明月に船をうかへ、月宮殿の白衣の袖も三五夜中の新月

のいろ、ちるふるや雪をめぐらす雲の袖 合 二上り さすやかつらの枝々に光りを花に  
 散す粧ひ 合 こゝにも名にたつしら川の 合 浪のあら面白や曲水の盃受たり受たり遊  
 舞の袖 三下り手事 合 あら面白のゆふがくや、そも明月のその中に、また初月のよいよ  
 いにかげもすがたもすくなきに、いかなるゆはれなるらな、それは西笛にいり日  
 の未近ければ其影にかくさる、璧へは月のある夜はほしのうすきがごこくあり、  
 青陽の春の始にはかすむゆふへのとを山、まゆすみの色に三日月の影を船にもた  
 さへたり、又水中のゆうぎよはつりばりをうたがふ、雲上の飛鳥はゆみのがけに  
 もたごろく、いち輪もくたらす萬水ものぼらず、鳥は池邊の樹に宿し魚は月下の  
 浪にふす 合 聞こもあかし秋の夜の鳥もなき 本調子手事 合 鐘もきらへて月もはや影かた  
 むぎてあけがれの 合 雲こなりあめとなる、此光陰に 合 さそはれて月の都にいりた  
 もふ粧ひ 合 あらなごりをしのおもかげやあら名残をしのれもかけ

ち之部

長想思

三味 本調子

ち之部

四十九



にくからぬものといこむわびしきは、獨り詠むるねやの月合 艸の庵の夜の雨合  
山ほこぎすひこころ合 ゆめばかりなるたまくらの下着合 にのこるうつり香

茶 ね ん ぞ

三味 六下り

世の中に勝て花は吉野山もみちは龍田茶は宇治の都の辰巳それよりも合 廓は都の  
未申合 すきこは誰が名に立し濃茶の色合の深みざり松の位に競ては合 園こいふも低  
けれご情は同ト床飾り合 かざらぬ胸の裏表ふくさ捌けぬ心から聞ば思惑ちがひ欄  
逢ふて何してかう合の柄杓の竹は直なれごそらは茶七のゆがみ文字合 手事三下り合 覆を  
晴の初昔むかし話の祖父婆合成まで釜の中冷ず合 縁はくさりの末長く千代萬代へ

竹 生 島

三味 二上り

去程に合 是はまた勿体なくも竹生しま、辨財天の御由來、委しく之をば尋ぬるに  
津の國難波の天王寺、佛法さい初の御寺なり合 本尊なにかと尋ぬるに合 せうめ  
ん童子かのゆ申合 聖徳太子の御建立合 三水四石で七不思議合 龜井の水のそこ清く  
千代に八千代にさぐれ石合 巖合 となれや八幡山合 やはたに八幡大はさつ合 山田に矢

橋のわたし守合 漕ゆく船から眺むれば合 女浪男波のたえまより弓手に高き志賀の  
寺合 馬手は合 陸路でかたを濱合 沖なか遙に見渡せば合 むかし聖人のほめ給ふ、餘  
國に稀なる竹生島合 孝安天皇の御代合のとき合 頃は三月十五日合 しかも其夜はつち  
のこの合 みを待辰の一天に、二又竹を相添へて、八聲の鶏合 諸ともに合 金りん奈  
落の底よりも合 ゆるぎ出たる島合 にかや合 さるに依て鳥居に掲し勅額は、竹に生る  
島合 かく合 是竹生しま合 こは讀すなり合 辨財天は女体なれ合 十五童子の其つか  
さ、巖に御腰を休らへて、琵琶を弾じておはします

千 歳 草

三味 二上り

うら若し稚あそびの餘念なき、はづんで手鞠の、數は二二三四ういつも變らぬ常  
盤木合 猶くれ竹千代をかさねて民も豊に、なびく草木も四季をりく合 の 春を迎  
へて開く梅が香、君が爲とて摘む若菜のいろもざりくみつば四ッ葉合 年を重ね  
て祝ふ七草神をいさめの鈴菜すくしろ、芹なつな合 蝶は菜種の花にあそびて堇土  
筆たけて杉菜や夏は涼しき池水に菖蒲さつきと、檜扇かざして頼てあふひ合 澤瀉

ち 之 部



合 菊に姫百合顔にもみちの照そふ秋に 合 山も錦も今日あらためし、松に八千代も  
祝ふたいくたから山ぐさ橋、かうじくして、軒のひらぎ鬼もじぎして、福は内  
へと祝ひ納むる御代萬歳盡せぬ宿こそ目出度けれ

千代の友

三味 二上り

幾千代も、絶せぬ岸の松風に、誘はれ聞ゆつま琴の、其糸すぢを一筋に、しめか  
らみせしつぎ琴の、四季をりくくの詠にも、有しに變らで調べあふ、盡せて諷ふ  
一節に、實にあふこそ樂かりけれ

散紅葉

三味 二上り

霜柱折れてはかなき朝はの、日陰の紅葉散ぢりに其色とても山鳥の尾の流れもさ  
なる泉川 嬉し泉や捨小舟ころろ淋敷秋さへ有るに、そらみがり成る此冬のゆふ  
さるゝ野や心あらば 合 高野の奥のしは鳴鳥の聲ふき残せ山たろし

千鳥

三味 三本調子

不便や濱邊に只一人、友無ちごり泣わめき、武士は物の哀れは知といふは、偽り

よ虚言よ、鬼界が島に鬼はなく、鬼は都に有けるや、馴初し其日より御免の便  
り聞せてたべこ、月日を拜み、龍神へ願立ていのりしは、連て都の榮輝榮花の望  
みぞなし、鏡むしの様な姿を、元の花の姿にして責て一夜は添寝して、女に生れ  
た名聞こ、是一つの樂みぞや、女一人のせた迎、軽い船が重らふか、人の歎きを  
見る目ないか、聞く耳持ぬか、乗せてたべ、乗せをれこ、聲を揚ては打招き、足  
ずり爲ては伏轉び、人目も耻ずに泣居たる 合 海人の身なれば、一里や二里の海こ  
はひこは思はねご、八百里九百里が遊ぎも水入も叶はねば、今此岩にかしらを打  
あて、打碎き、いま死る少將様、餘殘惜いさらばや、無さうが者ごりんによぎや  
つて呉めせこ、泣々岩根に立あがる

塵づか

三味 三下り

偽りの、無き世なりけり戀ころも、おもひ亂るゝ身は細布の、しづ機をりぬ虫の  
名を、きりはッたりてふ、く、音にたてゝ、ともに時雨るゝ袖たもこ露の玉の  
緒かけてや忍ぶあれあの染き今は千つか塵つもり山となりても情こなさけ義理も



煙りも心ひこつた

ぬ之部

濡つばめ

三味 二上り

妹と脊の、契り違へぬ乙鳥は人の軒端に世帯を設け、合や、を産で、合西よ東と餌食をもこめ、合さも嬉し氣に其日をれくる、合我ら二人はいつしかに、ふはの關屋のせこの戸に、せき留られて稻妻や、合有さは見ゆて其れをとも、明ていはれぬ胸のうち合つ、むに餘る、あげ節、袖の雨、紋は三ツの傘に、合ねぐらかうへよ濡つばめ

濡扇

三味 本調子

夜をこめて、合鳥のそら音を忍び出、合心の末は深草や、深くも契る草枕、立ならびつ、裳裾ふむ、合忍ぶ思ひや稻荷やま、何れ浮世を薄紅葉、合青かりし葉も嵐ふく、秋のよすがののへ鏡、合千艸百草いろ飾り、露を含みし虫の音も、鳴は我をば訪やらん、合伏見の里を餘所に見て、鳥羽の戀塚こひ故に、合何處定めぬ玉章を、空飛ぶ鴈に古郷へ、合言傳もがなあくがれて心の花か亂菊の、合狐川にもうろくこ、草の

る之部

留主の思ひ

三味 二上り

袂も我袖も、思ひぞ積る川崎の、合情に結ぶ水の縁、かの、合貫之がひこ、きを、くねるこ書し水くきの、合淀の川瀬の妹脊なみ、合月の桂の男山、合さもあらば有れ我々も、合同じ心に同ト道、合咲亂れたる花すがた、花の夫婦と散はてん、むら村時雨秋しぐれ、しぐれつたひに歩み來て難波う戀の溜り水

を之部

女手まへ

三味 本調子

世の中に、勝れて花は吉野山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳それよりも、廓は都の未申、數寄こは誰が名に立し、こい茶の色の深みどり、松の位に競べては

を之部



合かこいご云ふは低けれご、情は同床かさり、飾らぬ實あかし合ふ、まぶや人  
 目の中くぐり中だちいらぬ口切ご、後は浮名のしたち窓影もる月のさしつけて、  
 天ご云はねご世の人の合口にさる戸も立られず、逢ふて立名がたつ名のうちか、  
 逢はて憧る、池田炭、炭を雪かこいふたが無理か、其白炭を雪ご見て、雪にはあ  
 らで霞灰、碎けて物を思ふ夜は、夢さへ合ろくにみつこぼし、水さす人にふはふ  
 はと乗るは三ツ羽の輕はづみ、輕いは不諾と飛石の据らぬ胸の裏表、帛紗さばけ  
 ぬ心から聞けば思わく違ひ棚、逢ふて何して香合の、柄杓の竹は直なれご、そち  
 は茶七のゆがみ文字、口説に解けし茶筌、憎い天窓のはち叩き、瓢箪成らぬ炭  
 斗の瓢の花は夕顔の、其れは棗の黄昏に、五條あたりや五帖半、よしや氣長に待  
 合し、茶座の廻る月と日の、有らば花咲花器に、離ぬ火箸より添ひて、憂さも話  
 も初昔、昔話の祖父婆々ご、成迄釜の中冷す縁はくさりの末長く、千代萬代もエ  
 うかむせばじんようの江の小さかつき數重ねても色かへぬ、松の位のいつ迄も老

女 狸 々

三味 本調子

せぬや〜女郎の名をもさくの水、大さかつきも浮み出で吞めごも盡すかはらぬ  
 はきりころからころ面白や、みきごきくみきときく名もごはりや秋の夜の、更  
 ごも更に寒からぬは身あがりのみの理りや、理りや白菊の着せ綿ならで白粉の面  
 色はさらに變らぬば、宵の化粧のくまもなき所はじんじやうの鐘聞までの酒宴に  
 猩々舞をまをふよ、櫛の齒の笙をふき浪にはあらぬ舌つ、み現か夢かそれかあら  
 ぬか亂れ足、折しも紅のうら風に秋の調や残るらん、合三下り、千草の冬枯に雲のあ  
 なたに春や消へて、風に飛こふ雪の花散々たよふ君が袂につもるは思ひ千々に  
 心は亂れて、合本調子、亂さかづきかさふれば宵からまいた家雞の、聲もばら〜明  
 かゝる空に酒ほしますぼしに、酒の泉のよも盡〜萬夜さ明のこ取ば、蒲團  
 にはひ立足もごはよろ〜ご、よはり臥たる枕の酔の、醒ると思へば銚子はそこ  
 にさめやらで、あたゝめ酒の爛鍋にはつご咲たる酒中花をちらすな餘處へ

沖 の 船

三味 二上り

恨みわび、干さぬ袖ごは今ぞ知る、君は繫がぬ沖の船、風の誘はよる身トや者を

を 之 部



我は磯邊の海人ごも船よ合 あまごも船よご叫べごも、愁ひ浮世の山おろし、  
餘處の浦わへ吹て寄る、ひるごも分て忘れぬ、なとまぬ先がましやいな

沖の石

三味 三下り

まだ寝もやらぬ手枕に、そでも無い事思ひわび合 うつらくご、更てさへ、寝衣  
のきぬの肌うすし、愁ひぞういご何ごしやう合 悲みの、涙は専せきかねて合 深き  
おもひの淵なる、見るにつけ聞につけ、胸にせまりし數々の袖も乾かぬ沖のいし

女郎花

三味 二上り

行水の、一夜泊りの薄ごほり、解ての後は偽りごうはさもよしや三芳野の、花を  
雲うと云ひし虚言合 其むくひは誰がさるじやへ、軒から白眼鬼がはら露の涙をこ  
はすのは、名のみ残りし女郎花

おほこ菊

三味 三下り

色そめぬあごなき庭の紅葉ばを風が吹あけ落葉の帯を合 結び下げたる松の蔭、時  
雨ふりそで翳もせいで、顔は照葉の山さくら、憎みごふても憎まれぬ

老松

三味 本調子

大君の、國やゆたかに秋津洲の、浪靜なる四の海四方景色もうらゝかに、眺たの  
せぬ御法の庭の老松も合 梢に添へる若緑り、千枝に五百枝の木のもとに合 二上り  
きみかけにう群遊ぶ鳩も三枝の禮義をば亂さぬ御代こそ目出度けれ

落し文

三味 本調子

うたゝ寝の、夢れごろかす風鈴の、憎やうらめし我思ひ曇りかちなる五月闇、誰  
がごふ人も夏の夜を以しかねたる窓のうち合 聲もかすかに時鳥、鳴ゆく方は東か  
西か、戀しき方へ行ならば、あけて云はれぬ心の底を、告てくれかし落し文

おちや乳人(セツ子ともいふ)

三味 本調子

おちや乳人の癖として、脊なに子を貧ひ寝させて置ひて、院の子あんのこと言た  
ものは、目なかけぞよの、花の踊りはな、さて花の踊りを一をごり合 ここな子は  
いくつ、七ツに成る子が、いたいけなご言た、殿がほしご謠ふた合 ても扱もわ  
ごりよは、誰人の子なれば、定家かづらか、放れがたや、川舟に乗せて連て去や



れ神崎へ神さきへ 合三下りても扱もわごりよは、踊り子が見たいか、踊り子が見たくば北嵯峨へござれの 北さがの踊りは、つゞら帽子をしゃんと着て、踊りふりが面白い、吉野初瀬の花よりも 紅葉よりも、戀しき人を見たい者よ、所々れまありやつて、さう下向めされ、さがをばいちやが買ひまゐらせう

老の友

三味 本調子

世のうさをはなれて今は八阪山、月雪花のたのしみを、松のみごりや梅が枝を、つたひ遊びし鶯のおひたつ聲をしるべにて、たづねし友をよぶごり、木々の若葉の風そよぐこのはぐさの糸の音を、聞きつくしてぞうたゝねの、夢の浮世にたつ月日、花に匂ひあらは月には草の露の玉、雪に景色のはるゝ明けほの

老松

三味 二上り

そもく松のめでたきこと萬木にすぐれ、十八公の粧ひ、千秋の縁をなして 古今の色を見す 秦の始皇のみかりの時 天俄にかき曇り大雨しきりに降りしかば帝は雨をしのがんと、小松のかけにより給ふ、この松忽ち大木となり枝をたれ葉

を重ね、木の間隙間を塞ぎたり 帝は太夫といふ爵を贈り下し給ひしより 松を太夫と申すとかや 斯様にめでたき松が枝に 巢をくふ田鶴の齡をば 君に捧げて御子孫は、龜のまんごうふる川の 流れたゆせぬ金銀珠玉 合ごふごふくくご御倉の内に治る御代こそめでたけれ

おけごり

三味 三下り

ささけぬる水にも映る朧月影恥しきうしろ髪、慕ひ寄遊の常陸帯、結び止めたき心根をしるす姿の 踊りの手 契りおほせて古き身の怨を汲むや、れけごりごりよ

れはつ

三味 二上り

戀なかは墨と硯のふた思ひ、筆の命毛こよひが限り、我は此世に捨られて、夏の梅田のはかない事は責て一日夫婦といふて、明し暮して寝たよはも無し明日は我身のよし悪を、のせてうたふか面にくの、十八ヲ、それ、私は十九の厄の年、思ひあふたる、縁はつたなき朝顔の、うちこほれ、こゝろ浮世の別れの辻よ、早ふ

を 之 朝



ござれと手をこりて、見るに悲しやせさくる涙、じつと押へて是のふやいの、思ひ切らしやれもう泣しやんな私は泣ねごいやこなさんの、いゝや其方の、いやこなさんのと、顔ごくを見合せて、一同にわつと歎くにぞ、涙のつゆの玉の緒も絶なはたゆよ二人ゆく道

を き 七(十二曲の内)

三味 本調子

さうくたらりくたら、たらりらがりらりとうちりやたらりたらりら、たらりらがりらりころ所干代までねはしませ我らも千秋候や、鶴ご龜この齡ひにて、幸ひ心に任せたり、君が千歳を経んことも 天津乙女の羽衣よ鳴は瀧の水鳴は瀧の水日は出とも絶ずたりありうごうくく 絶ずたり常にとうたり、あけまさやごんごうや、ひろばかりやごんごうや、座して居たれご まいろうれんぎりやごんごうや 合歌 千早振神のひこそ昔より久しかれとを祝ひそよや、およそ千年の鶴は萬歳樂をうたふたり又萬代の池の龜は、甲に三玉をそなへ 渚の砂さくくくとして 朝の日の色をらうじ瀧の水はれいくくとして夜の月あざやか

に浮かんだり 手事 中にて 二上り 天下泰平國士あんをん今日の御祈禱なりありはらやなじよの翁どもよ 合 あれはなじよの翁どもぞや、何國のをきなごうくくそよや千秋萬歳の悦びの舞なれば一まひ舞ふ萬歳樂くく

れ 七

三味 三下り

むかしより、戀にうき名をたてまつるヨチ、色はさまざま有なかに別て哀れを止めしは 合 八百屋のむすめ七こそ、戀慕の闇のくらがり、よしなき事を仕出し、親の歎きはいか成らん 合 七なくくヨチ申すやう 合 二上り 戀に目もくれ夜も日もわかぞうつらくこ來ぬ人を、まつほの浦の夕なぎに 合 やくや藻塩の身をこがす私が思ひこ迷ひの種じやいな助け給へや南無妙 合 ほうれんけ経く 合 せめて一日わが世帯、夫婦云はれ死ぬならば 合 未來のつみも厭ふまじ私が思ひこ迷ひのたねじやいな、助けたまへや南無めう 合 法蓮華きやう、く、羊のあゆみ程もなく、いさまぬ駒の鈴が森、見る人袖をやしほるらん

落 葉

三味 三下り



音も懐歎みだれさけ、落葉二人を粹なごいふて、女房ひでりのせぬ様に、萩もす  
すきも偽りも、何のかの無き尾はなご云ふて、女房ひでりのせぬ様に

●わ 之 部

別の か ね(つき出し共いよ)

三味 三下り

つき出の始めより、先相なれそめて春秋いくつ、越路の方をよそに梨子地の硯ば  
こ、あけて云はれぬ憂きこと計り、其きぬくのぬかつきに、別れの鐘と憎みし  
が今身の爲になるかね成らば、可愛かろうに儘ならぬ、たとへどうした憂きめに  
合ふが、鬼すむ里のつこめで有うが、男ゆゑなら夫りや苦にならぬ、二八十六で  
文つけられて、二九の十九でつい其ころ、四五の二十なら一期に一度わしや帯  
こかね二十なら四五の、四五の二十なら一期にいち度私やれびこかね返らぬ昔戀  
このぶ

和歌の縁

三味 三下り

新まくら、かはす契りは幾代まで、結ぶ縁にこく下ひもを、しめて寝る夜ぞあか

し合ふ、合言の葉つぎぬ常盤木の春を待得し初みどり、合まつが浦わへ漕ぐる船の、  
縁につながらる縁に、合ひかる、道は敷しまの心みが、ん玉津島、ひかり、合のこけき  
何時までも變らぬなかの御注連繩

若 菜

三味 二上り

年はまだ、合何日も、合立ぬさ、竹に、合今朝、そよさらの春風を我知がほに鶯の、合百  
よろこひの、合音を立て、合うたひ連だち少女子が摘や、合干ごせの初若菜、手事、若菜  
つむての優美さに梅が枝に轉る百千鳥の聲添へば色さへ、合なさへ目出たき

●か 之 部

三味 三下り

鐘に怨みが数々ござる、初夜の鐘と撞きさは、諸行無常こひくくなり、後夜のか  
ねを撞きさは、ぜツしやう滅法と響くなり、晨鐘のひんきは、生滅めつる、入相  
の寂滅のくらと響くなり、聞ておそろく人もなし、我もごしやうの雲晴て、合眞如  
の月を詠め明さん、二上り、云はず語らぬ我ころ、合亂れし髪もみたる、合難面は

か 之 部



只うつり氣なごうでも、男は悪性もの、櫻さくらと唄はれて 合言て袂のわけ二ツ  
 勤さへ只うかく、ごうでも女子は悪性もの、あづま育ちははすばな者じやへ  
 合戀のわけ里、武士も道具をふせ編笠で、張意氣地の吉原、花みやこは歌で和  
 らく敷島ばらに、勤する身は誰もふしみの黒染、煩惱はたいの撞木町よりなには  
 四筋に通ひきつちに禿だちから室の早さき、それがほんに色じや一二三いろ、夜  
 露雪の日しもの關路も、こもに此身を馴染かされて、中は丸山たゞ丸かれと、思  
 ひ初たが縁じやへ 合梅ささんく櫻は、いつれ兄やら弟やら 合わけて云はれぬナ  
 花のいろ、菖蒲かさつばたは、何れ姉やら妹やら、わきて云はれぬ花の色へ、西  
 も東もみんな見に来た花の顔さよへ 合可愛らしさの花むすめ 合戀の手ならひつい  
 見習ひて 合誰に見しよとて紅鉄漿つきより、みんな主への心中立、れ、嬉お、う  
 れし 合末は斯じやになそふ成までは、こんと云はずに濟そへ、誓紙さへ偽りか  
 嘘か誠か、どうも成らぬ程あひに來た 合ふつゝり倍氣せまいろと嗜んで見ても情  
 なや、女子には何がなる 合殿御々々の氣が知れぬ、悪しよなく、氣がしれぬ

恨みく／＼てかこち草、露を含みし櫻はな、さはらは落ん風情なり 合面白の四季の  
 ながめや、三國一の富士の山、雪かこ見れば花の吹雪が吉野の山、散くるく／＼嵐  
 やま 合朝日山くを見渡せば、うたの中山石山の 合末の松山いつか大江やま、い  
 く野の 合道は遠けれど、戀路に通ふ淺間山、一夜のなさけ有馬山 合いなせの言葉  
 合あすか木曾やま待乳山、わかみかみ山いのりきた山いなり。 合やま縁を結びし妹  
 脊のま、二人が中のがね山、花咲きいこのく、姨すて山、峰の松風音羽山、入  
 相の鐘つくば山、東叡山の 合月の顔ばせ三笠やま 合たのめ氏神さまが 合可愛から  
 しやんす 合出雲の神さんご約束あれと、つい新枕さごに戀すれば浮世じやへ 合深  
 い中じやと言たて、こちや／＼／＼よい首尾を 合よい首尾で憎てらしい程可愛  
 らし 合吉野初瀬の花もみち 合いつも色よくな 合さき初て紅をさすが 合品よしあ、  
 たすきのの字の賤が業、しほらしや田長鳴く皐月五月雨さおこめく／＼田植うた、  
 早乙女く／＼たうゑ歌、裾や袂をぬらした、さつさ花の姿の亂れ髪 わたい 不思議や  
 此鐘の、ふしぎや此かねの、我一念の心のきづな、胸のほむらは明王の火炎の黒



けぶりを立たる如くにて、思へば此鐘うらめしや迎龍頭に手をかけ、飛ぶる見ゆしが引かついてる失にけり

鎌倉八景

三味調子

また夜をこめて在明の、月も宿かる武蔵野の、空も一つに契りこし、妹脊の中をふり捨て、かく立出る我つまの心の、中こそ恨めしや、恨みながらも立出て、ふりさけ見ればほのくこ、霧に隔れる安房・上總、出入船のかずくは、遠浦の歸帆これならん、汀の鳥もつがひく羽を休め、寄せ集りてふはこ立や雁かもめ平沙の落雁おも白や、合あれに見ゆしは有難や、いく千代くの神かぐら、鈴の森嵐木がらし颯と吹けば、笠にやかさに木の葉がはらくこちりいよくばらくこ、江天の暮雪まのあたり遙に高き御山は、いつもかこの富士の山、これく其れ見て、見てからく戀がまします、數々の御言葉にはつと欺された、それで寝もせせ迷ひゆく、思ふ願ひを神奈川や、沖にたゞよふ海人小舟、笠漏しづく諸こもに、泪にあかす思のうち、是や誠に肅相の夜の雨も云ひつべし、雨もはる

れば綱を引く、ひくになびかぬ、合つれなごよ、三下り、君を思へば、合かく忍へごも、甲斐うなき、つれなき松に降る時雨、情にへたては無きものを、忘れまじ、盡せまじ、思ひはつんく、釣糸、合引てとやくる處で、本調子、釣た心は面白や、漁村の夕照、合うつすらん實にもものごけき海の面一首はかく詠じける、東路や、合野島が磯の濱風に、我ひもゆひし、妹が顔のみと詠じ捨てり行程に、山市の晴嵐れもしろや、合干雨こる共馬士いやよ、馬かたいやよ、腰にや間柄杓、合手にや又煙管月の都をふらねばないよさ、何した心底しほが無い、合日もはや西に入相の極樂寺の晚鐘と、聞しに優るはつ池や、合由井が汀による波、峰の、合嵐にもみ合せ寄る波がごうくご、ごつと打てはさつと引き、日本無双の名ごころや、これを妾が住家こて雪の下にぞ着たまふ

鹿子づくし

三味 二上り

色を染出す、かのこの模様、京はなんでもくよいひは鹿子、雲の海、伊達を駿河のふじがのこ、よいかのく、よいく鹿子の小袖、胸高に着なして思ひそめ鹿



子、淺黄かのこに、紅がのこ、たまりませんとな、腰をほごく、ほごくこ打  
出しがのこ人が名たて、ついで結がのこ、れ江戸むらさき鹿子はよいもの一がのこ

桂男

三味 本調子

思ふこと、有ればこそ寝ね初雁の、夜渡る聲も寒からで、合 それに立名も久かたの  
月にや影を亂すらん、手事二上り、露しんくこして眞葛に虫のうら音さへ、只まつ虫  
の音信も、尾花が秋を招くやら誘は、越ん關もめでし、合 虚音やつたふ夜半のくだ  
かけ

春日野

三味 三下り

かすが野の、若むらさきの摺ころも、忍ぶの亂れかぎり知られぬ我れもひ、合 置く  
露は、しづ心なき秋風に、うつろふ人の小むらさき、花むらさきの萩が枝に、亂  
れみだる、心のつらさ、合 本調子、そのくり言の、またの夜に、合 君ならで、よんく、餘  
所にはさあへ、色には移さトさあへ、合 紫の色に心はあらね共深くう人を思ひ初、  
かひも渚に我袖しほる人目、ひこめ忍ぶの我通ひ路を、船に打のりおてき達は來

ぬかの、打のせ、よせつ幾度もも宿の首尾、こは思へとも只一筋に此わけしら  
ぬ人ならば、たごへ萬にいみじき迎も、玉のさかつき手にふれよ、合 いやんとさせ  
そこはいよく知られぬか、君に逢ふ夜はまつら山、合 二上り、手に描て、合 いつしかも  
見ん紫の、ぬに通ひ行くた、寝の、君のきみの仰せは、合 實こは見ぬへ、しん  
ぞ此身はく、涙もろふて憂ひを愁いごへ枕も、浮ばかりへ、合 わけのく、よいに  
は、合 いやほたさるへ、しんぞ此身はく、涙もろうて憂いご愁いごへ枕も、うく  
計りへ

かづき面

三味 二上り

まよひ行、時もたがへせ丑みつの、秋風さむく身にしむも、嫉妬の念のはれやら  
ず、夜なくこに恐ろしき、姿かはれば心も變り、人はそれ共いざしら衣、合 鬼  
女の面をかくし持、庭のたまりの泉水に、寫す姿は我身からぞつこ身の毛もたち  
まらに、合 ほにあらはる、糸すき、木々のしけみを傳ひ行く、合 積る恨みの數々を、  
いつか晴さん今宵の内に、思ひ知らさん思ひしれ、合 逢ひみし時は我れならで、枕



は外にかはさじこ、云ひしも今は仇なみの、水に寫ろふ月小夜が、馴染はるか遅  
 ざきの菊の實生の種まき残す、三月四月は袖でもかくす、最早七月あらはれ月よ  
 樂祈念でも下るまひかいな、うらめしや、此世を去らば我一人、思ひおもはれ思  
 ひのかづら、亂れ髪ばらりばらり、ばらく、本おそはれ恐る、小ぐるまの、めぐ  
 る因果はくるり、くるく、苦敷此身、合かつきし面は其儘に、生れついたる二ツの  
 角、れのれと動く計りにて、我身もあきれて是はいかに、取にさられず、ぬけ共  
 はなれぬ執着の、いごう爲るこそ淺ましき

片 し 貝

三味 三下り

世を憂しこ、忍ぶ山路の花もちり、辛氣つれなや同じ身に、同じ思ひを浮む瀬に  
 浮てたゞよふ片し貝、合あはぬ筈なら夜ごこの夢に、ほんになま中見えぬがよいに  
 現うかく、人目の關よ、餘所に匂ひの梅の花、見るをよすがに存へて心に、霞む袖  
 の月春やむかしと問こし人の、せめてたごへの形ふり成と一人かこたん肱まくら

神 樂 初(十二曲の内)

三味 二上り

千早ふる神代のはトめ、素盞男の、あらき心を憎ませて、天てる神の御いかり岩  
 戸に隠れましますば、ごこ闇の夜ご成にけり、萬の神の歎かせつ岩戸の前に集り  
 て神樂を奏したてまつる是う神樂の始めなる、手事ごきに天照大神宮すこし打笑た  
 まひつ、三下り、岩戸を開きましますば人の面しろくと見ゆる心の嬉しさは面白  
 きとは申すなり

神 谷 河

三味 二上り

鳥羽玉の、我黒髪やはららん、鏡のかけに降れる白雪と、合よまれし人は老ぬれ  
 せ、杖をば誰につくもがみ、昔に今もかはらトこ、心はわかぬ浦なれや、合鶴の齡  
 ひはおろかにて、手事三下り、萬代までもふる里の、合花にはな咲く身なれども、頭の雪  
 はいつととも、合きゆる事なく時知らぬ、富士の高根に人知れず

通 ふ 神

三味 本調子

田毎に寫る月影ならで、夜毎にかはる枕の數の、中に粹あり不粹有り、すまぬ心  
 に清月の、合何が辛氣の種じや、ら、尼目遣ひも餘所にして、任せぬ首尾を譯ある

か 之 部

七十三



か 之 郡  
七十四  
様に 合 愚痴なせりふか戀の實、末は野さなれ山水の、神に縁を任せなん

かくれんは

三味 三下り

朝顔の、盛りは憎し迎ひ駕、夜るは松虫ちんくくちろりく 合 見ゆつ隠れつ  
隠んは 合 行すゑは誰が肌ふれん紅の花 合 あんじ過しを枕にかたれ、髪ゆはぬ夜の  
女郎花、いふてもおくれな小夜嵐

川 千 鳥

三味 本調子

雲と見し東の山の初櫻 合 みざりとなりて鴨川の 合 岸の柳のなびくよは 合 ひるのあ  
つさを忘れつ 合 如意のみ手より出る月の 合 手事 二上り さゆまさりぬる霜の夜に 合  
早瀬を傳ふ川千鳥 合 幾千代ちよこつぐるにう 合 君がよはひのかぎりしらす

門 松

三味 二上り

君が代はつくや手まりの音もかな 合 はやす 合 拍子の若菜草、につこりるがほや門  
に松、ものもしごふれよきはるでござります 合 ふくやこくわかごまんさい、まご  
ごにめでたき千代の春

揖 枕

三味 本調子

からろれす水の煙のひさかたに 合 なびきもやらぬ川竹の、うさふししげきうさね  
の泊り船 合 よるく身こそ思ひしる、浪かなみだか咎もるつゆか、ぬれにぢぬれ  
し我袖をしぼる思ひをおもつみ 合 ながれわたりにうかれてくらす、心つくしの  
かちまくら 合 手事 二段 さして行衛のさほくとも、ついによるべはせしこのうへの、松の  
ねかたさちぎりをば、せめてたのまんたのむは君に 合 心ゆるして君が手に 合 つな  
ぎとめてや千代よろづ代も

龜 遊 び

三味 本調子

前引 欠かたのそらものごかに光りそふ、げに九重のたみの戸や 合 さかふるさごも  
あづさゆみ、引つれうとふ乙女子が 合 いさやみさをやすめん 合 よるへの水もい  
づみ川くめやめくれやさかつきの 合 手事 二上り くすりさきくのまれ人も、浮世を花に  
すて小舟 合 みつのうらはにさをさして 合 君が代うたふ千代やちよ、萬代やへん龜  
遊ぶ、かめのお山につるのまひ 合 たゞ萬歳

か 之 郡

七十五



國土安全長久の 榮花もいやましに猶悦びはまさり草の菊の盃ごりぐに、いざ  
 や呑ふよ 合めぐれや盃の流れは菊水のりうに引れて疾く過れば手まづさへぎる菊  
 ごろも、花の袂を翻へしてさすもひくも光りなれや、盃のかけも廻る空う久しき  
 合我が宿のわが宿の菊の下露けふことに、幾代つもりて淵と成りぬ。よもつきと  
 世も盡きと、薬の水も泉ふれや汲め共く彌増に出る菊水の、呑めば甘露も斯や  
 らん心もはれやかに、飛立ばかり有明の夜晝もなき樂みは、榮花にも榮耀にも  
 實に此上や有るべき 合三下り 何時迄か榮花の春は常盤なる猶幾ひさし有明の月人  
 男の舞なれや雲のはそぞを重ねつ、悦びの歌を 合うたふ夜もすがら日はまた出で  
 明らかく成て夜かと思へば晝に成り晝かと思へば 月またさやけし春は花咲紅葉  
 も色濃く夏かと思へば雪も降て四季折々は目の前に萬木千草も一日に花さきけり  
 面白やく 合猶いつまでも生の松榮花の程も盡じつさせと春夏秋冬ながめは同じ  
 月もゆきも 合花も紅葉もさかゆる末こそ久しけれ

水無月頃の晝畑へ来て見れば 茄子夕がは白瓜冬瓜、汗を流して暑を凌ぐ、か、  
 る所へくさむらより蛙一疋にけ出で、扱々ひやいや危険こと、あまの命を拾ひし  
 と、悦ぶあこよりさはくく、草押分て蛇が、鎌首 合もつたて 合もつ立 舌をび  
 らく飛掛れば、蛙驚き飛しさり、たつた一言聞てたへ、私が親父は鳥に取られ  
 合どうう敵がごりたいたい、一家一類相談なかば、夫れをれ前に吞れては、斯る望  
 みも水の泡、哀れと思ふて蛇さん、ごうを助て給はれと、雨を呼ぶより聲高く、  
 鳴より他の事うなき 合ここはり聞て蛇も、れれが悴を鷲にかけられ、世には似た  
 事有ものご、ごろりくご立かへる 合あこ見送り、蛙はここく打笑ひ、彼奴を  
 まんまご事計し、口は重寶なる物ご、傍への溝へこんで入る

やへの沙路を、へだてて住ば かはすまも無きうき枕、とけぬ心のあやにく  
 に、名残をまざる専なを、沙なれ衣かたしめて 合二上り 思ひぬる夜の夢にだに、其



面影の見ゆもせて包むにくゆる藻しは草、憧れゆく身の慕はれて、餘所の勤も大  
切に見せつ見られつ暇なき、心のいこの一筋に、かけし誓ひは仇しよの、うつろ  
ひやすき花の色、外にちらさぬ言の葉も、禿が袖に忍ばせて見し嬉しさもいつし  
かに、我のみ思ふ片便り、待につれなき秋のかぜ

神 樂

三味 二上り

たち縫はぬ 衣さし人もなきものを 合 山姫の布さらすらん 合 さほの嵐の長閑  
にて、日蔭も匂ふ天地の開けしもさし下す棹のしたゞり成とかや 手事さる程に  
く、春過ぎ夏たけて、秋すでに暮行や、時雨の雲も重なりて 合 蜂白妙にふり積  
る越路の雪のふかさを、知るや印の棹たて 合 豊年つきぬ行末を計るも棹のう  
た、諺ていざや遊ばん、ごさんごいやく 寶やまかげの神かぐら賀茂の宮むは  
幾久し

鐵 輪

三味 三下り

忘らるゝ、身はいつしかに浮くさの根から思ひの無ならはんに、誰を怨みんうら

菊の、霜にうつろふ枯野の原に、散り果なで今は世に、ありてぞ愁き我つまの 合  
あしかれと思はぬ山の峰にだに 合 人の歎きもおふ成にいはんや年月思ひに沈む怨  
みの數、積りて執心の、鬼さ成るもここはり 合 いでく 怨みをなさんごしもこ振  
あげ後妻の 合 髪を手にから巻て打や宇津の山をば、夢うつゝ共わかざる浮世に 合  
因果はめぐり合ひたり、今さら左こそ悔しかるらめ、扱こりや、思ひ知れ、 合 殊  
さら怨めしき、あだし男をさつて行んと、臥たる枕に、立よご見れば、恐ろしや  
御幣に、三十番神ましまして、 合 魍魎鬼神はけがらはしや出よくご責たまふりや  
腹たちや思ふつまをば取らで剩へ神々の責を蒙る悪鬼の神通つう力自在の勢ひ絶  
て、力もよはくご、足弱ぐるまの、廻りあふべき 合 時節を待べしや、先此たび  
は歸るべしごいふ聲ばかりは定かに聞へ、云ふ聲ばかり聞へて、姿は目に見えぬ  
鬼ご成にけり

龜 の つ が ひ

三味 三下り

れもひ寝や、夢さへ聞の虫の聲つらや難面やあだ人の、ちぎりは憂しと世を捨し

か 之 部



行々何ごたあちめの心のわきと吹あれし身のかなしさを汲てしる。情てりそふ  
 庭の月、晴ゆく雲や武藏野の、むねも廣野となりゆきし、其うれしさに何時とな  
 く忍ぶ契りのかひ有りてほんのまこと、萬代の龜のつがひの片かたをしめて、寝  
 夜のうつへにも、惜からざりし命さへ、ながくもがなご祈るなる、例をひくご色  
 かへぬ、松の浮名も厭はまど、同トはちすご定ては思ひれくご更になく死ての  
 後の後までもかたみご残す戀ごころも

●よ之部

夜々の星

三味 三下り

玉くしげふた、び三たび思ふこと、思ふがまゝにかきつけて、合本調子 みすれどあま  
 のかづきして、合 かるてふそこのみるめにも、合 ふれぬをいたみたのみにし、合 筆にさ  
 へだにはづかし、合 軒の忍ぶにさゆやすき、合 露の身にしもならまほし、ならまく  
 ほしの光りすら、合 手事 たえてあやなくなるまでも、合 二上り 八夜九夜されもひあかし  
 雲井をながめすべをなみ、合 袖のしづくにせき入る、硯のうみに玉やしづめん

四つの色

三味 三下り

かぎらトな緑りの春を幾千代と、合 松の齡を身にそへて、幾歳ごに若竹の、かは  
 らぬ色は水くきに、なをかきおくる天の川、君が便りを菊の香に月のるにしや長  
 月の、合 有明月のしらたへにつもりし雪は豊年の春待顔の梅の花

横づち (打ばんに合)

三味 本調子

横づちはもしやほかよりあひづちがあいにくるかごたなのほし、合 こけつまろひつ  
 かたでうち、合 ちから一ばい色つやを、合 うちいたしたるくぜつごご、合 よいのきぬた  
 はきぬくに、合 手事 かなしき風の袖のあめ、かはくままちてあすの夜も、合 かたいや  
 くそく打ばんのせなかをなぞたりた、いたり

四のそで

三味 三下り

憂き中の、ならひご知らば斯ばかり、合 花の夕べの契りご成も、初のなさけ今の仇  
 合 いつそ逢はねば斯した事も、ほんに有まい、よしなや愁や、合 あだに暮せし月日  
 の程もいはで思ひの涙のあめに、いご、朽なん四ツの袖



月にむら雲合花には嵐合さはり有る世のならひも愁や心くらへに年ふる身さへしの  
ぶ文字合ずり 亂れてん、物を思ひ顔じやこ問はる、度に、袖のしたひもせきかね  
て、人目つゝみもあ、儘よよしや世の中妹脊の山の、中に流る、吉野川 末はど  
うかも白なみの立もいこはト厭ふなあだな 花の契りも添ふたに後こ、色になれ  
ゆく戀衣

宵の夢

渡らじな、清きながれを打こせば 波や立らん老のなみ 合よるへも深きくせなが  
ら、山も愛せば山もまた 雲間に松の枝たれて、さかしき路の蕪かつら 合よしや  
君せん市中や、遊びくるわの人や問ふ 手事本調子 はづかしや柳はみどり、花また人  
を笑ふらん 合よし淺くとも渡らじな

呼子鳥

我妻の、振袖しらぬ妹脊中、声の浦邊につき纏ふ 合いさまりといふ中を、外の雌

鳥合と羽うらかはし 塙合さためぬ跡々を 尋ねて誰をつくも髪、よその見る目は、  
呼子鳥

四ツのくさ

程ちかき、戀の道のべ有ものを、憎やあらしに吹まどはれて、あちな道すち行こ  
も知らさ、里に見馴ぬ笹龍膽、野ぎく草ふち夏枯草ちよつこ 悋氣も花のつゆ、袖  
をかへせば夢むすぶ

四ツの民(四曲の内)

限り無く、静なる代や吹風も、名古曾の關も山櫻鏡の袖ちりかへり、花すり衣陸  
奥に、駒を進むる君が爲め 弓も袋をすきくはや、案山子を友と野邊の業 菜つ  
け水ひきみつ取り 薪にかたを彼處なる木間の月の樂みて、山路の憂きを忘れ  
めや 雨露しもを凌ぐ身の 工匠はすみこかねてより、大官造り殿づくり 二上り  
鳥帽子素袍も花やかに、賤が新端も建つゝき 錦おるてふ機もの、夜寒厭はじ綾  
ごりの絹 手事三下り 本調子 染て貴賤の色わかぬ、同じ眺と白妙や雪は一入きぬく



の、情あきなふ、すぎはひに、姿言葉は賤しくも、心ばかりは皆やさしかれ

淀川

三味 二上り

春の夜の、ゆめおごろかす家雞の、其きぬくの物思ひ、また逢ふことの何時かは、深き心のかこち種根びきにせんと言かはす、身は捨草のすてられて流れし此身は淀川の、何を便りに浮草の、波にゆらるゝ海路の、あはぬは君が情けなや、妬ましや、それは若草身を恨みぐさ、なんの其方にあはいでは無し、飽もあかれもせぬ中なれど、請出され行く、あこに残て拙き此身、せめて哀れと思へかし、れくりかへせば淋しや聞も、今は枕に、香ばかり残る、憂きれもひ、猶恨めしき鐘の聲、下行水の思ひがは、底の心はしら糸の亂れて、物を思へこや、鳥がうたへばもいのこれしやる、サアノほんゑ、月夜がらすはサアいつも、鳴くよ、しよんがへ、暫しこまりてくれよかし

よ る べ

三味 本調子

まかなくに、何を種とて浮草の、花に浮れく、年月なびく、風さしひく心のか

ちに合しめつゆるめつ得手に帆を、上げの暇に身をぬきばなは、ほんに阿漕が浦にしき、合かひこる、襦のしごけなき、行衛は何處あま小舟

吉野

三味 三下り

吉野の山を、雪かこ見れば雪では有らでん、ヤア、これの、花の吹雪よの、ヤア、是の、立田の川を、錦かうこ見れば錦ではあらでん、ヤア、是の、紅葉がらみのん、ヤア、これの

●た 之 部

道中 双六

三味 三下り

筆のさや焚て待夜の蚊遣より、香のすがりは簪のさんぎも捨て車座に、廻り始る双六は、五十三次手の内に、投だす賽の目くばしに、壁にまじく、大津繪の、ふり出すやり手先ばらい、座敷踊りの中入に、仲居が運ぶ重箱は、姫が餅かこ口ぐちに、坂はてるく、すぐすゝかの茶屋に、花の一もこ忘れて来たが、あこでや、あこで咲やらそれ開くやら、よいやな、あこひの土山雨を見て、曇るさしひを迎ひ

た 之 部



鴛 人目の關の門立の、赤前だれの夕でりに、おじゃれたじやれの手を引て、をつ  
 こ泊りの床これば、眠る旅路のなみ枕、七里ものらぬ引船に、つなぞ悲しむ憂き  
 おもひ 一間にこもる琴の音の、岡さき、く女郎衆が、はし女郎衆、一夜妻か  
 ら吾妻路に 夜もあか坂のきぬくに 合 かざす扇のうら道を 見附こす程おそろ  
 しき、音に聞ゆし大井川、岸の柳の寝みだれて、こは島田の逗留かいな、され  
 ばいな 合 つもり情の雪の日に、富士に雲助ぶらくく 合 かうしの外の轉び寝に、  
 夢にはみしま 箱根やま登り下りの戀のさか 飛脚の文のなか川や 御ぞんじよ  
 りの土産には、江戸むらさきのへ

丹 頂 の 鶴

三味 三下り

数々のさかつきに千代萬代とかさねく廻らする、てうしも取ざり糸竹の、聲  
 も賑はふ颯々の松の風、丹頂の鶴は、庭上に舞をかなで、齡ひを捧る、君が御代  
 合 盡じつさせトよむ共つきじ眞砂のかず、一ツ二ツ三津の濱四ツの海波静にて豊  
 におさまる御代ぞ目出たき

龍 田 川 邊

三味 三下り

龍田川邊に船ごめて尾花楫とる秋の風、あさ風さは、身に入こいふすね言葉、癖  
 の有こそ女はよけれど、唐土人のうたふうたかた、あちけ寄べを云ひかけられて  
 何のいらへも無のが返事、女郎花にも男はあれば、誰にれち近たつきも知らぬ山  
 の鹿の音、此里ごこの、はでに見せぬも情の花の、菊のさかつき千代めぐる

玉 椿

三味 三下り

春を、隣りに笑ひかけ、いと々咲たい玉つばき、深山づたひも厭はねご、瀬にせ  
 かれつ、谷川の、年の内にもちよつきりこつきりこ、相圖の文やたまゆかし、文  
 や給ゆかし

高 瀬 舟

三味 三下り

木津川の流れも狭き身は高瀬ぶね、淺きは戀のまへかたよ、そこの心を知らせな  
 や、亂れみたる、川やなぎ、まつに繋がる引ふねの、寄るべ定め憂きおもひ、何  
 の空吹松のかぜ、身にしみく、最愛く、遣り手禿のうき愁き、聞をひき出す東



雲に、送る姿の一重帯、またのさらば云ふ迄は、ほんに逢ひたし逢はねばつら  
し氣の毒や涙の玉の緒も、思ひに絶なば絶よかし、それさへ心に任せぬは、ごふ  
もならぬへ

竹の縁

三味 本調子

川竹の流れも深き、戀の細道たどり来て 君がよすがは白竹の、笛を相圖の一節  
に 心のたけを吹くむ翠簾の、隙洩る風のしみくく 戀のしがらみ人目の關に  
車はなよ竹の憂き思ひ 日もくれ竹を待詫て、箭竹心に忍ぶ愁さの、つもりく  
て雪折れ竹よ 千里の竹に虎すむ逆も、私が思ひは熊笹や、直な操を立てこそ、二  
肌竹に結ぶ縁の願ひも叶ひ 合二上り いか根びきの色まさる 肌への雪の下紐さけ  
て竹の子迄も設くるならば、ほんにお前も嬉かる 二人ねざゝに締からむ、夜深  
き闇のさゝめ言ふ、しどけ無のは若竹の、好た同士は節もなく、幾千代こめし竹  
の縁

玉かつら

三味 三下り

君ならであけまじ物と思ひ詰かぞへて年もふり分の髪のみすぶの蝶花がた寝る  
間の夢か手枕にかゝる縁をかんださしの翳の櫻にほひさへ 深くも心紅るのほんに  
その鬢くゝり髪や鹿の子の末長く

玉つば

三味 本調子

見る度に飽ぬ色なり足曳の 片山椿今う咲く 花に心を越の雪、其初あらしあか  
しれん、また青柳のいと幽艶き玉水の咲ぶりもよき都べに、 合 ふみからいこの嚴  
しま 互ひに峯の雪解けて千歳もちづる鹿の松 合 みちさら渡る照明の月 手事 常盤  
山、やつほの峯の玉椿 色もかはらで幾世経ぬらん

瀧盡し

三味 本調子

音に聞く吉野の瀧の其末は、妹脊の山の、中にはや立つ龍門の、流れも那智のま  
さなきに 忍ぶ契りの音無や、花のかぐみの音羽山、亂る、瀧の白糸を繰返しつ  
青柳に 櫻まじへし都の錦、くれはあやはの織姫や、天津乙女が夏ごろも二上り  
雲井に晒す布引の、瀧津瀬も越す五月雨に、何れあやめか顔よ花、引手数多の身

た 之 部



なれ共、いなには有らぬ有馬山合にしにも名而已合あげまきや、鼓の瀧の其音は合絶合ずとうたり翁が瀧の、表や箕面裏見なる合それは東路日の光り合月に玉しく嵯峨野の露や、戸無瀨に落る大堰川、下す後合に降る雪は散かふ花と見紛ひて、山靜なる峯の雪ゆたかに積る養老の、猶も齡合ひを増す泉

寶 船

三味 二上り

春の初めの磯を漕ぐ、れふねは寶を積合きぬこ、世のうさも無く、迎ふる春のゆたけさに合儘ならぬ身も糸遊の、心にさけて合西もひがしもれぎこおぎ、春をうかめて難波江の、背門長閑に吹わくる、風に任せて淀堤合のぼることじに引れくぞ、加茂川さして九重の合都の春につながらる、深き契りもかゝるうこ、臘の月の影忍ぶ、船の寶を此里へ合三下り、あけて岸根に寄る波の、盡せぬ數は何時迄も人の情と積かへて、町す一夜は長かれこ、あかね枕に千代の春合こめて幾夜の契り頼まん、ア、籠て幾世のちぎり頼まん

高 尾 山

三味 二上り

名にこれふその名や四方に高雄山、けに秋ふかきいろくの木々のこづもこくうすく、色つけそめてなまめきとあだし心はあゝ山中の妻こふ鹿に泣たてられてすこしははぢの初紅葉身にしむあさのきりぶすま、かつきたてればねみだれがみの、とけしなさけの薄紅葉、思ひそめたる深谷のそこの、そこのころは人知れず、かいて見んにもかみなし月よ合三下り、ふたたび花の咲き匂ふさくらもみちのちりやす世にまつは時雨のそめかねて、つたの紅葉を千こせのいろこ枝にいく秋ちぎるらん、みわたせば峰もふもこも皆そめなして錦をかけし山の夕ばへ

玉 の 臺

三味 三本調子

玉のうてなもこひしたふなみた川合我身しづめてあふ瀨のあるなら、こひにやんさすてばや、戀はあたものな合手事散し、ひこむらさめに立よるやごもなこりはかなしきに合ましてやこれは淺からぬちぎりあるにさゝんせさかつきを、のもふちけを

大 佛

三味 二上り



だいぶつのもをは京のならさかや 合 このてがらはのふたれもて窓からまごのか  
いまみにさゝやく聲もこたまして、きいていよとも耳塚に 合 なんの遠慮もふこし  
き柱 合 たがい手に手のはこあはしてたきしめて穴を忍びしくぐらばくぐれ、鳥  
はものかはつりがねさへも、つかぬ夜あけてまたふこんきてねたる姿や東山

高 砂

三味 三下り

高砂や、此浦ぶねに帆をあげて、月もろこもに出しほの、波のあはぢの島かけや  
合 遠くなるをの沖すぎで、はや住の江につきにけり、早すみの江に着にけり

た は ぶ れ

三味 二上り

春は只昨日も今日も定めなく、老も若きもたはぶるゝ、高根の雪も見る花に、心  
を移すやるせなさア、辛氣 合 言の葉ぐさも縁となり、手に手をむすぶ誰が袖の、  
其移り香に誘はれて、月も朧にふみ迷ふ、花の面影夢かこも、そこはかと無く暮  
て行春の別れや憎からん

玉 川

三味 本調子

山城の、井出や見まじと駒留て 合 猶水かはん山吹の、花の 合 露添ふ春も暮れ 合 夏  
來にけらし見渡せば 合 波の柵みかけてけり、卯の花咲る津の國の、里に 合 月日を  
送るまに 合 三下り いつしか秋にあふみ成る野路には人の明日も來ん 合 今を盛りの萩  
越ゆて 合 色ある浪に宿りにし、月の御空の冬深み 本調子 雪氣催す夕ざれば 合 沙風  
こして陸奥の、野田に千鳥の 合 聲淋し、床敷 合 名だゝる武藏野に、晒す 合 晒す  
調布さらくに 合 二上り 昔の人の戀しさも今、將そひて紀の國の、きのとく成は忘  
れても、汲やしつらん旅人の 合 高野の奥の水迄も、名に流れたる六ツの玉川

た ぬ き

三味 本調子

鐵砲下し彈藥、火繩を付てねらひ寄る 合 狸たまらずぐわさゝと這出て、のふ  
暫く待たまへ 合 あの岩蔭の森の内 合 男だぬきが居り申し 合 夫婦が中を睦敷、互ひ  
に變なかはらトと言かはしたる睦言を身持に成て身も重く、それをお前へ打れて  
は、腹成る我子は闇から闇ごうぞ、助てたまはれと手を合してを頼ける 合 官守と  
もに泪ぐみ人間畜生と異れ共 合 恩愛の歎きはらじと 合 鐵砲れろし立上れば、狸



大きに悦んで、命助る御禮に我妙得たる腹鼓、只今きかせ申べしと、腹撫下し坐を組で合手事宮守ほとんど感入り、ちい／＼ぼう／＼の打分は、眞の鼓に増るべし合目出度／＼と、笑ふてこそ歸りけり

●れ 之 部

れ ん ぎ

三味 本調子

おく山にあまたきりだすその中に、ひよくれん木といつなれそめて合けむりのたねこ小原女が合手事ころろつくしにれる日の、おもにもなんのいこふまじ、君をつむりにいたゞきつれてあしならすりこぎ八瀬の里

連 理

三味 二上り

梅が香の連理の枝にさと馴し、聲ものごけき鶯が春におくれし花のゆん合あかず眺めて心のみ、うかる庭に羽を休め、園の故蝶にたはぶれを、忍ぶ思ひは吉野川ふかき流れに散さくら合たこひ浮名をながすとも底すみわたる丸木橋、ふみかへされし紫の由縁と筆に杜若合たゞ水ぐきは云はせても、人の心と秋風にふかる

身きて埋み火の、下にこがる、園のうち

●そ 之 部

袖 の 露

三味 二上り

白糸の絶し契りを人間はん携愁さに秋の夜う長きあだに問ひ来る月は恨めし、月ほうらめし合明方の枕に誘ふ松むしの合音も合絶え／＼にいと猶合萩ふく風の音信も聞やこ待て佗しさの、涙の露の置て思ひ、ふしてまる寝の袖に乾かん

袖 づ き ん

三味 本調子

夕嵐さむさ厭はぬ袖頭巾合つゝめど人目立ばなの花の合薫りも空ふく、櫓太鼓の呼出しを合ちよつこ中戸へ知らすのは、とふ云ふてよからやら、思ひ直せごかこつ身を、祈れご更に神さんも、惚た同士は是非がない合只世の中は戀草の、たねと眞砂は盡せめや

園 の 秋

三味 三下り

太夫すは、皆かしに行て露ばかり、跡にかるかや桔梗やの、其庭もせも秋くれば

そ 之 部



合あこきに尾花おなばなや女郎花おんながはな、廓くわくけしきと打うつれて合あしやんと小褙こせをこりかぶと、れのがより風かぜより添そひて、咲さ亂らんれたる萩はぎすゝき 手事てし其手そのてにからむ顔朝かほあしたの合あ東雲あづまがたの朝あしたあらし、空そらも匂ほふか秋あきの七艸しちそう

袖そで 香か 爐いろ

三味 二上り

春はるの夜よの暗くらはあやなし其れかこよ、香かやは隠かくる、梅うめの花はな散ちれど薫かほりは猶なほのこる袂たもとに伽羅かいらの煙けむりりぐさ 合あきつく惜あはれめと其そのかひも、なきたまごころも、ほんにまあ 合あ柳やなぎは緑きり紅くまの、花はなを見捨みすて歸かへる雁かり

袖そで の 雨あめ

三味 本調子

花はなごころも袖そでもかはかてふるまゝに 合あこころしも宿やどのさみたれに 合あのきにわびしさあやめぐさ、あやめもわかぬ天あまつそら、夜よをうば玉たまのしるべもあらん聲こゑまでも、きぬて行いらしほこゝぎす、かりにもあらばふみたにも 合あよそなるも國くにのたれしらは雲うのとほぢのはるくゝさ 合あ三下り そこにうてらすしやうみやうの月つき 手事てし本調子 ふきはらひ心のちりもなにはがた清きよきたもこに法のりのうは風かぜ

袖そで しぐれ

三味 二上り

前まへ ほどやつれなき 合あこころこころ 袖そではしぐれの時ときもなきに 合あしぐれは袖そでの 合あそではしぐれのこときしもわかぞ

●つ 之 部

月つき の 枕まくら

三味 二上り

空そらさだめなき秋あきの夜よの、月つきはかくれに入る雲うか、月つきをかへすのか、こがれして逢あふ今宵いまよ、なぜにお前は其様そのようにそむいて一人寝ひとりねやんすへ、枕まくらばかりが可愛かわいひか空定そらまめなき秋あきの夜よ

鶴つる の 嘴くちばし

三味 三下り

二世にせや三世さんせと言葉ことばをいふは、水みづの泡沫うたかたそりや空そらの雲ううそにも指ゆびが切きられうか、いかいお世話せわの悪わるじやれおいて 合あ爪つめの代しろりに鶴つるの嘴くちばし、それを便たりに憂うれきつとめ

蔦つた 紅べに 葉は

三味 三下り

雲うが云いふ月は隈かどなきものは知しれど仇あだと情なさけと浮世うきよのざりと 合あ三すぢに分わる清水しみづの

つ 之 部



いとし可愛の行合はしなこそ變れ涙の雨に濡がき、ます證を見せて合三下り引手あ  
またと鼠なき外はてらした蔦もみぢ

露の蝶

三味 本調子

世の中を、何にたごへん飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬と、變りやすさよ人心いま  
は合此身にあいそもこそも、つき夜の空や鷄音を、恨みし事も仇枕、憂きを知ら  
ずや、草に寝て、花に遊びて朝には、露に養ふ蝶々の合身うらやまし無爲や思  
ひきり無き女子氣の、涙に浸すそそ合袖まくら

筑波山

三味 三下り

逢ふは別れと兼ては知れど、今朝の後朝いつより愁や、稀に逢ふ夜は飛立ばかり  
ごふか斯かご心のたけを合云はふくと思ふて居たに結ぶの神に見捨られたか譯  
もなや、今は命も絶なば絶れ、すめは恨めし、同じ様に合たうがねの名茂右衛門女  
房はよい嫁御合あれ見さいな、筑波の山の横雲よと雲のな下こそ私が親里、さご  
の勤を、いつか離て心の儘に、末のちらばを誰かじる

つきぬ巖

三味 三下り

こころ思ふ合空になしてやかへすらん合天津乙女の合天の羽ころも

椿盡し

三味 本調子

連々椿はる秋の、名は千里まで、鷹が峰合その本阿彌の花の色合白きをのみの寫  
繪もいかで及ばん妙蓮寺合薄くれなるに濃紅は、同ト花形の因幡堂合まだき枝折  
の秋の山、嗟峨はつ嵐身にしみて、露時雨ふる頃よりも、好もてあそび埋み火の  
春にうつれば天ヶ下合手事二上り賑はふ民の煙り立つ合これは鹽竈ちかの浦、汐汲海  
人の腰みの、あづま合からげや東路や、きよすの里の散つばき合咲も残さぬ角の  
くら合簾の中なるかうの物、ぼくはん佗助から椿、八千代盡せぬ花のかず

つま紅る

三味 本調子

春草の、青々として一入に、わきて床敷琴の音の四方にひびきて、可愛らし合つ  
ま紅るに、すみそむる送るこゆみに、かくはあがはト

鶴龜

三味 二上り

つ之部



庭のいさごは金銀の玉をつらねてしきたへの、いほへの錦や、るりのごぼそ合しや  
このゆきげのためのうのはし、池の汀の鶴龜は蓬萊山もよそならず合まひ  
がたき、きみのめぐみぞありがたき

三味 本調子

つ じ  
さなきだに春風ゆかしみよしの、さごにながる、櫻川花ごは見へしたにくの、  
雪こそ見ゆれ、くれなるしぼる八重紫やこむらさき合二上り ゆかりの水の吉野川、  
おぼろの月のひまくにせめて一本折り入て花のなさけのその奥を、たづねく  
て奈良坂や合このてがしはのうらおもて、ごにかくものを思へとや、いはねの山の  
岩つゝじ嵐の山のみねの高松合しぐれにさへもそまそいくせすごす身の、げに  
春毎に咲きそむる大きりしまや小きりしま、ぼたんつゝじの色ごはく三下りさつ  
ませんよの花さかり夏山かけて合かをりくる其花車あいらしく、いとくれなるに  
飛入りまんよ合まがきつゝトの花の露手にやむすんで我そでにくれ行く春をしば  
しごごめん

三味 本調子

徒然なる儘に、日ぐらと硯に向ひて、心うつり行よしなごをそこはかご無く  
書つくれば、あやしうこそ物ぐるをしけれ合よろいみとく共、色このまざらん男  
子はいさごそうく敷、たまの盃の底なき心地をすべき、露霜にしほたれて所さ  
だめず恐ひありき親のいさめ世のそしりを、つゝむに心の暇無くあふささるさに  
思ひ亂れ、さるは一人寝がちにまごろむ夜なきこそおかしけれ合よろ人の心まご  
はす事色慾にはしかず合二上り久米の仙人の物洗ふ合よろ女のはぎの白きを見て通を失  
ひけんは誠に手足はだへなんごの清らかに肥あぶらづきたらんは外の色ならねば  
さも有んかし合されば女の髪すぢをよれる綱には合よろ大象もよく繋がれ女のはける  
足駄にて作れる笛には合よろ秋の鹿かならせ寄るごを言傳へはべる自らいましめて恐  
るべき合つゝしむべきは此まごひなり

三味 本調子

軒の雨、たち寄るかげは難波津や合よろ芦ふく宿のしめやかに語り明せし可愛とは、  
つ 之 部



嘘か誠か其言葉に鶴の一聲幾千代までも、末は互ひの友白髪

釣 瓶

三味 本調子

百夜通ふ車にあらそ其もこに、双お姿のぬれ乾く合ひまも互ひになみの上へ、嬉あふぞと心のいそも合やがて引手にふり分られて合辛氣はむらの炎も水にうつりやせじと耻敷、顔はもみちも汲て知る、綱手に通ふ泪の雫合落て音する音信合露も洩さぬ聞の内

鶴のすこもり

三味 本調子

前引げにこごぶきの御代なればざりよふはそのまにあそぶしんじやくそのはやしにすむ、伶人は鼓をならし、龜はうき木に戯れて合その枝々に鶴が巢をくむ雛鶴もうけし眞鶴に、松のみごりに千代かけて、鶴の巢ごもり末をまつ手事二上り君が代は君が代は、千代に八千代に、さゝれ石の、いはほとなりてこけのむすまで、けにおさめばや國さかやな

●ね 之 部

根引の松

三味 二上り

前引神かせや伊勢の神樂のまねびしてをぎには有らぬ笛だけの合音も催馬樂に吹き合をさめばや手事二下り難波津のく芹原や昇る朝日のもとに住むたみの、鶴の聲々を合琴のしらべに聞なして合手事本調子軒瑞に通ふ春風もふきやめうがの合めでたさを野守が宿の門松は老たるまゝに若みどり世もうらゝかに成にけり手事二上りそもく松のとく若に萬歳はやす君が代は合蓬が島もよそならず秋津洲てふ國のゆたけさ

関の扇

三味 二下り

ねやの扇はナ、みんな繪そらごご、逢はぬ愁さを憧るゝよりも、逢ふて別るゝ事こそ愁や、秋のあふぎと捨られて合あきの扇とすてられて、私はとふも成らぬへ何と思ふて居さんす事か、ゆるがぬ様に要が大事へ、さあそろうトやへ手折もやせん人ご、ろ、流れの水に誘はれて、浮氣に響く里のかね、聞けば心もすみやらぬ合宵の口説に無理な私言、いはせ語らず胸せまり兼て、退ふと思ふて居さんす心

ね 之 部

百三



かへ、そふかいな、く、ぬめた男の面にくや、ナ、好かぬナ、すかぬ

閨の文

三味 本調子

夜や寒き、衣や薄き一人寝の、夢も破れてうつこりこ 合 視引よせ摺墨の 合 音さへ  
忍ぶ閨のふみ 合 一筆染て顔あげて昨日は、恨み今日はまた 合 戀し床敷さりくを  
何から先へナ、辛氣 合 ふみたに身には儘成らぬ、まして浮世はこころわりや

寢 耳

三味 三下り

一人寝の覺て驚く川音の、流れくこ呼はる、末を 合 海か山かは白いこの、瀧の  
巖壺なさけも深き、心の底こくんだが無理か 合 それに其方が浮れて居ては、私が  
願ひもみな水の泡、よしや世の中ゆめならば

ね は ん

三味 三下り

蓮の葉に、露の浮しは釋迦のなみたか有がたや、こころへ蛙がひよつこ出て、是  
は私しがし、そ候

ね ざ め

三味 二上り

菊の香の、せめて暫しは懐ろに、こまる物なら此苦はせまい、私やお前に嫌はれ  
て 合 梅もどき、かはす自もこの其中に惚れた様でも脇みちと見ゆ、私やおまへに  
嫌はれて

子 の 日

三味 本調子

千代を重ねし常盤の松は猶も御代をば仰ぐなり 合 君が代は納る國や、四ツの海、  
岸うつ波も長閑にて千歳を過る雛鶴が、直なる枝に巢をくひて、惠も深き玉川の  
流れに住る我等まで、心うきくの龜あまた 合 萬代までも幾千歳 合 二上り 實に納れる  
國かなと君に引る、松ヶ枝の、立寄る影はいつまでも、老ても朽ぬ常盤木と 合 誰  
か言けん瑞籬の、久しき世々を崇ひこめ、高臺にのぼりて見れば煙立、民のかま  
さは賑はひて、治るかこの目出度さよ

● な 之 部

難 波 獅子

三味 本調子

君が代は 合 ちよにやちよにさるれ石のいはほとなりてこけのむすまで 合 たちなら

ね な 之 部



ぶ合やつほの椿八重櫻つばきやへいざくらにも八千代やちやうだいのはるにあはまし手事二段 たかきやに合のほり  
て見れば煙けむりたつたみのかまごはにきはひにけり

名 取 川

三味 本關子

みちのくのしのぶ文字あざなずり誰たれゆるに、みたれそめにし思おもひをも、せめてしばしは  
忘れ草わすれぐさの合それにはあらそ我名わがなをは忘れんこの恥はぢかしこ、袖そでにうつして行く道  
の一人ひとりの旅の名は二人ふたりづれ慰なぐさめながらひこふしの、踊り拍子ひたひたのかけ聲こゑや合二上りひ  
んたのをごりは面白おもしろや合れ、それそれよわが名なはなにこくりかへしかへしつ、合  
ゆき、の人の笑わらふごも、なんのまよき、まよの川かほこれも川邊かわべにつきにけり合三下り  
いさや渡わたらんむかふの岸きしこ、おもひ渡りてよく見れば袖そでにあさなき濡衣ぬれぎぬ我わがは戀こひせ  
ぬ身みなれごも、浮名うきなをながす此川このかほの名も今更いまさらに恨うらみめしき合よしや流ながれもはてしな  
さ、底そこふる我わがをすくはんこ合川かははさまく多おほけれご伊勢いせの國くににては御裳みえすそ川の  
流ながれには天照あまてらす太神たかみかみの住すみ玉たまふ、熊野くまのなるれこなし川の瀬せ々々には權現ごんげんみかけを遷うつし  
給たまへり合光あきる源氏げんじのいねしへ八十瀬やそせの川かはと詠よめめける合鈴鹿すずか川がはをうち渡りて、近江おうみ

路みちにかゝれば、いくせわたるも野洲のしづの川かはそのまたあぜかぐんぜ川がは、そば、淵ふちなる  
堅瀨川かたせがは合思おもふ人ひとによそへては阿武隈川あぶくまがはもなつかしや、つらきにつけてくやしきは  
藍染川あゐぞめがはなりけり合墨染すみぞめの衣ころも、衣ころもの袖そでをひたして、岸きしかけや、まこもの合藻あもくづの  
したをおしまはし、かつぎあけすくひあけ、見れどもく我名わがなはさらになかりけり

夏 景 色

三味 本關子

ゆたかなる御代みよに住身すゐみの嬉うれしさは樂たのしみしげる夏山なつやまの合松まつにかゝれる藤浪ふじなみの裏紫うらむら  
にさける色いろ合青葉あおはまつりのおそ櫻初花さくらはつはなよりも珍めづらしく合眺ながめもあかて千早ちはや振加茂  
こ日ひよしの葵草あひろぐさそのみまつりの頃ころはひは合所々ところどころに若竹わかしほの代々よゝゝを榮さかゆんためしかや  
合また五月雨ごごゆめになりぬれば早苗はやなえさるなるさをとめの合よこれぬものは田歌たんか哉や、げ  
に面白おもしろくいさぎよや合匂におひも深ふかき花橋はなはしにひかれてしこふ、やまほとよぎす合なほ  
をちこちに音信ねじゆんて返かへるけしきや又またの日はおふさくるさの道みちのべの中にしけれる柳やなぎ  
影かげ清水しみず流ながる、合涼すずさにしばし合とてくむ盃さかずきの合めぐれるほごは久ひさかたの合そらも  
くもらぬ水無月みづなづきのなごしのはらひ清きよくして千歳せんさいのいのちをのぶちめでたき







菜種里

三味 三下り

ま、成らぬ、身に儘ならぬ、すきびたひ、髪かみの、ほつれ、がな、さゆさゆる、川風さむく加茂川かものがわや、清きよき此身このみを濁にごすよの人は粹まことなきつこめ共ども、思おもひながらを濟たすさばすまそ、にし吹ふく風の仇あだあらし、あだし夕ゆふべになびくも愁うれや、柳やなぎにすめく二ツ櫛くし

夏の妻

三味 二上り

木下暗くろの手枕たまくらに、一年ひととせぶりの中なかなをり、身みは任まかせても物ものいはぬ、合あもたれ掛かれば弱よわ竹たけの、節ふしもこめたる憂うれき思おもひ、心こころが問とは、何なにこせふ

夏の空

三味 二上り

鳴なりてし、合あい、聲こゑなつかしき時鳥ときどり、雲くも隠かくれにし夕ゆふべより、合あい、忘わすれて見みても忘わすられぬ、其その音ねは耳みみに在ある明あきの、月つきの顔かほ見みりやいこゝなほ、合あい、昔むかしのことの忍しのばる、合あい、今いまは何なに國くにと眺ながめて見みても、風かぜの便たよりも夏なつのそら

七草

三味 二上り

皇みかどの吾われ代しろもつきじ、石川いしかわや、合あい、せみの小河せみのがわの絶たぎり、思おもへば、れもへば、音ねすめる、合あ

すゝ菜なすゝしろ神かみさびて、雲くもの上うへにもはこべらや、結むすびし水みづも隔へてのなみも、佛ほとけの座ざよ、手事てごと天地あめとち五ごぎやう和わらぎて、光ひかりりのさけさちり若菜わかな、合あい、なつを芹せり摘とつづの女をんなも、もらさを祝いわふ千代八千代

なでしこ

三味 二上り

朝あさがほの、咲さき其そのま、隙行駒ひまわりの、合あい、のりもゆるしか紫むらさきの、雲くものそなたは懐敷なつかや、女をんな郎花わらわなら落おやさんすまい、私わたくしは元もとより撫子なでこの、共ともに榮さかを祈いのし人は、合あい、そらに咲さいても花はなもの云いはぬいこし根ねトめの虫所むしどころ、聞きくませぬ、神かみさんの、脊中せなかつ叩たたいて夜よもすがら

菜の葉

三味 二上り

可愛かわい言ことは、誰たれが始はじめけん、外ほかの座敷ざしきもうはの空そら、合あい、もごさま参まゐるこ示しす心こころのあごなさは、合あい、上々うへうへ様のちわ文ぶんも別わかにかはらぬさま参まゐる、合あい、思おもひまはせは勿な体たいなうて、合あい、言葉ことばさげたら思おもこ、菜なの葉はに留とれ蝶てつの朝あさ

む之部

娘道成寺

三味 三下り

む之部



かねに恨みは数々をさる、初夜の鐘をつく時は、諸行無常とひくくなり、後夜のかねを撞ごきは、是生めつ法ごひくくなり、晨鐘の響きには生滅めつる入相は、寂滅るらくと響けごも、聞て驚く人もなし我は五障の雲はれて、真如の月をなごめ明さん 合二上り 云はず語らず我心、亂し髪も亂るゝも難面は只うつり氣なごうでも男は悪性な櫻さくらと唄はれて言て袂にわけ二ツ、勤めさへ只うかくご、ごうでも女子は悪性な、廊育ちは蓮葉の者じやえ 手まり歌 戀のわけさごかぞへくりにや、武士も道具をふか編笠の張ご意氣地の吉原、花の都は、歌で和らく敷島原の勤する身は、誰ごふしみの墨染、煩惱菩提の、撞木町より難波四すちに通ひきつちの、禿立から室の早咲、それがほんの色トや一二三四夜つゆ雪の日、しもの關路ご、ごもに此身を、馴染かさねて、中は丸山たゝ丸かれご、思ひ初たが縁じや 合三下り しごけ形容目に立つ娘、誰に見よごて品やる娘、可愛がられて色づく娘、むすめくご澤山そふに、云ふて下んすなごちや鐵漿つけて、袖も留たり、嫁入の談合、頓て東へ行く身トや者を、餘波惜さは限りなし、頓てあづまへ行身

じや者を、私やごうも成らぬほんばに、ほんに儘に成らぬは浮世の習ひ 合 娘の花がさ開いて品よく、さしかけゆりかけ 合 幽艶らしい取あり、小褌かいどり、小づまてなさあへ、法とはさりごはのふ扱 合 したれ柳の糸さくら、よれつもつれつな容もよご姿やさごき今の身は 合 くれに通へば思ひの種トや 合 人目の關は辛氣なせかひア、 合 夫だ戀路の習ひかや、サアくごそうトやいなサアサアそうトやいなサアくごそうじやな、晴ぬ思ひの夕月夜たほろ夜のごきも實に水は南にはしは北にたんだくの山の姿や雲の峰、月のあらはれ水に浮みつ、袖をかへすや、夜陰の春雨に、思ひくごに時を得て 合 ごかうの一天鐘も鳴り、鶏は八聲のほのくご夜も明しらむ時の太鼓 合 鐘の供養も實に有難き、法の庭、影向の時節も今幾はごに妙なりや

室の梅

三味 三下り

春ごいふ、名のみ計りや朝には、馴にし時ごや出せし 合 其うぐひすご俱なきに 合 待得し花の 合 さかりにも 合 達はでぞ元の 合 故郷へ、かへらぬ昔たゆしのぶ



三味 三下り

汲て知れ、身入秋の風にはあらで、遠ざかり行なにはがた、人はあらとも云ふな  
らめ、我はよしこは あけ節 れもはねと 合 浮世のまきは是非もなや 合 我身ひとつは  
元の身の 合 春にもならば梅が香の、闇にも通ふ袖のつゆ、いとく思ひやまさるらん  
虫づくし 三味 三下り

わひ人の長きあだに暮さじこ夜を秋風の身にうらみく吹わたるくれ待がほに咲  
花よ 合 亂れころろぎ身のこひち晝は名立ぬ螢のひこひ 合 萩の上風すがたをば 合 野  
邊の錦のはたれりが舌鼓打きりくす物いはせじ鳴いた響の音のねをけも鈴の聲  
合 手事 千年かざらんく松の音や 三味 三下り

虫の音

三味 三下り

思ひにや、こがれて集く虫の聲こゑ小夜ふけて、いとく淋しき野菊にひとり、道  
はしら菊たどりて此處に、誰をまつ虫なき面かけを、暮ふころの穂にあらはれ  
て、萩よすよ、寝みだれ髪のとけてこほる、涙の露の 合 かゝる思ひを何時

さて忘りやう 合 兎角りんゑの、拙き此身、はる、間もなき胸の闇、雨のふる夜も降  
らぬ夜も、通ひ車の夜ごこに來れど 合 逢ふて戻れば一夜が千夜、あはで戻ればま  
た千夜 合 それくそれじや、それが實にさ、ほんに浮世が儘ならば何をうらみん  
由なしごを 合 桔梗かるかや女郎花、我は戀路に名は立ながら、一人まる寝の長  
き夜に 合 手事 おもしろや、千草にすたく虫の音の、機織音はまきはたりてふ、さり  
はたりてふ、つゞれさせてふ、ひぐらし蟋蟀、いろくのいろ音の中にあきて、  
我しのお松虫の聲、りんくりにんくりにんとして、夜るの聲めい〜たり 合 すは  
や難波の鐘も明方の、あさまにや成ぬへし、さらばよとも人餘波の袖を、招く尾  
花の、ほのかに見らし跡絶て、草ばう〜たる阿部野の塚に、虫の音計りや残る  
らん、むしのね計りや残るらん

●う之部

浮船話

三味 三下り

愚僧が住家は京の辰己の世を宇治山と人はいふなり茶ちやくちや茶園で 合 はなす



こひ茶は縁のはし姫夕べの口説の袖の移り香花たちばなの、小島ヶ崎より 手事一  
 さん走りに戻つて見たれば、内のおかたが悋氣の角文字、うしも涎を流る、川瀬  
 に口説ばれちあひ我から焦る、螢をあつめて、手くたの、學もんからもやまとも  
 里の戀路は山吹ながしの水にてり添ふ朝日のチおやまは誰でもかかれても二世の契  
 りは平等院に去こはく、うるさいこつたホ、イ

裏 表

三味 三下り

うしこ見し世は更に無じ幾年か、あちに裏ゆく手にはの色か、散かちらする仇な  
 る雪を、今日は表に積る雪、鴛鴦の毛衣かこりの衣よ 浮氣男のあるに有らでこ  
 又うそつかぬ人は 淋しき枯野に同じこ、肩にしなたれ、袖の口紅契りししるし  
 猶縁ある桂男の

歌 れ ん ば

三味 二上り

絶て逢はずこな 文をば通ひ文は妹脊のはしと成る 合 いもせのな妹脊のふみは文  
 はいもせのなかとなる 人のつらさにな 合 こりもせず 愛き玉の緒のいつ迄か 合

絶ぬ思ひにくれ竹の 合 いくよ伏見の袖ぬれて 合 かはく間もなき涙のふちせ 合 夢に  
 なり共あふせは嬉し 合 寝よげに聞は小夜の尺八 合 一よきりにも情あれかし 合 ねよ  
 けに聞はさよの尺はち 合 ひこよ切りにも情あれかし 手事 梅は匂ひよ櫻は花よそれ  
 く人のなさは毎も花の香

宇 治 め ぐ り

三味 本調子

萬代をつむや茶園のはるかせに、こごふきそへてさを姫の、にきれふ袖の若緑、  
 ひこ目をなにご初むかし 合 霞をわけて青山の小松のしろや綾の森、ちこせさはり  
 のなむしに 合 よはひるいせんはむむかし 合 たれにもこしをゆつり葉の 合 千代の  
 みごりの松の尾のかみ代の末の後むかし 合 ひかりをそへて園の梅、なほ白梅の色  
 香にも 合 ふかくうつる川柳、湖水こすたに宇治のなみ 合 手事 二上り はつ花見する  
 山吹の、花たちはなの匂ふてふ、ゆめをむすぶのおりたかや、小鷹の爪にわたし  
 めて 合 こかげもおふき一森の喜せんのは夏の峯、瀧の音をも 合 手事 三下り 菊志  
 の朝日山の端薄もみち、たか尾の峯にかりがねのあさるこゑく 笠ごりのり 合 かぎ

う 之 部



まんどころれもしうや 合心をすます若らくは 合いはひのしろうたい舞つる

浮 寝

三味 本調子

うさねの床にこころふは、枕にかゝる涙あり 合せめてはゆめになりこもと 合まご  
ちめばみじか夜に、山ほこぎすれとつれてはや夜があけた 合しんぞつらい世の  
合こがる、浮き身の消もせて 合ひるはひねもす泣くらじ、夜は夜ごとによししつ  
む、横の戸うつ村雨や、棺にそよぐ松風は、ちぎりおかねをはかなや 合君がこ  
ふかおごろかされて 合いこゝ涙に目がくれてかべにそむける燈火の影かすかな  
る曉の鐘 合手事つくくこさくからに、とかく叶はぬ世の中に 合ふつこ思はじ 合  
はおもへ、こは思へともまたすてがたき 合すぎし別れに逢瀬ごいし、言の葉を  
忘れまい 合この世はさてをき後の世ものふさてさてな 合あい見ての後の心にくら  
ぶればかはと物をば思は下ものを、むかし戀しや今の身は

梅 の 宿

三味 本調子

糸竹の世々ふしなれし鶯の聲のしらべもあら玉の 合いくはるがすみたつなこそ、

いろ白妙ににほふらめ 合手事梅さく 二上り 宿やちよならん、梅さくやちよな  
らん

善 知 鳥

三味 三下り

鹿を追ふ獵師は山を見ずといふこごあり 合身のくるしさもかなしさも、忘れ草の  
おひさり 合高繩をさしひく汐の、末の松山浪あれて、袖になみこす 合沖の石 合  
たはひかたこて海越なりし里までも、千賀の鹽籠身をこがす 合むくひをも忘れけ  
る、こごめさをなせしくやしさよ 合抑々うごふやすかたの、こりく品かはり  
たる殺生の 合中にむさんやな此鳥の、愚かなるがなつくばねの、木々の梢に羽を  
じぎ浪の浮すれもかけよかし 合平沙に子をうみて落雁のはかなや親はかくすこす  
れど善知鳥と呼ばれて子はやすかたこたへけり 合さてうとられやすかたうたふ  
合親は空にて血の涙をふらせば、ぬれじと管箏や笠をかたむけ、こゝかこの便  
りを求めて隠れ笠、かくれみのにもあらざれば 合猶ふりかゝる血の涙に、目も紅  
にそみわたるは、紅葉の橋のかさゝきか 合婆婆にてはうたふやすかたこ見へしも

う 之 都



めいどにしては化鳥となり罪人をれつ立、黒がねのはしを鳴し羽をたゞき、銅の爪をどきたて、眼をつかんでしむらを、さけばんとすれども猛火の煙にむせんを聲をあげぬはをし鳥を殺せしこがやらん、にげんとすれどたちぬは羽ぬけ鳥のむくいみや、うたふはかへつて鷹となり我は雉子となりたりける、のがれかたの、狩場のふゞきに、空をもそろし地をはしる、いぬたかにせめられて、あら心うたふやすかた、安きひまなき身の苦しみを、たずけてたべやれん僧、たずけてたべやれん僧といふかと思へばうせにけり。

浮れ蝶

三味 三上り

あふ事の、無よなりせば世の中に、憎い難面い其あちを知らぬ菜種の浮れてふ、義理に立より遊ぶもれかし、終に其身もあき風と吹しく後の心と知られ、はや室さきの紅梅も、かほつゆうつ朝日かけ、ぬるくもんな雪解の、冷ひ水の汲わけて、仇に凌ぎし、心ぞつらや

梅の月

三味 二上り

うたがひの、雲なき空や、如月の、其夕かけの、折つる袖も、合くれなる匂ふ梅の花がさ、ありとや此處にうぐひすの、鳴音をり知る羽風にはらり、ほろりと降は涙か花か、手事本調子、花を散すは嵐のとがよ、いやあだも野の鐘の聲

朝猿

三味 二上り横つち合

扱も目出度の秋津洲や、目出度の、秋津洲や、黄金升にて米はかる米はかる、四角ばしら角桂、角のないこそ添ひよけれ、ひんたの踊りは面白や面白や、夜さの泊りは何處が泊りぞなばかさこしか室か明石か、室が泊りじや、松の葉越に月みれば、葉越に、月見れば、暫し曇りて又さゆる、ひんたの踊りは面白や、合いとし殿御が見ゆるやら、犬がはえ候四辻に、伽羅の薫りこきたんこは、幾夜こめても止め飽ぬ、ひんたの踊りはおもしろや

う ち 整

三味 三下り

北時雨、小原の里にさなれし梟の鳥の宵たくみ、早すりおけこ世話やまし、糊つけ物のせわしさも、今日のひよりを樂みに、おもひ身をさへ苦にせぬを、合手事

う 之 部



あふ度ごころに荒けなく百度千たび續けうち叩ひてくたゝかれて 合 あた嬉いは楳  
の音

梅が枝

三味 二上り

憂かりし身の、昔をさんげに語り申さん、去にても我ながら、よしなき戀路に犯  
されて、永く悪しゆにたうけるよ、さればにや、女ごころの亂れがみ、ゆひがい  
無も戀ごころもの、夫の紀念をいたゞき、此狩衣を着しつゝ、常には打し此太鼓の  
なもせずおきもせず涙、しきたへの枕上に殘る執心をはらしつゝ、佛よに到る  
へし、嬉しの今の教へや 合 三下り 思ひ出たる一念の、起るは病ふとなりつゝ、つが  
さるは是くすりなりと、護心の教へなれば思はじく戀忘れくさも住吉の、岸に  
あふてふ花なれば手折やせまじ我ごころ、契り淺きぬの片おもひ、執心の助け給  
へや實に面白や同くば、さんげの舞をかまて、あいじやくの心を捨てたまへ、いざ  
や〜さらば妄執のくもりを拂ふ夜の、月もなかばなり、夜半樂をかなせん、心  
も共にすみよしの、松の隙より囁かれは波もてゆへる淡路瀉、沖もこづかにあを

海の、青海波のなみがへし、かへすや袖のをりをり得て、軒端の梅に鶯の、來鳴や  
花の越天樂、うたへや詠へ梅ヶ枝うめが枝にこそ鶯はすをくへ、風ふかばいかに  
せん花に宿るうぐひす 合 二上り 面白やうぐひすの〜の、聲に誘引せられては花の  
かけに來りたり、我も御法にひき誘はれて、〜今目前に立舞ふ舞のそで是こそ  
女の男をこふる、さうふれんの樂のつゞみ、うつつなの我ありさまやな 合 思へば  
古へを〜、かたるは猶も執心をこ、申せば月も入り、音樂の音は松かぜに類へ  
て在し姿は明くれに、面影ばかりや殘るらん、〜

鶯飼

三味 三下り

おもしろの有様や、底にも見ゆる篝火におごろく魚を追ひ廻し、かつき上げす  
くひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪もむくひも後の世も忘れ果て面白や、みなぎる  
水の淀ならば生洲の鯉やのはらす、玉島川にあらね共小鮎さばしる瀬々ら木にか  
だみて魚はよもためど、不思議やな篝火のもへても影のくらく成は、思ひ出た  
り月になりぬる



浮舟

三味 本調子

秋暮れて、峯にこがれし紅葉の、かずちる山の夕風に、うかれて落つる瀧川に、  
すくひし杓に色さめし、末の契もたがやさん、こうしてさした盃の、上二り、うけし  
一種の里言葉、春咲く梅や藤なみの、合よるべのぬしにせかれてせいて、氣は浮舟  
のあだ枕。

●の之部

野遊

三味 本調子

梓弓、春立くれば、四方山の、合霞のごかに棚ひきて、合老も若さも心さへ、足さへ  
そらに成ぬれば、合芽花ぬく手も引きつれて、よるは董をこことはに、合家ちも餘所  
に戯るる、番ひの蝶の夢の間に、合菜種の花も咲匂ふ、世に樂さの限りなし、手事果  
しもあらで花むしろ、居ながら汲や春霞、合その盃の數々に、千歳をのぶる、心地  
して、ア、面白の野邊の遊びや

●く之部

雲にかけ橋

三味 二上り

雲にかけはし霞に千鳥、及びないこて惚まいものか、賤が伏家の月を見やよいやな

愚痴男

三味 三下り

妻をふ鹿の聲絶て、我一人寝を知る人も無し、物おもふ、合心は餘所に在明の、月  
を二ツの枕にかけて、合嘘か誠か實か嘘を愚痴になるほど猶待かねて毎まここに、  
成れかし枕

黒髪

三味 三下り

黒かみの、むすばれたる思ひをば、合こけて寝た夜の枕ごと、獨寝る夜はあだ枕、  
袖はかたしくつまじやと云ふて、合愚痴な女子の心こ知らずしんと更たる鐘の聲、  
夕への夢の今朝覺てゆかし、懐敷やるせなや、積ると知らで積る白雪

口きり

三味 三下り

白ゆきの、初音は木々にありやせん、色のなまりは見る目の癖か、合されば其こ  
今さらば、花のこがすと、知るは初瀬よ、まだもよと野の古里さむく衣かたしく

く之部



又をり着せて、起ていなんせな 合 あすの夜もあるに 合 そんな別れの其あこさへも  
儘のかはでも瀬はかはれども、花ぞむかしの都の辰己 合 今朝の、寝ざめに覺ては  
路治の塩瀬の音の、よぶこ鳥

葛の葉

三味 二上り

辛氣暗しに紛らす酒も、思ひ深きに酔もせず、いつそ恨みてももう酔もせず、思  
ひふかきに酔もせず、いつそ恨みても來ぬは何ぞや只あけの鐘あだし枕に月は落  
つ、いつそ恨みても月はたつあだし枕は月に落つ、いつそうらみても、風はごう  
ぞや只秋の風ちらぬものなら葛の葉の、いつそうらみてもものふ葛の葉

花月

三味 本調子

所から、尾花が露に照まさる 合 影も果なき武蔵野の、浮名のみ猶立ち添ひて、鐵  
木の 合 千束に余るつらさをう 合 遠砧の 合 音にさへうちも寝られぬ慕ふ夜なく  
手事 三段 二上り 一段 逢ふことは、身には何時とも白雲の餘所に隔て、咲を待ち 合 散るをう  
惜む世の人の、春の心を花につくして

や 之 部

八千代獅々

三味 本調子

いつまでも變らぬ御代にあいたけの 合 よは幾千代、八千代歴る 手事 雪ぞかゝれ  
る松の二葉に、ゆきりかゝれる松のふた葉に

宿の春雨

三味 本調子

百千鳥、囀る春は物事に、あらたまれ共世の中の變り行こそはかなけれ 合 千代の  
松原千代までこ、頼しかひもなぞかは 手事 二上り 其うたかたの哀れさを、遺るか  
たみに取添へて、語り暮せる宿のはる雨

八重霞

三味 二上り

前彈 八重がすみ 合 立隔つれ 合 きつゝ鳴く、聲は、まがはぬ春の鶯 合 花に名残は  
惜けれ 合 かへろやれ夕暮

やばらし

わりて見よ、花の在家はやまさこの 合 櫻は散る目出度けれ 合 只何事も仇なみの、



立ちたぬも日の影の、流れて早き河霞

八 聲 の 鳥

三味 三下り

物かはこ、云ひしなからも更行かねに、待は若やと頼もあれど、誠つらいは八聲の鳥よへ、世には許さぬ人目の關よ忍び逢ふ夜は、語るこそすれど残る詞を心なき鳥がね知らぬ里もがな

八 重 梅

三味 三下り

花に嵐もよいぞのう、さよちららさ、櫻もあき心、飽ごころちららさ、梅が、さけかしなないよ八重梅が、枝を、手折ふりして必らずこそせこそ、さまを招くへ、必すこそせこそ、さまを招くへ、夢に成とも逢ひたや見たや、夢になりとも、ゆめに浮名はさんさよも立下、よしなやさ、浮世やの、夜は、現か夢か、稀にあふ夜は、語る間も無きさんを短夜や、よしなやさ、山路の菊

山路の菊

三味 二上り

久方の雲の上にて見る菊は、天津星とらあやまたれぬる、されば唐土の賢き人の往古も、東籬に菊を愛しつ、山の見る東雲の心あてに折ばや折ん初霜の置まはせせる白菊の花はあやしき風情まで實に面白き眺なり、其上菊の果まで不死の薬と成さかや奥山の深谷の下の菊の水、花を洗へる流れを汲て、齡を延る仙人のおる袖匂ふ菊の露打拂ふにも千代や經ぬべし、みよし姿の老もせせ、薬と菊の下露はよも盡じく、君が代の幾久敷さも限らじな

大 和 文

三味 本調子

君が代はつぎとこそ思ふ神風や、御裳瀧川の澄まん限りは、未た天地わかずして雌雄のかたちもわかつたねば、ただ鳥の子の如くにて、くもりささしふくむなる、澄みて清きは雨となり、おもく濁るは土となる、ふたつの神のあらはれて、みこのまくはいありし時、天照神のこの國へ、降りましますすめらぎの、天てる神のその昔、岩戸にこもり給ひしに、數多の神のなけさつ、岩戸

や 之 部



の前へ舞ひうたひ神樂を奏し給ひける 合手事 神はその時れもしうやと岩戸を開き  
給ふより月日のかげも明かに、峰高き春日の山に出づる日のくもる、時なく照す  
べらなりと、よみしもさらけ理りや、寶祚は幾代なほもつさせト

八 重 衣

三味 本調子

君がため春の野に出て、若菜摘む、我が衣手に雪は降りつ、合春すぎて夏きけ  
らし白妙の、衣はすてふ天のかく山、合みよしの、山の秋風さよふけて、ふるさこ  
寒く衣うつなり 合手事 三段 秋の田のかりほのいはのとまをあらみ、我が衣手は露に  
ぬれつ、 合きりぎりすなくやしも夜のさむしうに 合手事 三段 衣かたしきひこりかも  
ねんころもかたしきひこりかもねん、

山 姥

三味 三下り

山の端に、ころも知らそ行く月は、うはの空にて髪や絶なん 合見しも聞しも花  
ごころ、色をも香をも捨さりし、二人添ひ寝の長まくら、こち寄れ枕身にそひ初  
し移り香の、憎ふはない者、そらの心が變らねば、こちき枕一すぢに、是此處に

た、み枕や文まくら、口に任せて塗枕、後や前なる言葉の端を、括り枕のない人  
さんが、縁か因果か可愛らし 合そなた思やこそ、四ツの太鼓を相圖に来るに、脊  
は何國かくれて抜て 合鐘の鳴る時今きた顔で、よう知ると思はんせ、憎い仕方  
思へども、顔見りやいとし、ほんに浮世がま、ならば、嘘つく男が無かよかる、  
恨みがち成る神はとけ 本調子 待宵は三味線弾て辛氣ぶし 合泣て別れしきぬく  
の、袖よ袂よ恨み侘び末はごふ成事じややら、よいやさく 合こつちは障りのな  
い操、た、一筋に糸まさの、縮く、りせし合の手も、あふ時ばかりひき寄せて、  
よいやさく 合いとし可愛も皆うそのかは、ばらあたれとは誓ひてし、よいやさ  
く 合びんとすねては見すれ共、つい誤つて張よはき、なぜ女子には生れたぞ、  
よいやさ、よいやさよしや世の中いたづらに 合三下り 山廻り一樹のかけや一河の流  
れ、皆これ他生の縁ぞかしまして、我名をゆふ月の、浮世をわたる一節も、狂言  
奇語の道すくに、讚佛乘のいんぞかし、あら、れん名残惜や、い、こ、ま申て歸  
る山の 合山はもこ山、水は元みず、塵ひち積つて、山姥なる、春は花さき紅葉



も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季時々を目の前に、萬木千草も、一日に  
 花さけり、おもしろやく、合鬼女が有さま、見るやく、峰にかけり、谷に響  
 きて、今まで此處に、在よと見えしが山また山にやまめぐりして、行方も知らず  
 なりにけり

八 島

三味 三下り

釣のいとまも波の上へ霞わたりて沖ゆくや、海人の小舟のほのほのと、見ゆてぞ  
 残る夕暮に、浦風さへも長閑にて、しかも今宵は照もせず、くもりもやらぬ春の  
 朧つき夜にしく物はなし、合西行法師はなげ、こて月やは物をおもはする闇は忍ぶ  
 によかく、合うな、ぜでたぞ來そくもれ、合又修羅道のこさの聲、矢さけびの  
 音震動して、合今日の修羅の敵は誰う何、能登守範經こや、あら、ものくくと  
 や手なみは知りぬ、合思ひ出る檀のうらの、その、船いくさ今は、や圍浮に、合  
 かへる生死の海やま、合一同に震とうして、合船よりはこさの聲くがにはなみの楳、  
 月にしらむは劍の、ひかり潮に寫るは兜のほしの影、みづやそらく、行もまた

雲の波の打合さしちがふ船いくさの駆引、浮しづむを爲し程に、又春 夜の波  
 りあけて敵に見らしは群ある鷗、こさの聲と聞へしは浦風なりけり高松の、うら風  
 なりけり高松の、朝あらしと成にける

●ま 之 部

萬 歳 獅 々

三味 二上り

君が代の、久しかるべき例には、合かねてぞ植し住吉の、合松の二葉は、あやかり  
 物よ、青葉は増て落葉さへ、妹脊かはらぬ契りこは、合嬉しからふで有るまいか  
合手事 松の齡ひを重ねかさぬる、松のよはひを、重ねかさぬる

松 の 壽

三味 二上り

千歳經る松のこぶき緑りなる、合昔はむす共色かへぬ、合操すぐ成若竹や雪の重み  
 は未知らず、合知らぬ筑紫へ行く梅も昔うまれば難波津に、合冬籠りして咲うち  
 の來て春を告げ、合手事 花の鏡となる水に龜浮びて君が代を、合久しかれこそ祈り舞  
 ふ鶴も群れめて遊ぶなり



儘のかは

三味 二上り

合夢が浮世か浮世がゆめか 夢てふ里に住ながら 人目は戀と思ひ河、嘘も情も  
只口さきで 一夜流れの妹脊の川も 其水くさき心から 手事 餘處の薰りも衿そで  
口に付て通はゞ何のまあ、可愛くの鳥の聲に、覺てくやしきア、儘のかは

松の二葉

三味 二上り

松の二葉はあやかり者よ 青葉は増て落葉さへ 妹脊かはらぬ契こは、嬉からう  
で有まいか 暮の時雨は床しき者よ 合あふ夜は、まして一人寝を 忍びぐるまの  
契りこは、嬉からうで有まいか

ます 鏡

三味 三下り

妹脊の縁といふものは、假令暫しは別れても、末は互ひに大堰川浮世のさがは男  
ゆゑ、せくな遣り手のたまふしの、憂きみの虫のたうらうこ 嘘や困憊て音も細く  
ちんちろり、是非も無いあ、二ツにしやんと、曲てかみきり虫こ、いつそ此道  
きりくす猶も思ひはますかゞみ

松 盡 し

三味 二上り

うたひ離せや大黒、一本めには池の松、二本めには庭の松、三本めには下り松、  
四本めには志賀の松、五本めには五葉の松、六ツ昔は高砂の、尾上の松に曾根の  
松、七本めには姫小松、八本めには濱の松、九ツ小松を植ならべ十ヲて豊久野伊  
勢の松、此松は有情の松、情ありまの松が枝に、口説はなびく相生の松、又いつ  
毎の約束の、日をまつ時まつ暮をまつ連理の松に契りこめて目出度な若戎

松 づくし

三味 本調子

松飾る、軒に五葉の縁して、未だ若松や姫小松、常盤木祝ふ千代かけて、子の日  
ここよの松の枝、聲すみの江に颯々の、さつこ木間の春霞、あからむ内に志賀辛  
崎の松かさや、いつの間にかは磯馴松 色も深き、松重ね其うすゆふに書送る 合  
ふみご假寝や曾根のまつ、盡ぬ眞砂のたこへよる、盡せじ物は海松の位も高き松  
山に橋立ならぬ松島や 三保の松原吹風が、琴の音さそふ 合うたかたや、花にさ  
さ立ち紅葉にたくれ、月に宿かすおはしま、葉がへぬ松の世々に榮ゆて



松の月

三味 二上り

五月雨の、神さり人の跡慕ふ、天満るほど玉水の合、れさらいと云へるむらは有れ  
こ此小井にかけ寫す、野守の鏡くもり無く、大鷹小たか教へ草御狩の袖に心こめ  
ずや

巻ばしら

三味 二上り

此殿はむべも云ひこ三枝のみつばよつばのたねさへ分て變る縁は是火こり灰に  
鶴の毛衣また縫かへて着れば新らし其夕へこよ憂きを忘る、巻柱

松風

三味 三下り

なつかしや、行平中納言、三年はこゝに須磨のうら、都へのぼり給ひしが此はそ  
の紀念とて、御立ばるし狩衣を、残しおき給へごも、是を見る度に彌増の思ひ種  
葉末にむすぶ露の間も、わすらればこそあじきなや、紀念こそ、今はあだなれ是  
なくば、忘るゝひまも有なんご、よみしも理りや、猶思ひこそ深かりし、亂れ髪  
みだれ心や狂ふらん、我が姿は耻かしや、髪はおごろを戴きて、日かけを待し夕

顔の蔓に放れし破れ車、よじや思ひはいこしさの、つき添ひめぐる小車の、憎か  
れは神かけて、思はぬつまを放ち遣る心の中こそ、はかなけれ、さは去ながら  
一念の、嗔恚となつて、思ひしらすや思ひ知れ、恨めしの心やな、今更何このた  
まふ共、そなたは忘れト松風や、立別れ、いなばの山の峰にれふる、まつと  
し聞かば歸りこん、あら頼もしの御歌や、それは因幡の遠山松、是はなつかし、  
君こゝに須磨のうらはの松の行平、立かへり來ば、我も木蔭にいざ立寄て、磯馴  
松の、懐敷や、松にふさくる、風も興じて、すまの浦なみ、ごう、ごう、ごう、ごう、  
ごうと烈しき夜すがら、妄執の雲にまぎれて、失にけり

正月

三味 二上り

軒毎に、色を飾るや三ツの朝、すけなき松も笑顔と見ゆて、風に袖ふる麻詞、可  
愛らしささ花の顔、問ふて見たいは八重霞、思ひを包む曙に心のなぞを掛て見る  
來ぬには一人れもひ寝の憧る、胸の福沸し、神の年越末なが、れこな、の社の七  
草をはやしそやされ唐ごりの渡らぬ、合、さきに暫しが程も、合、たつた一言のちにと云



ふて別る、宵戎君が約束たがへずに、合参りましたご後から、脊中たいて戯れも酒のきけんの千代よろづ世の、限りも戀もうち解て、猶れくふかく契りける

萬 歳

三味 二上り

德若に御萬歳と、御代も榮まします、愛敬有ける新玉の年立返る朝より水も若やぎ木芽もさき榮けるは誠に目出度さふらひける、合京の司は關白殿たり位の帝、日本内裏王は十ぜん神は九ぜん、よろづやすく浦安が此許に正月三日寅の一天に生ます若戎、商ひ神ご祝はれたまふ商ひ繁昌と、守らせ給ふは誠に目出度さふらひける、合やしよめく京の町のやしよめ賣たる物は何々、大鯛小だい鯉の大魚、あはび鱒鱒、蛤こく蛤くはまぐりめさいあご、賣たる者はやしよめ、其所を打過そばの店見たれば、金襴鈍子緋紗綾ひぢりめん、合縹子緋縹子、縹じゆす縹珍、いろく結構に飾り立てさふらひしが、合町々の小娘や、お年のよつたる姥達まで賣かふ有様は實にも治る御代なり時なり惠方の御藏にすつしりく、合寶を納むる門には門松脊門には脊門松そつちもこつちも歳年の御祝ご御代を目出度

待 宵

三味 三下り

君來ずば、閨へも入ト一人言、してうかくこ、愁や妻戸にしよんばりと、あぢを見遣れば月しんくこ牙渡る、合もはや夜明の鐘のこゑ、憎や小宵も待明し

ま 之 部

三味 三下り

くもる胸合泣ても晴ぬ時雨月ねがひの、願も神の留主、内かたの首尾皆わたしゆゑ、合お淋しかろうふ、お氣づまり、儘ならぬ世の、ア、うたて、假寢覺す松風よりの戻りし廻り氣の、くちく多き今の里ふねや禿をつけさせて、てうのくこ疊さん逢ふてかうかご借に行く、合つれの座敷のいさましさ、小面の憎い明がらす待一人寝をかき口説、あはふあはふの念力のこく方まで五大力

● け 之 部

け 之 部

三味 本調子

手にごりて見ればうるはしけこの花、合しほりしほればたいならぬ、合匂ひかうばし花びらの散りにし姿憐れよ、合手事二上りりんきする氣も夏の花、合雨にはもうき風情あ

ま 之 部

百廿九



り、たれに氣がねをなんにもいはずつとこしてゐる奈良人形

けしぐゝり

三味 三下り

根のびせし松によりにし宿り木の合こみしかつらも露にぬれ、時雨の雲にあふこ  
はし合あらしの木ノ葉ちり塚に、塵もこまらぬ三つせ川、なれしいこには似ざり  
けり合なみのもんびの音物すこき山彦、更にむなしき契りさへ、かはかん袖のけ  
しぐゝり合むすぶあさぢに、れく霜の合春に逢はめや、法にあはめや

●ふ 之 部

富士太鼓

三味 三下り

思ひぞ積る胸の花、涙にしほる藤かつら女心の亂れ髪、ゆひかひなくもこひ衣の  
そのうつり香をきぬぐのかたみこ今は鳥かぶこ、重き思ひを戴きて狂ひ出るぞ  
はかなく消ゆし、草葉の露こ合残るこの身を如何にせん、こひしや床しやいとしや  
こ、或日は歎き笑ひつゝ、こひし心がさやうさやうく狂氣となつて現なく合太  
鼓こそ、太鼓こそ失せにし人のかたきなれ、思へばく腹立ちや、うしろに呼ぶ

は妻の聲前にはかたきのごきの聲、うてやうてさせめつゝみ、越天樂をまねふよ  
合うたへや歌へ梅が枝に風吹かば如何にせん、花に宿る鶯 手事 持ちたるばちをば  
つるきご定め、持ちたるばちをば劔ご定め、しんゐの焔は太鼓の烽火の天にあが  
れば、雲の上ひごまごこの富士おろしにたへずもまれて、裾野の櫻四方へばつこ  
散るかご見ては花衣、さす手もひく手も伶人の舞なれや 合富士が恨みもゝろとも  
に、踊りあがりてうごうつ 合嬉しや今こそは思ふかたきは打ちおさむ、うたれ  
て音をや出すらん 合げにや女人の罪深く五常樂を歌ふよ、さてまた千代や萬代ご  
千秋樂を歌ふよ、民も榮へてあんのんに泰平樂を舞ふよ 合日もすでに傾きぬ、日  
もすでに傾きぬ、これ迄なりや人々よ伶人の姿鳥甲皆ぬぎ捨て、我か心、亂れ笠  
亂れ髪、かゝる思ひは忘れじと、又たちかへり太鼓こそ、うき人のかたみごあ  
ご見をきてり歸りける

福壽草

三味 本調子

初春の見るものに、せんごつらねし 合其往昔は、黄金花さく陸奥の合いはでもし



るき盤堤山、今將れなじ日の本の、其都には数々の合、そこさしも無く咲つゞく壽、  
そへて、床の花、神代のここも思はれつ、幾代契らん又幾世、それまた幾世ア、  
いく代いくよ經ぬらん福トゆ草

福 壽 草

三味 二上り

初春のひなたへなほす福壽草めでたき御代の、ごかさよ、花の心の移り氣なつい  
蕾さへ開きそめ

二 葉 葵

三味 三下り

問ふべくも、よしご問へかし、さくが滞なす青海波、露のかごこの夕ぐれに、分  
行くものは萩すゞき、合、なびくは私があやまりか、ア、悪性な風の、女郎花なら氣  
が濟むけれど、二葉あふひの末かけて、二世の三世のナやほらしい松の思はんこ  
この耻かし

ふ た 心

三味 二上り

春ながらも、との情は村しぐれ、合、ふるご涙の花の縁、仇に結ぶの神なきことか、合

出雲やへ垣やみくもに、惚た我身がやばらしい、思へは愁き冬がれの、川邊に立  
し猫やなぎ、妻こふ、折にあふならば何の私になびこふぞ、合、かはす枕も雁金の、  
去年ご今年のふた心、今は此方へふく煙り、合、たばこの匂ひ袖つれてうはの空なる  
たびやするらん

冬 の 月

三味 二上り

花は散ても春は咲、合、行て還らぬ道も無し、迷ふ戀路のむごや愁や、合、胴よくや世を  
も、見すてし其悲しさを、合、今ぞ語らん涙川いとし男の其言の葉に、可愛可愛ご、  
偽り言を實ご思ひをりや一筋に愁ひ勤めもそれはその

筆 の 翰

三味 三下り

筆のさや、焚て待夜の蚊遣火にむつまじ中、言の葉に、合、我は思ひに身をこがす、  
胸は煙りの富士なれや、合、袖はなみだの清見瀉、合、うすき契りに、淺はかき硯の海の  
よるべさへ、何と柵む縁のつな

ふ 之 部

三味 三下り

ふ 之 部



山吹や、けいせいの子は、有ながら、子はけいせいにも有ながら、いはぬ色なり淵  
とも瀬とも綱代木や 合 問へと答へも底ふかき井出の柵せき留かねて 合 ほんに難面  
はるの雨、みのひこつたに、定なき人もことまの夕がすみ

藤 戸

三味 三下り

うしやいにしへを忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりはおもひなれ、さるにてもみ  
はあだ浪のよるべなくとも、こがによるべの水にこそ、濁る心の罪あらば、重き  
罪科もあるべきに、よしなかりける海路のしるべ思へば三途の瀬ぶりなり、さる  
にても忘れがたや、あれなる浮洲の岩の上に我をつれて、行水の氷の如くなる、  
刀を抜いて胸の邊りをさし通し、さし通さるれば氣も魂も消ゆゝこなる所を、  
そのまゝ海におし入れられて、千尋の底に沈みしに、折節ひく汐にひかれて、行  
水のうきぬ沈みぬ埋木の、岩のはさまに流れかゝつて、藤戸の水底の悪龍の水神  
こなつて、恨みをばなさん思ひしに 合 思はざる御吊ひの御法のみふねに乗を得て  
合 即ち弘誓の船に浮べ、みなれ棹生死の海を渡りて、願ひのまゝにやすやすこが

の岸にいたりつゝかの岸にいたりけり

船のゆめ

三味 本調子

こがれこがれてあふせはひろふ、たのしむ中になんのその 合 人目つゝみのあらば  
こそ 合 うれしい世界に住みなれて、ながれわたりの船の内それも、浮世うかへる  
にも、しかじこなきてはこゝぎす 合 手事 ゆくゑいつくこしら浪の、夜の席に思ひ  
寝の 合 夢をうつゝに驚かす 合 風は涼しきかちまくら

●こ之部

古道成寺

三味 三下り

昔昔この所にまなこの庄司といふものあり、かのもの一人の娘を持つ、又その頃  
奥よりも熊野へ通る山伏あり、庄司がもとを宿と定め年月送る、庄司、娘籠愛の  
あまりにや、あれなる客僧こそ汝がつまよ夫とたはむれしをば、幼心に誠と思ひ  
あかし暮して 合 おはします 合 させてその後夜に夜ふけ人静まりて衣紋つくろひひんか  
きなで、忍ぶ夜のさはりはさへた月影ふけ行鳥がね 合 それにいやなは 合 犬の聲

ふこ之部



ぞつとした人目忍ぶのうやつらさ、せきくる胸をおし静め彼客僧のそばへ行き  
 いつまでかくておき給ふはやくむかへて給はれと、じつとしむればせんかたなく  
 も、客僧はよれつもつれつ常陸帯ふたゑまはりに三重四重五重なまきまいて  
 はなちはせじごひきごむる、さるにせられぬ我が思ひ、お馬つなぐはそりやうそつ  
 きよ、ごても寝よならはてもろとも縁は朝顔浅くとまよ、せめてひこ夜はね  
 て語ろ、後程忍び申すべし、娘まごこ、嬉しげに一間の内にと待ちあたる、さて  
 その後にすましたりと客僧は、夜半にまぎれて逃げて行く、幸寺をたのみつ  
 しばらく息をぞつぎあたる、所へ娘立ちもどり、ゆる腹立ちやはらたらや、わ  
 れをすておき給ふかや、のうのういかに御僧よ、何國までもれつかけ行かん、死  
 なばもろとも二世三世のがすまごころれつかくる、折ふし日高川の水かさ増さつ  
 てこすへき様もあらざれば、川さ上下あなたごなたご尋ね行きしが、毒蛇ごなつ  
 て川へさんぶご飛び込んだり、合さかまく水に浮きつ沈みつ、紅の舌をまきたて燄  
 をふきかけ、ふきかけ難なく大河を泳ぎこし、男をかへせもごせよと、このめ

ん廓かこの客殿くるりくるりと、追ひめぐり追ひめぐり 猶々怨、居丈高に飛  
 びあがり、土を穿つて尋ねける 住持も今はせん方なく釣鐘をれろし隠しおく  
 尋ねかねつ、御君は鐘のおりしをあやしみ、龍頭をくはへ七巻きまいて尾を持つ  
 て、たけは鐘は則ち湯ごなつて遂に山伏とりおはんぬ、なんぼうおそろしき物  
 語り

狐會

三味 三下り

いたはしや母上は 花の姿を引きかへて 合しほる、露の床の内 智慧の鏡もかき  
 曇る法師にまみへ給ひつ、母を招けばあごみ返りて 合さらばごいはぬ 合ばかり  
 にて、泣くより外の 事なき野越の山越の里打ち過ぎて 合来るは誰れ故 合そさ  
 ま 合ゆゑたれゆゑくるは 合くるたれゆゑ 合そさま故 合君は歸るがうらめしやいの  
 ふやれ 合我が住む森にかへらん、我思ふわが思ふ心の内は白菊岩がくれ、つたが  
 くれ、しの、細道かきわけ行けば、虫の聲々おもしろや 合ふりそむるやれふりそ  
 むる、やれふりそむるけさたにも 合けさたにも 合所はあごもなかりけり、合西は田

之部



の畦あふないさ、谷峰しどろにこるゆけ、あの山越えて此の山越えて、こがれ  
こがる、うされもひ

小袖物狂

三味 二上り

戀よこひ、我なか空になすな戀、こひ風が来ては袂にかひもつれ、思ふ中をは吹  
わくる、あら心なの嵐につれて、裏吹かへす紀念の小袖、見るに思ひの増ゆるに  
こそ狂すれ 合くるふは誰うや我はそも、安部の保名がやすからぬ胸にせまりし敷  
々よりも何國をさして和泉路やよるべの水の泡沫に、たよふ姿みだれ髪、素袍  
はかま踏したき、うかれ歩行を現なき 夢にも更にしらん芙蓉の花の顔ばせ姿は  
及びなき吉野はつ瀬の遅さくら更科越路の月ゆきも眺めはるるか下てる衣通り、  
神の縁しのさかさこは、我戀人のあたしなか、仇ならぎりの言の葉を、思ひやる  
さへ悲しけれ 合更ゆく鐘も別れの鳥も一人寝る夜はさあらぬ者を、柳の糸の亂れ  
心、いつく忘りよ、いつの春風花のゑん、花のゑんや稀にあふ夜は寺々の鐘つ  
くに寝られぬいさ淋しき旅の空 夜さの泊りは何處が泊り草を敷寝の広まく

ら葉をこのく幕の内むかし戀しき面影やうつ移り香の、其睦言の露ふかく  
立寄見れば萩すき尾花まじりに招く手を拂ひ退けては彼所に茂るさかきの枝へ  
紀念の小袖打させあれく枝に床しき人は見えけり嬉しやこて登ればさかきの枝  
は身を通し、愛着は胸を焦す是はそも如何あさましや詮方なみだに泣しつむ

こんきやう寺

三味 本調子

去程にこんきやう寺のこん經きん經法印が座の正中につゝこ出て、こんきやう寺  
のこん經文行法院が法力をあらはした目にかへ奉る御寶前に、頓て壇を飾りけ  
る、八百の燈明の油には、白胡麻がらやら黒胡麻がらやら眞胡麻がらやらいぬ胡  
麻がらやら胡麻がらくひこまがら、まごまがらの油をたてられたり、扱にうも  
くには珍敷一べんへぎなが片干はじかみ、また、ひ摘蓼つゝ胡椒、野撫子野石竹  
菊きりく三菊きり是を合せて六菊きり切て掛たる幣帛は、大奉書中奉書小ぼう  
しよ、扱又本尊に掛られしは、のら如來く三のら如來、六のら如來、是を合せ  
て十二のら如來又合せて廿四のら如來の眞言に向ひの長押の長なきなたは誰が長



押のなが長刀ぞ、兵部が前を刑部が通る、兵部が屏風を刑部が持すはほうずにかはせてしやうぶがぼうずの屏風にしよ、向ひの山の鶴くくく鶴首は白鶴首かあひ鶴くびか、眞黒くろく鶴くびをひつ立ふり立祈れ共、少しも験は無かりけり、僧は大きに赤面して、重ねて奇特を見せん迎袈裟も衣もおつ取おるてな、殿様の小長袴、武具馬具く三武具馬具これを合せて六ぶくばく、折敷に箸百八十せん、天目百ばい茶百ばい棒八百本立ならへ責かけのみかけ祈れごも、され共験はなかりけり、僧は大きに怒をなし、實に我とても上方僧、書寫山社僧の總名代、今日のそろしやは書寫じやうく、しよたいも世帯も是までかと錫杖がらがらざくく、こ、振かけく祈れごも些もそつとも験も無しいさ、法華經、陀羅尼ほんだいで二十六祈りける、實に御經の功力にや、大願成就ありがたしこ、僧はくゞりにくい齋まごくゞつて、裏の古胡桃の水の古伐口のふる枝の、引ぬきにくひを引拔て、新茶たてう茶たてう、青茶たてう、茶たてう粉茶たてう茶たてうとはつほのしよらちは、らりるれろ

五尺手拭

三味 本調子

五尺いよこのてぬぐひ、五尺てぬぐひなかそめて合おれにいよこのくれうより、たれにくれうより、やどにたけ合やどがいよこのよければ、やどがよければ名もたぬ合佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ合橋をいよこのかけふやれ橋をかけふやれ船橋を合はしにいよこのしたなる橋のしたなる鶴の鳥が合小鮎いよこのくはへて、小鮎くはへてふりしやりこ

戀の旅路

三味 二上り

風さそふ、初ねの床の情より、そるに迷ふ心もふかく、約束の、日をばくるわの輪のうちに、双ふ矢筈の紋ごころ、縫てふ鳥の翼もほしき、いつそ斯ふか言ぐさに、露のたまぐさ繁々の、便りもいと、懐敷合思ひまるらせ候べくこの、しめしは仇に煎じ茶の、かはらぬいと千代こめし、松にかゝれる蔦の紋、忍びて出る谷のこへ、解おびの縁や夢の世の契り

言葉じち

三味 二上り



江戸むらさきの小むらさき 合可愛さめぐる盃の 合若々しくも葉がくれに心がす、  
く風呂浴衣 合算木崩しの羽織をも 合露にぬれなす隠し藝、ハツの太鼓の 合やつの  
太鼓の言葉トち

こゝろばせ

三味 三下り

逢ふといふも、別るゝといふも、皆一すぢの、せめなれば、何をかさして歎くら  
ん、兎角いのちの有るうちは沖のふね情の風をまつにこそあれ

こゝろいさ

三味 三下り

梅は咲かねど鶯の、折々通ふこゝろいさ、そうじやといな 合のきはこのはのばら  
ばらこ、しぐれになしたこゝろいさ、そうじやといな

戀ばなし

三味 三下り

折節に、空もあやなし臘夜や、忍びて通ふ立ぎも、しづまじくらの戀ばなし、  
好た男の噂して、寝るも寝られぬ氣まゝ酒なさに義理は有ものを引にひかれぬ  
三味線の、いちこ添ふこ二世かけて、調子あはする三下り、逢へば嬉い顔見るけ

れど、別れ思へば逢はぬがましよ逢はぬがましよ別れ思へばあはぬがましよエ  
始めあらずばなかくに

こはんかう

三味 二上り

駒とめて 合猶水かはん山吹の 合色に迷はぬ人もなし、秋はひさこの生るものを 合  
君の恵みを 合抑くなる扇の上に載す花の香の 合ゆふがほを見つるにも 合千とせを  
契るためしかや

五大カ

三味 二上り

一筆かきそむるは、懷敷さのま、 合日々に思ひ参らせ候べくと別より程はあらず  
候へど、思ひ寝にする一人寝の、我は心も目もあはず 合たばこ戀草ゆんご成る 合  
去し御見にうつりのみ、暮し候、折からの暑や寒やの起臥に、風なごひかせ給ふ  
なよ、さゝをひかへて身の養生、是第一にたのみいる 合よじなし草のよしやよし  
なま中まみ物思ふ、たごひせかれて程降るごとも 合縁ご時節の末を待つ、何ご  
せう 合互ひの心打とけて上へは解ぬ五大力、さは去ながらかはる、色なき御風情

こ 之 部



やがて逢をぞへ語ろぞへ惜き筆こめ候し

此 さま み

三味 三下り

淵や瀬ご、かはるに愁さあだしよを、猶川竹のうきふしも、一ツ二ツやつい三年  
合 寫しもせめにのべ鏡、エイ耻かしい、なんの枕に嘘つかん、其夢さへも昨日の  
むかし

腰 づ け

三味 二上り

天の戸の、明るや雞の聲たかく 景色にきはふ里の香 我も少し人真似の、團子  
も時の席まどり、一ツくれよこ云ふれ客を 我方人と有難く、半分にても言の葉  
の、逢ふせまつの深みごり、濃も薄きも取交て 千世の榮ゆを頼もしく 日本一  
と名づけ申さん

こと ぶ き

三味 本調子

明渡る、空の景色も麗かに 遊ぶいと遊なごりの雪こ などを霞にこめてや春の  
風になひける青柳すがた 緑りの眉が朝寝の髪か、好た枝ぶり慕ひて薫る、すか

いで是が梅の花やごる、うぐひす、きの合ふた同士、かはらで俱に祝ふ壽

こ す の こ

三味 本調子

浮草は思案の外誘ふ水、戀がうゆ世か 浮世が戀か、一寸聞たい松の風 問へ  
と答ず、山時鳥 合 月やは物の、遣るせなき 瘡に嬉き男の力じつこ、手に手をな  
んにも言はず、二人して釣蚊帳の紐

●て 之 部

出 口 の 柳

三味 本調子

たてまつるヨ奈良の 合 都の八重ざくら 合 サイ 合 今日九重にうかれ来て 合 二度の勤  
めを島原の 合 ヨ 合 ヨイ 合 サヨ 合 出口の柳ふりわけて 合 戀と義理とのヨイサヨふたへ  
帯、結ぶ契りは、あだし野よササ露の 合 うき身を誰ゆゑに、サイ 合 世わたる船の  
かひもなや 寄るへ定めぬ海人小舟、岸にはなれて便りなや 島がくれ行磯千鳥  
合 二上り 忍び寝になく憂きなみた 顔が見たさに又此處へ 合 木辻の里の朝をみに、  
菜種やけしき花の色、うつりにけりな徒らに 我身はこれのふ此姿 合 つれなき命

こ て 之 部



ながらへて、又此ころや忍ばれん 忍ぶに愁きめせき笠、深き思ひぞせつなけれ  
 本調子 今は大鼓もなりやみて 貫ひし文の數々も盡ぬ 合 あはれをヨイサヨ身に受  
 て 合 せめて日那御恩ごく 報せん爲のあひの山あはせましたや若さまに 合 別れた  
 まひし心根を 思ひやられて今こても 昔わすれぬ貫ひ泣 合 ヨイサヨ 合 合  
 る哀れは又の夜に、來るまどきはあつくわん曲輪の間夫狂ひヨ 合 たゝりをなすな  
 ヨ御祈念ご敬つて

蝶の名残

三味 二上り

君が代は 合 千代に八千代と限りなき 合 都の春の長閑さに 合 踊りあるくや蝶々の伊  
 違な姿の色香に愛て、たこへ浮名の立ともほんに、何と鳴子や鈴の音 合 互ひに負  
 め浮氣同士、忍ぶ絞りの頬かむり、雨の降る日も風の夜も、君ゆる成らば歩蹴足  
 合 三下り 登りつめてはせき留られて、憧れこがる、緋鹿の子や 合 みたれ初にし戀こ  
 ろも、今はあた成れ思ひの種と捨ててもおかれず又取あげて 合 エ、何じやよら憎ら  
 しい、いとゞ名残の盡ぬてふく

光殿司

三味 三下り

吳竹の伏見に世々をかけまくも 合 なはんの筆のあとたれて 合 なれに問はまじ猫も  
 やよ時や知るらん妻こひの借かたいそた太ゆうトに 合 てうでんすこは廓のここば  
 合 粹にならんせ 合 土人形 合 うまれかはりし卯の花月の 合 うぶ湯は甘ちや花のかき  
 合 けしやけんげの殿づくり

あ之部

葵の上

三味 三下り

げに世にありし古へは、雲上の花の宴 合 春のあしたの御ゆふになれ 合 仙洞の紅葉  
 の秋の夜は、月にたはむれ色香にそみ 合 はなやかなりし身なれごも 合 衰へぬれば  
 朝顔の、日蔭まつ間の有様に 合 只いつとなきわが心、ものうき野邊の早蕨の、鶯  
 え出でそめし思ひの露 合 かゝる恨にうき人は、何を歎くぞ葛の葉の 合 もつれもつ  
 れてなあふ夜はほんに 合 憎くや憎くやはとりかねばかり 合 外にねたみはなきうな  
 なきぞ 合 ぞんなれたねのかり寢の夢か 合 我は胡蝶の花すり衣 合 袖にちりく



涙合 びんこそすねてもはなれぬ對、しんき昔のあだ枕此の上はこて立ちよりて、今  
 の恨みはありし報、しんいのほむらは身をこがす、思ひしらずや思ひしれ 恨め  
 この心や荒うらめしの心や、人の恨の深くしてうきねなかせたまふとも、生きて  
 此の世にましまさば、水くらき濱邊の螢の蔭よりも、ひかる君は契らん 妾は  
 蓬生のもごあらざりし身となりて、葉末の露と消ゆもせば、それさへここにうら  
 めしや、夢にたにかへらぬものを我らざり、昔語りとなりぬればなほも思ひは増  
 す鏡、その面影もはづかしや、枕にたてるやれ車、うちのせかくれ行かんこて 合  
 いふ聲ばかりは松吹風いふ、聲ばかりは松吹風さめてはかなく成りにけり

秋の七艸

三味 三下り

老ゆく末は、我のみろ見んしめゆひし、我なでこの時まち得たる 盛り嬉しき  
 女郎花、きやしやな姿を思ひの種に、招く尾花が袖の露、干さで片しく身はいつ  
 か、寢ての朝顔なほ床し 誰がぬきかけし藤袴をこ、問へば紫ゆかりを留て、移  
 りやすきを宮城野の萩の下葉のした懂れ、恨みがちなる心の底をほんに葛花いろ

をも香をも、知る人しらぬ、朝ほらけ

扇 盡し

三味 二上り

花の色はうつりにけりな徒らに、是見よかしと殿中で、互ひに濡し袖あふぎ 合 顔  
 はひあふぎ袖扇、名も岩本の御社に 合 ぐぜつ扇の貴冷扇、なか四座あふぎ八重ひ  
 こへ、千代の舞鶴うつし繪や 合 扇の数は盡せねど、いつけ開けば天下みな、春な  
 れや萬代の猶あんぜんを目出度けれ

あづまの旅

三味 三下り

都をば青葉と共にほこぎす 合 なきて東の旅ごろも 合 つまし無ければ富士の根の  
 雪の肌へも床敷て、うつと身もよもあられ酒、何とうき世じやないかいなア

秋の扇(十二曲の内)

三味 二上り

儘ならぬ、浮世の義理を恨みなる、粧ひあつき我扇、月よ花よこあふがれて最も  
 涼しき君が手を放れもやらで縁しにも、愁や嵐の時しも秋風に、吹分られて枯が  
 れなれど過し、扇にのこる文そら嵐がふき成らば、いつも變らぬ袖の移り香



秋 の 夕

三味 三下り

百六十

秋はたゞ夕間暮こそ只ならぬ、野邊の尾花の袖の露、妻乞ふ峰の鹿の聲、合こり集めたる淋しさに、柁木のかづら、くる、夜に有るは小簾まき庭にたち、月をも待ぬ身にし有らば、何に紛れん秋の夕暮

有馬富士

三味 三下り

恨みは人をも世をも、く、思ひおもはじ、只身一ツ報ひの罪やかずくの、浮名に立しさんけの有さま、岩もる水の思ひと成て猶あたし野の露なみだ包めど餘る世の中、昨日の花は今日の夢、おんそろかぬこそはかなけれ、合身の憂きに、合人のつらさの猶添ひて、忘れもやらぬ我れもひ、せめて屢しは、合ごまれかし、合梓の弓にたつ矢の是まで現はれ来るぞや、ア、なつかしや今とても、忍び車の我すがた、合わがすがた、合踊り狂ひし有さまは、哀れも又淺ましや、合世の中は廣い様を狭ひよの、にあひの、つまく、いこゞ太鼓の音、ごんぐ、もよし、ごんぐがらが、太鼓の音もよしやつとせ、合似あいの、つま、つま、いこゞ太鼓のね、ご

んぐ、もよしごんごろく、合ごんごろご、合つくぐ、せんつくごんがらが、たい

この音もよしやつとせ、踊り狂い、合ふし沈む

秋 の 旅

三味 二上り

されば儘には成らぬが浮世、難波に残す、女郎花、合くねる波路の船の内、合月は辛氣の種じやたねじやいな、合西に咲花みなみで開く、きたのに稀なほご、ぎす、合今の一聲松しまの、合月は辛氣の種じや種じやいな、合戀し床しは夜毎に増るそれより外の、柵は、合飽ぬ中さへ儘ふらぬ、合ごうで辛氣のたねじや種トやいな

吾妻獅子

三味 本調子

昔より云ひならはせし、東下りのまめ男、慕ふ旅路や、松が枝の、合富士の高根に白妙の、合花の姿に吉原なまり、君が身に添ふ牡丹に馴て、己が實貴の花ごのみ、箭竹心も憎からず、合思ひおもふ千代迄もなさけに、合かざす後朝に、合糸竹の心亂れがみ、合うたふ戀路や露そう春も、くれ竹の、かさふ扇たうつす曲、合手事きぬた、合花やかに亂れみだる、妹脊の道も、獅子の遊て幾千代まで、合かはらぬ色やめでたけれ



前まへびき 釋迦しやくぢやに提婆ていばや鯨くじらにとやちほこ、月つきにむら雲花くもがはなに風かぜ、國くにに盜賊家たうさくぢやには鼠ねずみ、膏こうは天井てんじやうをぐわらくと仲間なかまねづみを呼集よびあつめ、角力かくりき取とやら踊おどるやら合あちゆつちゆでせい、五百七十七ごひゃくしちじゅうしちまがり、猫ねこのねの字じもいやを候さうら合あ先まへは梁越りやうえつたへ、中なかにも鼠ねずみの大おほ將しやうは、天井板てんじやういたの透間すうまより、下したの様子ようしよを窺のぞへば合あ夜よもとんくご更まわたり、人もしづまる行燈ぎやうとうもしめる、さらば是こゝから座敷ざしきへ下くだやう、皆みなこいご打うちつれて、柱はしらや合あ障子しょうじをこそくくごつそりくと、下くだり描えがへば、大將耳たいしやうみみをよぢ振ふるて、こりやく手て下の鼠ねずみ共ども合あ十四五正じゅうごせいは茶ちやの間料理場まかりやば臺所たいしよ、山葵やまわし擦すりに近寄ちかよるな、走樋はしひのものに水みづ壺つぼあり縁えきをつたふて迂まがるなよ必ずく忘わすれても、棚たなの道具どうぐを引ひくつし、飯焚いひたか婆ば々々を起おこすなよ扱まて又齒またはふしの達者たつしやなもの共どもは、納戸なうどへはいり簞笥たんす長持ながぢかちるべし、尾お長の冗ひさは行燈部屋ぎやうとうべ、油あぶらごくりごくりに尾おを入れて、随分ずいぶんあぶらをねづるべし、扱まてまめねづみの奴やつばらは、格子かぢ子この上に釣つり九蕃椒くさうじやうかちるべし、はつか鼠ねずみは化粧けしやうの間ま、いつもいつもの鬘まん臺たいかちるべし、我われはこれにて休やすはんご、違ちがへう上ありける合あ此所こゝにこりく

彼所かゝにこごくくわつたりく合あかゝる所ところへ二三正息せいそくを切きて駈か来きり合あさあく大おほ事ことが起おこり候さうら、私共わたくしどもが料理場りやうばの、肴戸棚さかなどをかちる内うち、臺所たいしよに大騒動おほさわうどう一寸いっしんのぞひて候さうらへば、赤あかまたらの大猫おほねこが、尾長おしながの首くびすぢ引ひくわへ、さやつご一聲いっせい鳴なた計はかりり、後あとはこりく恐おそろしや、片時かたときも早はやく落おたまへご申上まをされば、大將胸たいしやうむねさはぎして、やうこそ早はやく知しらされたれ、それが誠まことのちうくと、云いひ捨す二階にがいへ上ありけり

あ い の 山

三味 二上り

もとは浮氣うきであいそめ川の、深ふかふ成なほご、逢あはれはせいで、越こにこされぬ人目ひとめの關せきよ寒さむの、師走しうそも日の六月ひのむいも、愁さむひ勤ごんめに日ひを暮くしやるが顔かほにほそりが可愛あひまや見みゆる、思おもや二人ふたりが生いながらへて、居ゐるも不思議ふしぎの内うちなるが、久ひさしぶりにてあいの山やま、逢あに來きたさに三ツつきの合あ樟かぢは契ちぎりのたがやさん、今いまはひごへに添そはれもせぬが何なにのかみ駒こまのばち當あり、三さんは切きれても二世にせいの縁えき、一期いちき離はなれぬ心こゝろぞや、嬉うれしうござんする合あこちの正ただたい無なが辻つじをくごき連つだちに見付みつけられて笠かさもかむつて逃にふかの合あ懸かが商賣しょうばいなれば、指さむさとは無なけれぞさ、きんさんに問夫もんぶがつ



いて、淨名立るが迷戀、通ふまひぞや、あつくわん曲輪の馴染はな、**我身の仇**  
の花衣来ては袂の雨やさめ

青 簾

三味 三下り

つまさるゝ、身こそしるけき昨日けふ 合まげ節 あすしのかはの 合初むかし 濃きも  
薄きもかつ山の 合さる 其かはうひのね亂れ草の 合たの思ひの風さそふ 月が鳴たか、  
鳥が鳴たか積りやはせん卯の花の、雪に搦ん青すたれ

明 の 鐘

三味 二上り

欺そふと、思ふても見る文はまじよ、いつその罪に嵐ふく、そら恐ろしや末かけ  
てかはす、枕の何時はさか、辭になりたる身のつらさ何に譬へん、秋の日の、照  
ふり無に通はんす、暖めてやる床のくだ、其豫言の有ものを、比翼の契り告わた  
る、夜はしやんくゝと明の鐘

仇 まくくら

三味 三下り

身をかへて思ふ人には、邂逅にれもはぬ、人のしげくゝと、曲輪のさとの憂きつ

こめ寝ても覺ても苦になつて、可愛男に逢ひこて見こて、はまりやすきは粹のふ  
ち、沈むものうと思へばさいな 合 ほんに不粹がまじとや者、心知らずや秋の空

姉 妹

三味 三下り

花鳥の、名にくらぶれば梅は先花の姉きみ櫻にいろの 合 春をふくむる山ほとゝぎ  
す 合 今一こゑを待ねやの友 合 たたく水雞に明ゆく空の、野邊になまめく女摩花  
菊の下露くむ川水に 合 二上り 鴛鴦の思ひ羽妻とふ千鳥千代の契りは弱竹の、姫松い  
まはろうちやう 合 なにたつまでも、立まぢること、都なりけり

有 馬 じ

三味 本調子

風の手<sup>て</sup>に打<sup>つ</sup>や鼓<sup>つ</sup>の、瀧<sup>たき</sup>なみに、松<sup>まつ</sup>のしらべの 合 音<sup>ね</sup>そへて、狩<sup>か</sup>出<sup>だ</sup>すしゝの數<sup>かず</sup>々は 合  
雪<sup>ゆき</sup>に妻<sup>つま</sup>乞<sup>こ</sup>ふ聲<sup>こゑ</sup>々の、紅葉<sup>もみぢ</sup>の色<sup>いろ</sup>にひるがへる 合 旗<sup>はた</sup>さし物<sup>もの</sup>や飛<sup>と</sup>道具<sup>たぐい</sup>、弓<sup>ゆみ</sup>は袋<sup>ふくろ</sup>に太<sup>た</sup>刀<sup>た</sup>は  
鞘<sup>かば</sup> 合 二上り 治<sup>ち</sup>る御<sup>ご</sup>代<sup>しろ</sup>にあいたけの、千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>に八<sup>やち</sup>千<sup>せん</sup>代<sup>よ</sup>も盡<sup>つ</sup>ぬ言<sup>ことば</sup>の葉<sup>は</sup>

あ や ぎ ぬ

三味 三下り

うぐひすも都<sup>みやこ</sup>の春<sup>はる</sup>にあいたけと、きは淀<sup>よど</sup>川<sup>がは</sup>へのばり舟<sup>ふね</sup> 合 さゝへられたる北<sup>きた</sup>風<sup>かぜ</sup>に、

あ 之 部



身はまゝ成らぬ丸太ぶね 岸のやなぎに引こめられて、歩み習はぬ陸路をも、上りつ戻り幾たひか、一夜をあかす八軒家 さこねを起す網トまの、告る鳥か寒山寺つきぬ、話のたねとなりけん

青 梅

三味 三下り

また青き 梅にこゝろをすい取られ かんざし落し舌つゞみ 氣もはれやらぬ五月雨のそら

あ さ こ て

三味 本調子

定めなき、嵐にそいて同じ枝に、花か霜の置てもひこり 鳥の鳴聲はるには似ても、落葉いろく 落葉が中にすいた、鳴脚に取あげ髪の いへば姿も大阪云ふ、在所うまれの梅の花

あ や つ る

三味 本調子

浮世とは、誰がならはせしすね言葉、宵の妹脊は單の帯か、肱を枕にあやつるよ 蟬の鳴音に尾花が招く、私やいやいなと駒下駄の 音はいくせの浮名に響く、其

豫言はたしみるごと、可愛き書けばいとし返事女子氣にして男氣の、結ぶ縁のうちかけさへも脱て詠めん千代見艸

秋 空

三味 本調子

月のむかしか、昔の月か、床敷かられて、和田づみの ゆたのたゆたの別もうきに 霧たち 渡る秋空、ア、辛氣の朝嵐 花ハナ紙にも 押さるゝ物を鴈はかはらす來る物を

あ ら 玉

三味 二上り

こころぶきを 幾千代かけて祝ひまるらす新玉つさの 筆にあゆみの面頬さまばゆき日影のごかなる我君が代り目出度

あ つ さ

三ツの車にのりの道、夕顔の宿の破れ車あら、耻かしや我すがた、梓の弓のうらはづに、現れ出し面かけの、昔忘れぬ取なりを、あれあれを見や、蝶は菜種に、なたねは蝶のつがひ放れぬ妹脊の中を見るに妬まし、又うらやまし、我は磯邊の

あ 之 部



友なし千鳥、わくらはに 問ふは嬉しや去きては、問はれて今は耻かしの、もり  
 て浮名のたつか弓さいた、白羽の矢はだて姿、人の目につく徒ら髪、なんはい  
 はれし中なれご 合いま 今は秋田の落し水五月 合あゆ 雨ほど 合こひ忍ばれてサヨへなをく  
 盡ぬ恨みぞや、俱に奈落の苦しみ見せんご、那方へひけば、此方へ引く、行ては  
 歸りかへりては、あら餘波惜や 合あや 戀はくせ者いろくの 合はな 花や紅葉に移り氣の、  
 男はいやよさり迎は、ほんに辛苦も厭はぬ悪性 合その心は水くさい、流れの私  
 が辛抱を、思ふて見さんせ、あた胸熱な 合いやよ夫はそら言よ、袖の時雨は誠  
 の血しほ、染し誓ひも偽りならず、二人かはせし契りも今は、仇ご成行ねたみの  
 程を、思ひ知らずや思ひしれご鐵杖ふり上げてうてうく 合手事 打やうつゝの手  
 にも取れず、露か螢かららくちら 合この手柏てに結びし水も、笹の葉に、又立  
 寄るを、幣をつ取て、きんぜい東方 合ふんはう 南方はつぼう、西方おのく守りのめうぶ  
 の神佛 合ましますば、怨靈いつくに止まるべきご、祈りのられ、かつばと轉ぶ  
 と見ゆるが、今より後は来るまくと、呼はる聲は雲にひゞき、いふ聲ばかりは

雲にひゞきて、姿は見えず成にけり、此あかつきは空吹風、この厥明にそらふく  
 風、夜はしらくご明にけり

浅 間

三味 二上り

恨みも戀ものこりねの 合若や心が變りやせんご 合思ふ疑ひ晴さん爲の誓紙をばな  
 ぜに煙りごなし給ふ怨めしや 合胸のはむらは夜に三度 合こらの思ひは日に千度、  
 煙りくらべん淺間山あれ御覽ぜよ淺まじや 合せめ 邪淫のあつきが身を責てのふ、  
 つゝる、ぎの山の上に戀しき人は見えたり嬉やさてよち登れば思ひは胸を焦す是  
 はそも如何に淺間しや 合花の姿も弱弱々と彼所に立ち、行んごすれば此所に消へ  
 合有か無かの春の夜の、朧月夜にはかなくも消へてかたちは、失にけり

三味 三下り

是は情の仕業やな 合さのみ人にな愁かりず、悲しみの 合涙眼にさへぎりて 合西も  
 東も白波の 合よる邊定めぬうたかたの、いつそ泡とも消もせて、焦れこがる、合  
 身のゆくへ 合青葉々々ご 合呼べごも濱の 合はまの松風音は 合かりし松かぜ濱の 合



はまの松合かぜ音合ばかり、そよこ計りの便りかなと、うらみ歎くぞあはれなる

海士

三味 三下り

かくて海底に飛入れば、空も一ツに雲の波、煙りの浪を凌ぎつゝ、海まんくこ分け入りて、直下と見れば、底もなく、邊り知らぬ海底に、そも神變はいざ知らず取得ん事はふじやうなり、斯て龍宮に到りて、宮中を見れば、其高さ三十丈の玉塔に、彼玉をこめ置き、香花をそなへ守護神は、八龍なみ居たり、其外悪魚わにの口のがれがしや我いのちさすが恩愛ふる郷の方ぞ、戀しき、又れもひ切て手をあはせ、南無や志渡寺の観音さつたの、力をあはせてたび給へ迎、大悲の利劍を額にあて、龍宮城へ飛いれば、合手事 左右へばつこ退いたりける、其際に寶珠をぬすんで逃んごすれば、守護神れつかく、かねてたくみし事なれば、乳の下をかき切り玉をおしこめ、劍を捨てぞ伏たりける、龍宮のならひこて死人を忌ば、あたり近づく悪龍なし、約束の繩を動かせば、人々悦び引あぐれば、玉はしらず海士人は海上に浮び出たり

さ 之 部

西 行 櫻

三味 本調子

九重に咲けごも花の八重櫻、幾世の春を重ねらん然るに花の名高きは、先初花を急ぐなる、近衛殿の垂孫ざくら、合見渡せば柳櫻をこき交て都は春の錦さん亂たり千本の櫻を植れき、其色を所の名に見する、千本の花盛り、雲路や雪に残るらん合 異沙門堂の花盛り、しわうせんの榮花も、是には争で増るべき、上なる黒谷下河原、昔遍昭僧正の手事二上り 浮世を厭ひし花頂山、鶯のみやまの花の色、枯にし鶴の林まで思ひ知られて哀れなり、合清水寺の地主の花、松吹風の音羽山 手事三下り 此處は又あらし山、戸無瀬に落る瀧津波までも、花は大堰川、あせきに雪やか、る覽

三 段 きぬた(十二曲の内)

三味 二上り

糸による、物ならなくに我もちの、心細くも合おもほゆる哉 合本調子 ものこは無しに別れ路の山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰に淋しき 手事五段 ものこはなし

さ 之 部



に冬ぞ来て 山もあらはに木の葉ふり、残る松さへく峰にさびしき

里の曉

三味 二上り

梓ゆみいる方ゆかし夕月の合にはへる春も橋の合夏來にけらし一聲は合山ほと、  
ぎす鳴すて、合あやめも知らぬ鳥羽玉の合闇をもてらす螢火の合其かげさへも陽  
炎の合立まされたる思ひ寝のなき魂かへす 合手事 唐土の其故事の忍ばれて合  
焚ならぬ燈りの末も合妙に薫りし雲の端のいつち行らん、短夜のそら

草紙洗

三味 三下り

あだし心の、雲となり雨となり 合小野の池水、さ、濁りしに我黒髪わがくろかみの風かぜに合吹は  
れて、元よりすめる浮くさの月

さ、やき竹

三味 二上り

忍ぶこは、誰がいひ初て戀すてふ 合人知れずして思ひを懸る、唐土人も同ト身の  
合うさふし繁き、さはりも有れば、遠く隔て、さ、やき竹に、そつと吹こみ吹こ  
むこころを、耳にくち見かはす顔の目もさが否の返事して、粹な心が、知るわいな

三段 獅々

三味 本調子

八千代歴るこも變らぬ色はへ、松に藤枝の其面影を 合見るに一入、二しう三しう  
幽艶ゆうえんやこにかく、思はる、合花は吉野よ紅葉は高雄、松は唐崎かすみは外山合  
つも常盤の、ふりはさんさ幽艶や、こにかく思はる、手事

櫻 盡

三味 本調子

飽でのみ花に心は盡す身の思ひあまりて手を折てかろふる花の品々に、わきて揚  
貴妃いせ小町誰が小さくらや、見ざくら、年も若木の姥櫻、我れやこふらじ面影  
の合花の姿をさきがけて、いくへわけ越し三芳野の合二上り 雲井に咲る山ざくら合  
霞の間よりはのかに、見そめし色の初櫻 合絶ぬながめは九重の合都がへりの花は  
あれども、馴しなれし、東の江戸さくら 合名に奥州の花には誰もうき身を焦す塩  
籠さくら、花の振袖八重一重したには無垢の緋さくらや樺に淺黄の色まぜてわけ  
よき緋の糸さくら 合引手あまたの身なれども責て一夜の戯れに合あひをすめよ  
熊谷の、猛き心は虎の尾の、千里に通ふ戀の道 合忍ぶに愁き有明さくら、君が情

さ 之 部



はうづ櫻合よしや思ひは桐ヶ谷合浮世を捨し墨染さくら、昔を忍ぶ家さくら、花の  
さばその淋敷に月の影さへ遅さくら合三下り 闇はあやなし紅梅さくら合色こそ見ゆ  
ぬ折袖も、匂ひさくらや菊さくら合花の白露春合こに、打拂ふにも千代は經ぬべし

櫻川

三味 三下り

年を経て合花の鏡合なる水は、散かゝるをや曇るこいふらん、あだに、散にし  
花ふらば、落ても水のあわれさは合いさ白浪のあだし身は、はかなき程をうらや  
まれ露さかすみを、憐みなげく、末のしがらみ誰か知る

里の風

三味 三下り

物れもふ心も空のかすみかな、晴ての中は憎からぬ、我はつま待在明に、鳴くか  
鳴たか時鳥合星ばかり成る夏の夜に、闇をぬひ行はたるさへ、手に手をとりて、  
草の床まくらへ通ふ初あらし合こがる、身には色かへぬ松の、葉越にひさふしの  
斷離合や冬の月誰にすねてかア、何の、そんな中ではないものを

里の春

三味 本調子

よしのさを、麻あたりの菜種さへ合雲井につく花の色、もれて浮名が立とても  
よしや厭はじ身一ツに合情を盡すつき櫻、心残して行鷹の合くれのむつ言いさ、  
らば、戸さぬ御代のうるほいやいこしつぼりさ降る雨は春の浮艸うき臥に手  
二上り 嘘も誠合もいつはり一ツに淀む淵の水おもひの空のもや晴て、ところ斑合  
明る夜にいさゞ、澄さる鐘の音は、幾たのもしさ里の春

小夜千鳥

三味 本調子

つゝむに餘る袖の雨、晴る間もなき胸の闇、いふに云はれぬ私が苦の、放れぬ鶯  
鶯の思ひ羽は、何の報いか神ちからにも、こりやまあどうじやぞいな合父よ母よ  
と鳴聲さけば、妻にあふむが移せしここのは、エイ何じやいなつがもない合世に  
も因果な者なら私が身トや可愛男にいくせの思ひ、あつて何じやいなつがもない  
忍び寝になく小夜ちごり

さゝのつゆ

三味 本調子

酒は計り無しこのたまひし合聖人は上戸にやましくけん合三十六の矢有りと練

之部



めたまひし 合佛は下戸にやおはすらん、何はこもあれ八雲たつ出雲の神はやしを  
 じの、酒に大蛇を平げたまふ、是皆酒の徳なれや 手事二上り大石さづける畏みも帝  
 の酔のすゝめなり 合姫の尊のもち酒を、さよよさゝこの言の葉に傳へくして今世  
 の、人もさこしめせさゝさこしめせさゝ 手事三下りりうはくりんや李たいはく、酒  
 を呑ねば只の人 合吉野龍田の花紅葉、酒がなければ只のこ 合よいくくのよ  
 いやさ

嵯峨の春

三味 本調子

こそ見にし彌生なかばの嵯峨の花 合嵐の山の山櫻、いろかたへなる花の園、散り  
 ても残る心の花に 合思ひ亂る、うき身にも又繰り返す此の春も 合くむやいづみの  
 大井川 合浮ぶ筏の行く末は、人の手いけこなる花を 合怨むやおのが迷ひをば、は  
 らふはのりの御誓 合三下り 嵯峨の寺々廻らば廻れ 合水車のわのりせんせきの川波 合  
 川柳は水にもまる、 合ふくら雀は竹にもまる、都のらしは車にもまる、茶臼  
 は挽き木にもまる、 本調子手事 我は色香にもまれもまれて玉の緒も、絶ぬばかり

に思ひ川床にふちなす夜半のきぬぐ

さよかぐら

三味 本調子

千早振神のれしへのあこたれて、四海波間も静かなる松の嵐の音までも、さよふ  
 けわたる神かぐら 合吹く横笛の音もさへて、歌ふ聲々おもしろや、四方のけしき  
 もあさくらに、なほ音楽の袖袂、ひるがへしひるがへし昔もこゝにかくあらん、げ  
 に天てらす日の本の神と君との隔てなく、御代も榮へも宮柱、ふとしきたて、敷  
 高の大和島根のそのまゝに、月の恵みも光うと夕日がくれの雲の端の、たなびく  
 天の橋立や、そも神歌はうばたまの、我が黒髪も亂さずにもずび定めぬ玉くらに  
 まようりんねのこひのたね、かはすこさばのかずくを濱の真砂にさつこひく、  
 打白浪やうきすの岩に、はをやすめひよくの鳥のいもせごと、人目忍ぶやこよひ  
 扇のかなめの契り、手にくるくこひでりがさ、かさすや加賀のあふぎ笠、くるわ  
 やはん女かねやの花扇、めぐるゑにしは扇のわかれ、風にちらく散るは櫻か嵐  
 風よきてふけ、花の契りもかはひらし 二上り さるほどに床のしたれ露こひて、

さ 之 部



淡路が島の東にもしも海まんくこなんなくに風をつらね、空にかゝれる浮橋を  
打ちわたり打ちわたり立ちまふ雲の袖袂、引くはうしをの時つ風、治まる浪や芦  
原の國と臣民も豊かにて萬歳祝ふ春の聲、幾千秋とつきしなく治まる御代こそ久  
しけれ

さつ ま 獅子

三味 本調子

前彈 ふたばしら遠つみ親のあとたれて、さかはこたてしその峯に 絶せぬ煙干  
代かけて、嵐にはる、霧島の、神のみすゞにことふりて、誠にあまのかごしまの  
足駄の音も高々こつるの丸山頂の 赤きは花の櫻島、磯のおき海苔岩浪の、流れ  
に洗ふさつまぐし 合さけてさかしきふんトんの、獅子の勇みや亂れ髪、影をうつ  
してさびかけり 手事二段 むぞうらじげに百丈の高き上より蹴落しつ 心をはかり代  
々をつき 合そのはや人の手ぶりごと、いはでめぐみの深み草 合いよも 合ゆたかに  
ここぶきは 合千代にやア八千代はふるこもや、うごきは 合せまい君がおさむる國  
じやほごに、

櫻 川

三味 本調子

まへ彈 あら玉の春は氷もとけそめて 合なみの花こそやすらめご 合せんの白浪しげ  
ければ霧 合うながす浮島の 合けにや面白や、昔の春も今も尙 手事本調子 かはらて花  
のうるはしき、水も濁らぬさくら川

櫻 花

三味 二上り

親は田舎に子は島原へ、櫻花 合花かやちりくに、花かや櫻 合櫻花 合花かやちり  
くに

佐 用 姫

三味 二上り

友慕ふ、千鳥鳴かり領布塵し、磯山おろし吹れちて漕ぎ放れゆくこも船の 合から  
や日本こへだて、も元のみなごの心さへ變ることなき縁あらば、中には荒き浪風  
もよしや厭はじ糸竹の 合ふし有ればこそ大ぬさの引手数多も有ものを暫し逢はね  
ば我胸の 合ひね走ひに撞れつ、松浦の山のあこの沙かぜ

狭 小 部

三味 二上り



去年の秋ちりし梢は紅葉して、今將みねに在明の月日はかりをかぞへても、待にかひなき村時雨、時しも分ず降からに色もあせつ、早晚に我袖のみや變るらん、合三下り中本、鳴音を添へてきりくす夜半の枕に告渡る、合嵐の末の鐘の聲、合結ばぬ夢もさめやらぞ只忍ばる、昔なりけり

残 月

三味 本調子

磯邊の松に葉隠れて、合沖の方へと、合入る月の、光りや夢の世を早ふ、合覺て眞如の、合明らけき、合月の都に住やらん、合手事五段二上り、合今は傳たに朧夜の、合月日はかりは廻り來て

三 吉

三味 本調子

ふびんや三吉しく、泪ほうかむり仕て目を隠し、合杳見集て腰に付、身すばらし氣なる後ろかけ、未一度こちら向ひてたも山川を怪我仕やんな、雨風ゆき降り夜道には、腹が痛いさ作病おこし、二日も三日も休んで煩はぬ様に仕てたもや、合毒な物たべぎに腹はしかの用心しや、合千三百石の世とり子が、合蚊の有る腹あてして

黒髪を剃下し、手足は胼に霜ばれて、あられふ物かと式臺に、身を伏しづみ泣出す、合傍に有合ふ一分十三、是たしなみに持て行やと、涙ながらに差出せば、恨めし氣に見返りて、親でも子でも無ならば、病ふが死なふが御かまひない此一分も入ませぬ、馬士こそすれ、伊達の興作が惣領じゃ、母様でも無ひ他人に、金貰ふ筈はない、合胸怒な母さまよふ覺て居やしやれと、わつと泣出すいちらしさ、母は魂消入て、御家の御恩を思はずば、何一人子を手放して何の遣ふ、奉公の身のせつなさと、悶へこがれて泣居たる、合早お姫様の御立と、行列そろへ、合お乳人には乗物に姫様の御機嫌は、最前の自然生めが、合諺おらふと口々に、言立られて泣聲で、坂は照く、鈴鹿は曇る、相の土山雨が降る、ふる雨よりも親子の涙しぐれく出て行く

狭 衣

三味 本調子

一人おもひを枕に語り、せめて頼の、夢さへも、麻の狭衣うちさらて、いと寝られぬ秋の夜の、更てきぬたの音かき聞けばな、月ぞ、合知らする我泪な、合片しく



袖のちぎに、悲く詠めしに、我身の秋はな 手事れんほら 颯と妻戸の時雨は辭よ 合 袖の  
なみたの 露の亂れ髪、ゆふにいはいはれぬ我おもひ

さ ら し

三味 本調子

横の島には晒す麻布賤がしはざは 合 宇治川の 浪か 合 雪かご白妙に、いざ立出て  
布さらす 合 鶴の渡せる橋の霜よりも 合 さらせる布に白み有り候 合 なふく山が見  
候、朝日山に霞たな引景色は、たごへ駿河の富士は物かは富士は物かは 合 小島  
ヶ崎に寄る浪に 合 小トまが崎に寄るなみに 合 月の光を寫さばや 合 月の光を寫さば  
や 合 見渡せばく、伏見竹田に淀鳥羽も 合 何れ劣らぬ名所かな 合 何れ劣らぬ名所  
かなく 合 立なみはく 合 瀬々の綱代にさへられて、流る、水を堰とめよ、流る、  
水をせき留よ 手事 所からごてなく、布を手毎に、まきの里人うち連て、戻ろふ  
やれ 合 賤が家へ

櫛

三味 本調子

あめつちさ久しかるべきあきつ 湖の中に光を天照らす、神のめぐみは千尋ある、

たけのためしも色變へぬ、松の操もとりざりに限りも知らぬごよもの 合 大木が  
中に千早振神を定むる 櫛葉の、香をかぐはしみ神垣に 合 思ひをかけて八雲たつ、  
前調 手事 二上り 手事 散し そのやゑがきをつまごめに、さしもつくりしますらをご、思  
ひしものを浅ましや、心一つを定めかねゆふつけざりのいつまでか 合 ねにたてま  
トご今更に、しでの 合 かまかずとりつけてさかきのかげに身をかくしける

さ 之 部

京 名 所

三味 本調子

殊更かしこき君の御まつりごこ 合 關の戸さぬ折節に洛陽御見物申べく候、皇の  
御宮造りは、申も中々おろかなり、先音に聞へし東山、吉田みかやは、天照す御  
神を始めとして、日本六十餘州の御神を、觀請ありし靈地なり 合 弓手に高き御山  
は、和國無双の比叡山 合 傳教大師の開基にて、唐土の天臺山を寫されたり、中堂  
講堂かいたん堂、麓に山王二十一社、甕をならべて立給ふ 合 二上り めては黒谷填如  
堂、若王トんしや永觀堂、東下りの道こけて 合 祇園の社清水寺、地主權現の花盛

さ 之 部



り、音羽の瀧の白糸を繰返とつ、打眺め、大佛殿は廬舎那佛、歌の中山清閑寺、  
 いま熊野をも打すぎて、いつも秋には有らねども、東福寺にて名も高き通天の紅  
 葉いなり山、咲亂れたる藤の森、うづら鳴なる深草山、伏見の竹田よご鳥羽まで  
 も見ゆて候、扱又辰己は宇治の里、八幡やま崎たから寺、手事松尾かつら梅の宮、  
 御室に近き小塩山、嵯峨や高雄あたご山、太秦北野たぐすの森、鴨川さぶね  
 鞍馬寺、岩くら芹生八瀬の里、いたゞき連し大原木や、薪に花を折そへて  
 思ふ儘には云はれねご、いこもやさしき賤が業、吉野はつ瀬の花よりも、都ろ春  
 の錦なる

きれ盡し

三味 本調子

幾千代と縁を添へし相生の、松と八千代の大内桐民も富田の春毎に、雲にやご問  
 ふ吉野山、咲初る花はさながら埋もれて、雪と見つらん、花兎、落くる瀧の清水  
 に、流れを結ぶ逢阪の、其在原の筒井より倭錦あごたれし、藤谷ぞこの淋敷嵯峨  
 の、定家かつらやよれ纏ふ、鴛鴦の思ひの二重づる、通ふ心ろ荒磯の、なび

く姿や誰が染かけしうへ柳、二人静に忍ぶ夜に、別れを誘ふ、雁金の、夜も本能  
 寺建仁寺、れごや印金、劔太鼓、合くれ竹屋町、節こめて、君に引る、笹蔓の、榮  
 めを謠ふ鶴が岡

菊の露

三味 本調子

鳥の聲、鐘の音さへ身に入て、思ひ出す程泪が先へ、落て流る、妹脊の川を、合ご  
 わたる舟の、楫たに絶て、かゝも無き世ご恨みて過る、思はトな逢ふは別れ  
 こ云へごも愚痴に、庭の小菊の其名に愛て、晝は眺めて暮しも成ろが、夜るく  
 どこに置露の、露の命のつれなや憎や、今は此身に秋の風

金五郎

三味 三下り

笠屋町すぢ千たびも、往てはまた、戻りつ往つ立どまり、坂田藤十郎杉山勘三さ  
 ては玉川半太夫などの、聲を似せつ、相圖や知らぬ、小三ははつご心にこたへ、  
 客のすき間に格子へ出て見れば悲しや、ふる雪の其中に、夜にしよんぼり立す  
 がた、見るに身もよもあられう者か、申々と小聲になりて、一ツ二ツとさ、やく

之部



内に、奥へかりまじよ二階へかろご、杉が呼ぶ聲み、つき抜ぼ、是非もなみだを  
袂につゝみ、後にまいち度、一寸逢まじよ云ふている月あかつきの鐘、さては  
芝居の一番たいこ、聞て戻らぬ夜半こても、情ないやや金五郎は、せつなき戀に  
身をやつし、雨の降夜も風ふく夜半も、かぶご頭巾で顔おし隠し、通ひくの数  
つもりきて、師走二十日の明ばのに、忍びなみだに伏しつむ

きりくす

三味 二上り

世の中に、生ごしいける物ごごに、妬み争ふこと成に此くさむらの蟋蟀、只陸敷  
まじはるは、何哉ゆゑの有やらん、子あり孫あり數々の、其樂みの陸まじさ、見  
るに彌増我きみの 我々如きの宮仕へゆるされ給ふしにやたねく 多き壽は  
代々の榮りぞ頼もしき 合 たごへがた無き我君の、惠みは代々に類るなや、此蟋蟀  
のむつまじく、妬みあらそひ無きごごく、只うち解し君のおすがた

君がはだ

三味 三下り

近江なる筑摩の、祭りはやせなん難面人の鍋の數見んごかこつ言葉の其中に、ご

うでも床し君が肌 思ひをせめてあらくご書てぞ遣らん水莖の岡の茅はら靡け  
や靡け漣に 合 千船百船ごぎ寄する戀は仇なれ夢さめて、またねに月の影もなし

きぬく

三味 三下り

きぬく、明のむつ言今さらに、うきな別れの袖の海 馴染ぬ昔まじじやもの  
合 幾夜かさねし情の末は、恨み焦る、身は戀ごころも 合 せめて一夜は來ても見よか  
しな 合 たごひ逢はきご文さへ見れば身は妹脊の 合 ふみは妹脊のはしご成る 合 花は  
折たし梢は高し心づくしの 合 こころ盡しの身は一ツ、かよふ嵐の夜もすがら

狐 火

三味 本調子

川はつれなや、早曉の鐘の聲、さらばくの聲もたへ行、小田の原 送りかへせ  
ば、ひゑの山風、身にしみて 合 なたねの花のうらがれ 合 けさの別に、月をたもご  
にのこひて、あるかなきかの、しゆびを思ふがいのちさ 合 戀のねぐるま、まわる  
れのこのあれかし、心をのせて、あおふに 合 かぎりある身の、かぎりかしらでか  
ひもなき世と打なけき、なんの因果にしやばにきて、いきてそわる、く身では

之部